みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Malinowski Rising out of Oblivion : The Culture-Contact Studies of the 1930s

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 昭俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004117

忘却のかなたのマリノフスキー
——1930年代における文化接触研究——

清　水　昭　俊*

Malinowski Rising out of Oblivion: The Culture-Contact Studies of the 1930s

Akitoshi Shimizu

マリノフスキーは，「参与観察」の調査法を導入した，人類学史上もっとも著名な人物である。その反面，彼は理論的影響で無力であり，ラドクリフ＝ブラウンに及びえなかった。イギリス社会人類学の二人の建設者を相補的な姿で描くこの歴史叙述は，広く受け入れられている。しかし，それは決して公平で正当な認識ではない。マリノフスキーがイギリス時代最後の10年間に行ったもっとも重要な研究プロジェクトを無視しているからだ。この論文で私は，アフリカ植民地における文化接触に関する彼の実用的人類学のプロジェクトを考察し，忘却の中から未知のマリノフスキーをよみがえらせてみたい。

マリノフスキーは大規模なアフリカ・プロジェクトを主宰し，人類学を古物趣味から厳格な経験科学に変革しようとした。植民地の文化状況に関して統治政府に有用な現実的知識を提供する能力のある人類学への変革である。このプロジェクトは，帝国主義，植民地主義との共犯関係にある人類学のもっとも悪しき実例として，悪名高いものであるが，現実には，彼の同時代人でマリノフスキーほど厳しく植民地統治を批判した人類学者はいなかった。彼の弟子との論争を分析することによって，私は，アフリカ植民地の文化接触について人類学者が観察すべき事象とその方法に関する，マリノフスキーの思考を再構成する。1980年代に行われたポストモダン人類学批判を，おおくの点で彼がすでに提示し，かつ乗りこえていたことを示すつもりである。ラドクリフ＝ブラウンの構造機能主義は，この新しい観点から見れば，旧弊な古物趣味への回帰だったが，構造機能主義者は人類学史を一貫した発展の歴史と描くために，マリノフスキーのプロジェクトの記憶を消去した。戦間期および戦後期初めの時期におけるマリノフスキーの影響の盛衰を跡づけよう。

* 国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words: Malinowski, culture contact, colonial administration, practical anthropology, critique of colonialism
キーワード：マリノフスキー，文化接触，植民地統治，実用的人類学，植民地主義批判

Malinowski is one of the most distinguished figures in the history of anthropology, who introduced the empirical method of 'participant observation'. By contrast, he has been considered feeble in theoretical influence, in which he could not eventually rival Radcliffe-Brown. This representation, which depicts the two founding fathers of British social anthropology in complementary terms, has been broadly accepted by anthropologists. However it is neither fair nor correct; it entirely neglects Malinowski's most important project in his last decade in Britain. In this paper, I will investigate this project on the practical anthropology of culture contact in African colonies and try to resurrect this so-far unknown Malinowski from entire oblivion.

Through the project he endeavoured to transform anthropology from antiquarianism to a rigorous, empirical science which should be able to provide colonial administration with practical knowledge on the dynamically changing cultural situation of the colonies. Although the project was notorious as a worst case of complicity with imperialism and colonialism, it is also true that no anthropologist among his contemporaries criticised colonial administration so severely as he did. I will reconstruct Malinowski's ideas on what and how anthropologists should observe concerning culture contact in African colonies, by way of analysing the arguments he presented to his own students who participated in the African project. It will be revealed that he foresaw and overcame in many respects the post-modern criticisms of anthropology conducted in the 1980s. The Radcliffe-Brownian structural functionalism, when seen in the new light of Malinowski's project of culture-contact studies, was actually a retreat to an obsolete antiquarianism. However, structural functionalists constructed the history of anthropology as that of a steady development up to their school, by systematically erasing the memory of Malinowski's project. The rise and fall of Malinowski's influence in the late inter-war and the early post-war periods will be traced.

1　はじめに
2　人類学史の描くマリノフスキー
2.1　1920年代の革新と戦間期人類学
2.2　戦間期と第二次大戦後の連続性
2.3　断絶した戦間期
3　現実の表象——経験主義の真価——
3.1　戦間期イギリス人類学の亀裂
3.2　構造機能主義者の見たアフリカ政治システム
3.3　1930年代アフリカの文化変化
3.4　同時に描いた二つのアフリカ像
3.5　歴史的評価の変転
4　植民地統治と実用的人類学
4.1　植民地統治への貢献
4.2　回心
4.3　実用的人類学
4.4　間接統治
4.5　人類学の変革——「いま現在」を認識する人類学へ——
4.6　人類学批判
4.7　実用的人類学プロジェクトの進展
5　文化接触へのアプローチ
5.1　弟子たちとの亀裂
5.2　植民地の文化的状況——鳥瞰図——
5.3　文化変化の基点「ゼロ・ポイント」の構想
5.4　真実の過去，幻想の過去，生きている伝統
5.5　歴史的「現在」
5.6　マリノフスキーの歴史観
5.7　文化混合
——文化要素の起源＝所有——
5.8　統合体としての植民地社会
5.9　構造的社会史
5.10　文化接触の三領域
——伝統が析出する枠組み——
6「いま現在の過程」
——マリノフスキーの求めたもの——
6.1　課題と回答
6.2　現在進行中の過程を把らえる
6.3　視野の拡大
6.4　未達成の課題
7　現実批判
7.1　実用的人類学の挫折
7.2　中断した思考
7.3　植民地統治批判
7.4　植民地主義批判
7.5　遡及的批判と同時代的批判
7.6　人類学者の思想的条件
7.7　批判的認識のダイナミズム
——「徹底した経験主義」——
8　実用的人類学の浸透
8.1　応用人類学作業委員会
8.2　戦時下に描いた「社会人類学の将来」
8.3　科学的研究と実用的研究の乖離
9　ふたたびサルベージ人類学へ
——マリノフスキー以後——
9.1　持続する人類学的関心
9.2　ラドクリフ＝ブラウンとオックスフォード・グループ
9.3　パラダイムの交代
9.4　エヴァンズ＝プリチャードの転向宣言
9.5　マリノフスキーのその後
9.6　歴史の書き換え
10　結語
10.1　ポストモダン人類学批判の共犯関係
10.2　歴史研究への転進
10.3　イデオロギーと経験主義
10.4　マリノフスキーと日本の人類学

1　は　じ　め　に

人類学者がみずから書き記した人類学の歴史的回顧の中で，マリノフスキーはおそらくもっともおおく取りあげられた人物である。「参与観察」の調査法は彼の最大の功績であり，それによって近代人類学を変革した。マリノフスキーの考察をこの評価から始めても，人類学者から異議をとなえられることは，まずないだろう。ただし，ストッキングによれば，実地調査の方法については彼の師リヴァーズが，マリノフスキーとほぼ同じ程度に整った形で提示していた。マリノフスキーは自身の貢献を神話化して，提唱者の名誉を独占したという。歴史家の目にはマリノフスキーは脱神話化の対象だった（Stocking 1983）。絵画的な描写による情報の豊かな民族誌は，人類学者の理論的関心が移り変わるとともに，彼らの間に新たな理論的関心を喚起し続けた（モース 1973［初出は1925］; レヴィ＝ストロース 1972［初出は1956］: ch. 8; Leach 1961; 1980［初出は1967］; 清水 1973; Brunton 1975; スパイロ 1990［初出は1982］）。彼の仕事は人類学のコンテクストで受け止められたばかりではない。人類学に対する彼の個性的な営為は，マリノフスキーという人物そのものへの関心を喚起し，民族誌の記述スタイルと権威的な説得力，暴露的に刊行された調査旅行中の日記などを素材として，文学批評スタイルの分析を誘った（Payne 1981; Clifford 1988: ch. 1; ギアーツ 1988: ch. 4; 関口 1986）。

私が関心を寄せるのは，マリノフスキーという人物のコンテクストと人類学のコンテクストとの狭間にあって，どちらかといえば後者よりの問題であり，人類学史の中で忘失されたマリノフスキーの一面である。人あって，マリノフスキーに関する考察がすでにこれだけおおく累積されているのに，まだ再考すべきことが残されているのかと，いぶかしく思うかもしれない。しかし，私の見るところ，マリノフスキーのもっとも重要な，むしろ貴重ともいうべき貢献が，人類学史の中でほとんど省みられることなく，忘却のかなたに葬り去られている。

すでに触れた「参与観察」の調査法，トロブリアンドの民族誌に加えて，家族や言語意味論に関する考察も，マリノフスキーの功績としてよく知られている。しかし，マリノフスキーのアフリカ研究はと問われれば，おおくの人類学者はとまどうのではなかろうか。事情は植民地統治への貢献，実用的人類学についても同じだろう。マリノフスキーについて現在の人類学者が抱いている知識は，その粗密にかかわらず，決して満遍ないものではなく，欠落がありそうだということは，たとえばマリノフスキー

の教育者としての貢献に関してもうかがうことができる。マリノフスキーがおおくの優れた人材を養成したことは，よく知られている。イギリス人類学は第二次世界大戦後に空前の興隆を見ることになるのだが，その主力を担ったのは，マリノフスキーの弟子たちである。そのおおくはアフリカ研究者だった。マリノフスキーの養成した人類学者に，なぜ著名なアフリカニストがおおいのか。この問いが問いとして成り立つこと自体に，すでにマリノフスキーについての知識の偏りが顕れている。彼らはマリノフスキーのアフリカ研究プロジェクトから育っていったのであり，この大規模なプロジェクトは植民地統治と実用的人類学と「いま現在」の現実にかかわるものだった。

少し長い歴史的視野でいえば，イギリスの人類学は19世紀末に，ハッドンやリヴァーズ，セリグマンらによって，人類学者みずからが実地調査を行うという研究スタイルに移行した。彼らはみずからの新しさを強調して，「フィールド人類学者」と称した。彼らは他分野の，おおくは生物学，心理学など自然科学の出だったが，その彼らが初めて大学で人類学の専門家として育てたのが，「訓練された人類学者」(trained anthropologist) と呼ばれる世代であり，マリノフスキーはライバルのラドクリフ＝ブラウンとともに，この世代の旗手だった。「フィールド人類学者」も「訓練された人類学者」も，実地調査の重要性を強調した。しかし彼らは調査地——当時の歴史的コンテクストでは植民地だった——で，眼前の現実を観察したのではない。むしろ眼前の現実を意識的に無視した。後に述べるサルベージ人類学の伝統が，彼らの間にあってもなお強固だった。マリノフスキーの令名もこの伝統の枠内で形成されたものであるが，晩年になって，彼はアフリカ研究の大規模なプロジェクトを実施し，人類学者が調査地で目撃する「いま現在」を研究する方向へと，転換しようとした。人類学者が調査地の現実と正面から切り結ぼうとする，その最初の組織的な試みである。彼はそのために，在来の人類学を批判して変革を求めると同時に，研究対象については，植民地統治への貢献と植民地統治批判という，たがいに反する二面的な営為を行った。実地調査を必須の方法として組み込んだ人類学は，必然的に調査地の状況と密接な関係——批判的にみれば現地を支配する権力との「共犯関係」——に入り込むことになる。マリノフスキーのプロジェクトは，実地調査を介して一層可視的となった人類学研究の一面，学術的実践であると同時に社会的実践でもあるという一面において，新たな実験だった。このプロジェクトの事実が，とりわけここに手短に述べた諸特徴が，マリノフスキー以後の人類学者の描く人類学史から欠落している。それは単なる偶然ではない。イギリス人類学におけるマリノフスキーの影響がかげるとともに，ラドクリフ＝ブラウンの構造機能主義が指導的な地位を確保した。この指導的な潮流の交代

を理路整然とした歴史の発展として表象するためには，マリノフスキーのプロジェクトを消し去ることが必要だった。

1990年代も終わりに近づいた現在，人類学はすでにマリノフスキーから遠く隔たっている。しかし，マリノフスキーの消去は，マリノフスキーにすぐ続く世代の人類学研究のみがかかわるのではない。マリノフスキーの影響を排除して成立した構造機能主義は，この排除を要因の一つとして，さらに次の世代の人類学を形成した。現在の人類学者による研究のすくなからぬ部分が，マリノフスキーの影響を排除した歴史から，間接的であれ制約を被っている。私が歴史の発掘を試みるのは，人類学が忘失したもののあまりの大きさに，感慨を禁じえないからであるが，ただ過去への関心のみから発しているのではない。この忘失の現在におよぶ，遠くかつ底深い影響を確認したいからでもある。

2　人類学史の描くマリノフスキー

2.1　1920年代の革新と戦間期人類学

イギリスにおける人類学は，第一次世界大戦後，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの攻撃的な企てによって，新たな時代へと転換を遂げた。二人の最初の本格的な単行本規模の民族誌が，同じ1922年に刊行された。いずれも同時代の人類学とは異質の文化理解を提示するものだった。歴史と相関させずに，共時的な空間に同時に見出された諸事象を，それらの間の関連のみによって理解しようとする文化理解である。スタンダードな人類学史では，二人の民族誌の斬新さを評価して，人類学はこの年を画期として新たな時代に入ったとされる。この年にはまた，偶然の一致であるが，前世代を代表する人類者リヴァーズが亡くなっている。二人の企図した新しい人類学を指して，イギリスでは「社会人類学」という名称が定着していく。ここでは方法上の特徴に着目して，「経験主義人類学」と呼んでおこう。

ただし，新しい人類学は出発時からただちに同時代の社会に受け入れられたわけではない。マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンが導入しようとした経験主義が，人類学内部で定着するまでには，彼らの登場以後ほぼ一世代におよぶ時間を要した。すでに権威を確立していた人類学者に対抗し，同時に当事者の間でもそれに劣らず熾烈に競争し，それぞれの登場人物は実験的な試行に果敢に挑戦した。二人がともに活躍したのは，第一次世界大戦の混乱から回復して，人類学研究が再開されてから，人類

学の研究環境が第二次大戦によってふたたび激変するまでの，20年余の戦間期である。それは，新しい人類学が徐々に形成されていった過渡的な時代であり，この戦間期の人類学の特徴は，成果として世に問うたものではなく，むしろ形成のダイナミックな過程にある。この過渡期にマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンが育てた社会人類学は，第二次大戦後に一斉に開花して，イギリス人類学を一色に染め，イギリス人類学の歴史の上で最大の興隆期を迎える。

この経験主義人類学について，スタンダードな人類学史は，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンをペアとして扱うと同時に，彼らの貢献を対照的なものと描く。それをおおづかみにいえば，経験主義人類学の形成と定着は，この二人の影響がたがいに入れ替わるようにして展開させた歴史である。次世代の人類学者に対する影響ではマリノフスキーが先行した。1918年にメラネシア調査を終えた後，1920年にはイギリス本国のロンドン経済学院（London School of Economics）で社会人類学の講義を担当するようになり，1923年には同学院「社会人類学」の教授職（reader）[1] につき，セミナーを開始して，人類学者の組織的な養成に乗り出した。それ以降1938年にアメリカに渡るまで，イギリス人類学の新時代を指導し続けた。その間，1927年にはロンドン経済学院人類学の初代教授兼科長になっている（Kuper 1983: 19; Goody 1995: 14）。

マリノフスキーの教育はもっぱらセミナーで，彼自身や学生たちの「参与観察」による調査資料を素材として，きわめて実践的な形で行われたといわれる[2]。彼のセミナーは人類学者の養成機関として多産であり，イギリス本国とその植民地のみならず，ヨーロッパ大陸諸国，北アメリカ，中国，日本などから学生が参加した。第二次世界大戦後のイギリス人類学の興隆を担った人材は，エヴァンズ＝プリチャードのように彼と対立した者も含めて，そのおおくが彼のセミナーで学んでいた（Kuper 1983: 69–70; Goody 1995: ch. 2）。マリノフスキーはセミナーで学生を養成するとともに，国際アフリカ研究所と共同でアフリカ研究プロジェクトを実施し，学生たちをアフリカ調査に送り出した。

マリノフスキーがイギリス本国で活躍するのとは対照的に，ラドクリフ＝ブラウンはイギリス世界の外周部をめぐり歩いた。南アフリカ（ケープタウン大学）とオーストラリア（シドニー大学）で5年ずつすごして，それぞれの地で最初の人類学科を創設した。さらに6年をアメリカ（シカゴ大学）ですごし，ようやく1937年にイギリス本国の大学（オックスフォード大学）に帰還した。この間にシドニーでは，オーストラリア諸社会を対象とした，親族を中心とする社会構造の類型論を発表して，構造機

能的な社会研究の理論的骨格を示し（Radcliffe-Brown 1930），オーストラリアやオセアニアを研究する人類学者を養成した。シカゴでも同じように，構造機能的な方法で先住アメリカ人諸社会を研究する人類学者を育て，社会現象に関する厳格な実証科学的アプローチを表明する『社会の自然科学』[3] を残した。

ラドクリフ＝ブラウンがイギリスに帰還した翌1938年，彼と所を入れ替えるようにして，マリノフスキーはアメリカに渡り，間もなく始まった第二次世界大戦によって帰欧を阻まれて，アメリカ滞在を延長する間に，1942年に客死した。第二次大戦後に興隆期を迎えるイギリス人類学を担ったのは，マリノフスキーがセミナーで養成した人類学者たちであるが，彼らが理論的指導を仰いだのはラドクリフ＝ブラウンだった。

スタンダードな学説史は，次世代のイギリス人類学者たちがこのようにして，マリノフスキーから「参与観察」の調査法を，ラドクリフ＝ブラウンから構造機能主義的な社会理論を学んだと描く（Kaberry 1957: 87–8; Kuper 1983）。二人のデビュー作，『西太平洋の航海者たち』（Malinowski 1922）と『アンダマン島民』（Radcliffe-Brown 1922）を比べれば一目瞭然のように，実地調査の方法の提示，調査にもとづく対象社会の生き生きとした描写，この描写から推定される実地調査の密度など，実地調査に関してはあらゆる点でマリノフスキーの方が優れていた。他方，二人とも「機能的」あるいは「機能主義」という言葉を用いていたが，少なくとも社会ないし文化の体系的理論では，ラドクリフ＝ブラウンの影響がマリノフスキーを凌駕した[4]。マリノフスキーは「機能的」という表現によって，ある中心的事象（交易組織クラなど）とそれに関連する諸事象を数珠つなぎに記述していく手法を表していたが，それ以上には体系的にまとまった理論を教示しなかった[5]。かくしてスタンダードな人類学史は，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンがたがいに競争しながらも，次世代に対する影響では相補的な関係にあったと描く。次世代の人類学者は二人の指導者それぞれの最良部分――マリノフスキーからは「参与観察」法，ラドクリフ＝ブラウンからは構造機能主義理論――を摂取したという解釈である。この解釈によって，スタンダードな人類学史はさらに，戦間期とそれに続く第二次世界大戦後の時期とを，連続する一つの時期として描く。戦間期は第二次大戦後の社会人類学の興隆を準備した過渡期という理解である。

2.2　戦間期と第二次大戦後の連続性

戦間期と第二次大戦後の興隆期との連続性を示す格好の書物がある。戦間期の終局，1940年に出版されたフォーティスおよびエヴァンズ＝プリチャード編集の論集『アフ

リカの政治システム』(Fortes and Evans-Pritchard 1940c) である。この論集は国際アフリカ研究所の援助で出版され，8人の若い人類学者が各自の実地調査にもとづく論文を寄稿した。彼らの大半はマリノフスキーのセミナーの出身者であり，マリノフスキーが同研究所およびロックフェラー財団と共同で計画し実施した研究プロジェクトの参加者だった。他方で，この論集にはラドクリフ＝ブラウンが緒言を寄せ，政治システムという共通のテーマに関する理論的な枠組みを示している。戦間期を導いた二つの相補的要素，マリノフスキーの「参与観察」法とラドクリフ＝ブラウンの構造機能主義理論が，双方ともによく作用している。戦間期のイギリス人類学を特徴づけた新しい流れの，よき成果，よき代表といえよう。

長期的な視野で見れば，この論集は，第二次大戦後のイギリス社会人類学の興隆を予告する記念碑的な書物であり，戦後間もなく出たラドクリフ＝ブラウンおよびフォード編集の『アフリカの親族婚姻システム』(Radcliffe-Brown and Forde 1950) と対をなして，構造機能主義にもとづく人類学的研究のモデルを提供したものと評価されている (Kuper 1983: ch. 3)。40年の論集は政治システムを扱い，二つの政治類型，つまり「国家なき社会」の分節リニージ体系と「未開国家」の王権との，それぞれの構造，儀礼，政治，経済を考察した。50年の論集は親族婚姻システムを扱い，単系出自の構造的原則と関連させて，親族集団，家族および婚姻を描いた。これらは第二次大戦後にイギリス人類学がもっとも関心を払い，理論的な考察を集中させることになるテーマ群だった。40年の論集は人の面でも当時のイギリス人類学を代表しており，緒言を寄せたラドクリフ＝ブラウンと二人の編者は，オックスフォード大学の人類学科を拠点として，戦後の興隆期を支える組織的中心の役割を果たした。他の寄稿者たちも，戦後の興隆期で活躍した人類学者ばかりだった。さきに，スタンダードな人類学史は戦間期を，第二次大戦後のイギリス人類学の興隆を準備した過渡期と位置づけていると述べた。40年の論集『アフリカの政治システム』が，この解釈どおり，戦間期と戦後期とを連続させる要の位置にあることが了解されよう。

2.3　断絶した戦間期

戦間期と戦後の興隆期とを連続した一つの時期と見るスタンダードな人類学史の解釈を見てきた。しかしながらこの連続性は，ある1冊の書物を登場させることによって，見事に分断される。ここで私は，『アフリカの政治システム』に先立って1938年に出版された実験的な論集『アフリカにおける文化接触の研究方法』(Mair 1938b) を，念頭に置いている。この論集を40年の論集と対比させて取りあげるのは，唐突に

思えるかもしれない。実際，私の知る限り，この論集を積極的に評価した人類学者は皆無である。A. クーパーは，私が「スタンダードな人類学史」と見なす認識を提示した主要な人類学者であるが，彼の書物では，マリノフスキーの章で文化接触研究に1節を当て，38年の論集にも触れつつ，それは未完で不毛に終わった試みだったと断じている（Kuper 1983: 31–34）。イギリス系人類学者によるアフリカ研究を回顧したグディは，その考察をマリノフスキーのアフリカ研究プロジェクトから始めている。しかし，このプロジェクトの成果を代表する38年の論集には，まったく触れていない（Goody 1995）。

このように評価されることのない書物であるが，38年の論集を刊行当時の時代状況に置き戻して再考するならば，人類学史の埋もれていた一面が明らかになる。しかも，一旦明るみに出されてみればただちに，この隠された一面は，戦間期のイギリス人類学の展開をいろどる，もっとも際だった特徴であることが判明する。この書物が，1930年代にマリノフスキーの主導のもとに行われた，当時のイギリス人類学最大のプロジェクトの到達点を，直接に証言するものだからである。人類学史で無視されることのおおいこのプロジェクトは，それ単独でも十分に，戦間期をイギリス人類学の歴史の上で独立した一つの時代として扱うことを要請する。この論集の再考はさらに，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの関係についても再考を促し，同時に，この書物が人類学史で無視されてきた理由をも説明するだろう。人類学史の見直しを要求するこの論点を，詳しく述べていきたい。なお，考察の必要からかなりおおくの文章を引用することになるが，引用文中の強調はすべて，引用する私がつけたものである。

3　現実の表象——経験主義の真価——

3.1　戦間期イギリス人類学の亀裂

1938年の論集『アフリカにおける文化接触の研究方法』と40年の論集『アフリカの政治システム』は，内容では極端に対照的だったが，同時におおくの特徴を共有していた。40年の論集にラドクリフ＝ブラウンが緒言を寄せたのに対し，38年の論集にはマリノフスキーが序論を寄せており，当時のイギリス人類学を代表する二人の指導者が，分担するようにして，それぞれの論集に君臨していた。いずれも，標題が示すように，アフリカ研究の論集であり，国際アフリカ研究所という同じ研究所に関係した出版物だった。それぞれの執筆者の半数あまりが双方に重複して寄稿した。そして，

この二冊の論集の執筆者たちが主要な担い手となって，第二次大戦後にイギリス人類学に興隆をもたらした。出版を支えた研究所と研究地域と執筆者の重複，そして歴史的な位置から見れば，この二冊の論集は，イギリス人類学が戦間期の約20年の成果として生みだした，ほとんど双生児といえる書物である。

しかし双生児とすれば，これほど異質な組み合わせも珍しい。すでに述べたように，40年の論集が第二次大戦後のイギリス人類学の興隆を準備する古典となったのに対して，38年の論集はその後ほとんど省みられることなく終わった。つまり，一つの時代の終了を告げる書物だった[6]。戦間期にイギリス人類学が成しとげた進展は，非常にダイナミックであり，内部に大きな亀裂を生みだしていたのである。この二冊の書物は，分裂したイギリス人類学の二つの方向を代表するものだった。その一方が後世に継承され，他方は棄てられた。つまりイギリス人類学は，戦間期と戦後の興隆期との狭間で，その後の方向を決定づける重大な選択を行ったのであり，二冊の論集はその決定的な岐路を構成していた。

イギリス人類学の歴史におけるこのような位置からすれば，棄てられた論集の内容は古くさく，後続の時期の先駆けとなった書物はより新鮮なはずである。そして，そのとおりであれば，棄てられて歴史の中に埋もれた書物を，いまの時点で改めて掘りおこす意味はない。しかし事実は奇なことに，そしてまた印象的なことに，今日の時点で読み返せば，両者の評価はまったく逆転する。後者が古色蒼然としているのに対し，前者は驚くほど新鮮なのだ。

第二次世界大戦後の人類学の歴史は，今日にいたるまでに，さらにもう一回転の展開を遂げているのである。しかしそれにしても，半世紀以上を経た後でさえ新鮮に見える試みを棄てさったとは，戦後期の初めに当たって，イギリス人類学は一体どのような質の選択を行ったのだろうか。いまの時点でこの二冊の書物を振り返るとき，改めて根本的な問いを投げかけたくなる。経験主義人類学者たちは，同時代のアフリカを対象にしながらも，二冊の論集で実に対照的なアフリカ像を描いた。半世紀後の目で見れば，一方は古色に染まり，他方は新鮮さを保っている，その対照のありさまを見ておこう。

3.2　構造機能主義者の見たアフリカ政治システム

その後の人類学の歴史を導いた1940年の論集『アフリカの政治システム』の方から，さきに見ておこう。理論的な表明をかなりおおく引用するが，それはこの本の緒言や序論が理論的枠組みに強調を置いているからであり，また，二つの書物のコントラス

トを構成する要点だからでもある。

本書は一つの共同研究の実験であり，アフリカ社会学[7]の主要な諸問題の一つに焦点を当てた試みである。アフリカの政治組織という主題についてはおおくの独断的な意見があり，そうした意見が行政の実務で利用されてさえいる。しかし，いまだかつて，アフリカ社会のこの側面について，広い比較［研究］の基礎の上にたって精査した者はいない。この書物は，望むらくは，そのような探求の必要性を示すだろう……。本書が照明を当てた諸問題のおおくは，さらに一層の調査によってのみ解決が可能である。しかし，このような調査の機会は急速になくなりつつあり，いますぐに把握しなければ，永遠に失われてしまうかもしれないのである。(Fortes and Evans-Pritchard 1940a: vii)

……何人かの執筆者は，彼らが調査した政治システムの変化，つまりヨーロッパ人による征服と支配の結果として生起した変化を記述している。［しかし］仮にわれわれが……この変化の側面を強調しないとすれば，それは，執筆者の全員が行政的な問題よりも人類学的な問題の方によりおおくの関心を惹きつけられているからである。しかしながらわれわれは，人類学が現実的な諸問題に無関心であるといいたいのではない。『間接統治』の政策はいまやイギリス領アフリカで広く受け入れられている。思うに，仮に本書で扱うようなアフリカの諸政治システムについて，［人類学が］その［構成］原則を解明したとして，長期的な視野で見れば，そしてその場合にのみ，その［人類学的］理解が有益であると判明するだろう。(Fortes and Evans-Pritchard 1940b: 1)

……本書で記述される諸政治システムは二つの主要なカテゴリーに区分される……。一方のグループには……集中化された権威，行政機構および司法制度をもつ社会，つまり政府をもつ社会からなる。もう一方のグループは……政府がなく，位階や地位，富の鋭い区分がないような社会からなる。……国家とは政府諸制度の存在によって定義すべきだと考える人は，最初のグループを未開国家と見なすだろうし，第二のグループを国家なき社会と見なすだろう。(Fortes and Evans-Pritchard 1940b: 5)

編者たちからの引用文は，この論集のテーマと，それを位置づける状況的条件との双方について，述べている。論集のテーマは，「未開国家」と「国家なき社会」の二類型に整理される「アフリカの」政治システムであり，それぞれの個別事例を実地調査による資料にもとづいて記述分析する。ここでいう「アフリカの」は，編者たちの了解では，ヨーロッパ人による支配の影響を被っていない「アフリカ本来の」という意味である。この「アフリカ本来の」政治組織を，彼らは均衡システムとして把握する。ラドクリフ＝ブラウンの緒言は，法と制裁，道徳的強制，超自然的制裁など，政治的秩序の均衡を維持するメカニズムについて述べ，フォーティスとエヴァンズ＝プリチャードによる序論も，政治システムの二つのタイプを比較しながら，親族組織，人口規模，生業形態，諸種の力のバランス，ヨーロッパ人支配に対する反応，神秘的価値その他の項目にわたって概説する。

他方，こうした研究をとりまく状況的条件として，編者たちは植民地統治と社会変化に言及している。しかし，それは研究テーマとしてではなく，むしろ考察から除外する対象としてであり，除外の理由に簡潔に触れている。編者たちは行政的な問題と人類学的な問題を対置させ，後者の選択を表明する。彼らの認識では，前者にかかわる植民地統治は後者の研究にとって危機的な状況を作りだしている。植民地支配による社会変化によって「調査の機会は急速になくなりつつ」あるからだ。つまり，彼らはこの時点でなおサルベージ人類学の基本的な前提を表明している。また，人類学的問題の追求が長期的視野では行政的問題への貢献につながるとも述べる。このようなテーマ選択と研究姿勢は，次に述べるマリノフスキーの提唱を念頭に置いた発言であり，それに対する反論の表明でもあった。

3.3　1930年代アフリカの文化変化

他方，38年の論集『アフリカにおける文化接触の研究方法』が課題とした現象は，次の引用文が簡明に要約している。

> ここでの議論を具体的なものにするために，今日のアフリカがどのような姿であるかを一瞥しておこう。帝国航空の内陸ルート便に乗った客は，ほとんど文字どおり鳥瞰図を見るように［アフリカの］文化的状況を目の当たりにできよう。……乗機はナイル川の緑の帯を大陸の心臓部に向かって遡り，やがてナイル上流の大湿地帯の上空に達したところで，乗客は黒アフリカの最初の印象を刻む。古来のパターンに従って作られた円形の村々。ヨーロッパ風の建築は一つたりともない。土地の人々は古来の服装で，……囲いの中の牛の間を行き来している。一つ一つの村は，ほとんど近寄りがたいようにみえる湿地に囲い込まれている。目に入るものすべてがこのようにして，古い手つかずのアフリカの印象，少なくとも表面上はそのような印象を与える。……
>
> 乗機が……バンツー人の領域に入ると，ここはもう変容したアフリカである。……ガンダ人の地域では，家々は新しく方形で，ヨーロッパ形式で建ててある。……道路と教会，自動車とトラックが，ここは変化のただ中にある世界であることを告げている。そこでは，［アフリカとヨーロッパの］二種の要因がともに作用して，新しいタイプの文化，つまりヨーロッパとアフリカの双方と関係のある，しかしそのいずれのコピーでもないタイプの文化を，作りだしている。機がキムスに着陸すれば，ここは，この地域の金鉱経済に席巻されている小さな町である。ある箇所はほとんどヨーロッパそのものであり，いくつかの街路はインドを思わせる。しかし，町が近隣のアフリカ人諸部族，在留ヨーロッパ人，そして……インド人移民に規定されているとはいえ，町の全体はそれ自体の存在形態をもつ合成的産物である。町は重要な金の輸出貿易センターであり，［それを理解するには］アフリカの労働者と天然資源のみならず，世界市場，海外の産業センターおよび金融組織との関係を視野に入れた社会学者が，研究する必要がある。

ナイロビ［に移れば］，……ここはヨーロッパ人の巨大な行政官庁，銀行，教会，商店に支配されている。白人の住民は……表面を見た限りはほとんどアフリカに影響されていない世界に生きている。しかし事実は，この世界はアフリカの基礎の上になり立っている。……東アフリカのヨーロッパ風文化は，総じてヨーロッパから輸入されたものであるが，アフリカの自然環境への適応を経たものであり，アフリカの人的環境の上に依存し続けている。

われわれは［アフリカを］航空ルート，鉄道，自動車道のどれにそって［移動して］も，この三領域区分に出会う。古いアフリカ，移入されたヨーロッパ，そして「新しい合成文化」の三領域である。(Malinowski 1938: vii–viii)

マリノフスキーはこの序論で，この三領域にわたる文化的状況を作りだしている要因として，ヨーロッパとアフリカとの「文化接触」という概念を提示し，この文化接触をとおして急速に変化している文化的状況の全体を「文化変化」と呼んだ。

3.4　同時に描いた二つのアフリカ像

研究成果の評価が時とともに変化していくのは，歴史の必然であり，その大半は研究者にとってコントロールしえない外的な要因によっている。研究者としてはこのような評価の変転を受け入れねばならない。しかし，みずから描きだした内容は，みずからのコントロールの範囲内であり，第三者は何故を問うてもよいだろう。二冊の論集の執筆者たちは，同じ対象つまり1930年代のアフリカを見ていた。それにもかかわらず，彼らが描きだしたアフリカ像は，あまりにも対照的だった。一方は，外来の影響はないかのごとくに，システムとしての自立性を堅持している，静的かつ純粋なアフリカであり，他方は，植民地支配の影響に席巻され，変化と多様化の動態のただ中にあるアフリカである。

しばしば，同一の対象であっても，複数の観察者はそれぞれが異なった認識像を描くといわれる。認識の客観性や科学的正確さを疑う論者が，好んで指摘する論点である。しかし，ここで問題として取りあげている対照的な認識像は，同一の対象を異なる人物が描いたというばかりではなかった。4人の人類学者が双方の論集に寄稿していた。その中の一人，I. シャペラのみは，一貫した社会史研究の態度を維持した。38年の論集では，植民地支配の初めから現状にいたるまでの文化変化を，歴史資料を参照して跡づけるという，きわめて健全な社会史研究の方法を示し，40年の論集では，植民地統治下のベチュアナランドの社会を，それも30年代当時の具体的な状態を，植民地統治史に言及しつつ記述した（Schapera 1938; 1940)。しかし，残る三人の寄稿者は，それぞれ同一の社会を対象にしながらも，二冊の論集できわめて異質な社会像

を提示していた。

たとえばM.フォーティス。40年の論集で彼は「タレンシの領域では［文化］接触の活動的な実施者は植民地行政府のみ」であると注記しつつ，「原住民社会システムの基礎は手つかずのまま残されている」（Fortes 1940: 240）と述べる。植民地統治はその事実に言及するのにとどめ，もっぱら，植民地統治に組み込まれる以前のタレンシ社会を記述していく。それは典型的な「国家なき社会」であり，論文は，父系出自の分枝する系譜関係にそって集団が入れ子型に組み上げられていく分節リニージシステムの構造を述べ，戦争や儀礼，経済活動などをとおして顕在化する分裂と結合のメカニズム，首長の権威と役割などを描いている（Fortes 1940）。この論集から受けるフォーティスの印象は，彼のその後の活躍を追った者には親しいフォーティス像，つまり典型的な「国家なき社会」タレンシを扱った，卓越した構造機能主義人類学者そのものである。

しかし38年の論文は，このフォーティス像とあいいれない姿をあらわにする。彼が調査したゴールド・コーストのように，西欧との接触が5世紀にもおよぶ地域では，西欧との接触以前の現地人社会を復元することは不可能であることを力説し，植民地で進行中の文化接触の現状を「機能的方法」で把握することが必要だと説く。その上で，タレンシ人の地域社会（コミュニティ）で進行中の変化を，二つの位相に絞って描写する。一つは，変化をもたらす要因となっている外来要素で，しかもコミュニティの統合的部分として機能しているような要素であり，具体的には植民地行政官（地区弁務官），診療所，宣教師を取りあげている。たとえば地区弁務官について，「タレンシ人の政治的および法的行動は，平民も首長も，彼ら自身の伝統と同じ程度に，地区弁務官のつねに感じられる存在観によって，条件づけられている」と述べる。この認識からすれば，「原住民社会システムの基礎は手つかずのまま残されている」はずはなかった。

二つ目の位相として，貨幣経済の浸透に伴う労働移民の現状を述べ，その影響を考察する。著者の推計では，コミュニティの成人男子の内，遠隔地に出稼ぎに出ている者の割合は常時15パーセントに達していた。論文ではさらに，男たちを労働移民に駆り立てる経済的背景，移民の形態，移民を送り出す地域社会への影響，帰還後の生活などを考察している（Fortes 1938）。

率直に述べれば，この38年の論文に初めて目を通したとき，私は，フォーティスが植民地統治による変化をテーマとしていることに，新鮮さを覚え，さらに彼が労働移民に論及し，この現象を多方面から記述分析するのを見出して，これがあのフォーティスの論文かと，驚きと疑いを禁じえなかった。私の記憶では，「労働（出稼ぎ）

移民」という言葉と現象が人類学者の視野に入ってきたのは，1980年代であり，日本で人類学者の調査テーマとなったのは，90年代に入ってからのことである。構造機能主義者としてのフォーティス像に慣れた者には，同じフォーティスがこの労働移民を1930年代にすでに調査していたとは，まったく予想外のことだった。

フォーティスの38年の論文と40年の論文のコントラストは，調査者，調査地，調査期間，調査資料，分析方法　考察対象の社会，そして著者のすべてが，同一であるとは思えないほどに大きい。一方は，西欧との接触以前の社会を復元することは不可能との認識に立ち，他方の論文は，現地人社会は基本的に変化していないという，矛盾した前提に立っている。同じ社会を観察した同一の資料から，いかにしてこのように対照的な認識が導き出されたのか，第三者として問うてもよいだろう。

同じコメントはリチャーズにも当てはまる。彼女が調査したベンバ人は，植民地統治がおよんでから僅か30年余りしかたっていない。それにもかかわらず，社会変化が劇的に進行しており，男性の40から60パーセントにも達する人々が，労働移民として鉱山に働きに出ていて不在だった。首長層からの統治権力の剝奪，「戦争と奴隷制の禁止，キリスト教と教育の導入，貨幣使用の強要，［植民地］政府による［人頭税などの］課税といった変化に加えて，人類学者は，……成人男性人口の不在によって根底を揺るがされている部族システムを研究しなければならない」(Richards 1938: 49)。別の論文でも，急速な変化に翻弄されるベンバ社会を描いていた（Richards 1932)。にもかかわらず，40年の論集で彼女が描いたのは，西欧的要素のまったくないベンバ王国の構造だった。もっともリチャーズは，論文の最後の一節を植民地統治に当て，イギリス南アフリカ会社の支配下に入って以来の変化に言及する。旧首長層が権威を失い，キリスト教宣教師と植民地統治者が，従前の首長層の権威を受け継ぐものとして，住民に受けいられた様相の記述などは，興味深いものである。また，1929年に間接統治が導入され，旧首長層が，細かく明文化された規定のもとに，権威を復活し，植民地行政組織の中に取り込まれた過程にも言及する（Richards 1940)。

リチャーズは植民地の文化変化の状況に焦点を絞った38年の論集でも，西欧との文化接触による文化変化の程度と内容を知るためには，仮設的であれ「接触以前」の状態を再構成することが必要であると強調していた（Richards 1938)。この立場からすれば，40年の論文では，「接触以前」のベンバ社会を復元した姿を述べ，植民地統治による変化も考察したということなのだろう。リチャーズはマリノフスキーの弟子の中では例外的に，文化変化のテーマを追求し続けた人であるが，同時に「接触以前」を扱った研究も並行して行った。38年と40年の二つの論文は，その意味で，彼女の二

つの研究志向に対応するものである。リチャーズの思考の中では，ベンバ社会の二つの像は歴史的な前後関係に置かれるのだろう。しかしそれにしても，彼女は，みずから行った調査で得た同一の資料から，自足して安定したベンバ王国と，変化に翻弄されるベンバ社会とを，描き分けることができた。フォーティスの場合と同様に，なぜいかにと問うのに値しよう。

3.5　歴史的評価の変転

二冊の論集が観察した事象の違いは明瞭だろう。同じようにアフリカの現実について鳥瞰的な見通しを与えることを意図しながらも，40年の論集『アフリカの政治システム』は，マリノフスキーが区別した三領域の内でも，「古いアフリカ」のみに視野を限っており，その中でもさらに，ヨーロッパとの文化接触による影響や文化変化の様相を除外した視野で，アフリカ社会を見ていた。サルベージ人類学の研究スタイルである[8]。逆にいえば，この書物の執筆者たちは，このように視野を二重に狭く限定することによって，アフリカの諸民族の政治形態を，統合された姿で把握し，その統合の様相を彼らの概念で「構造」と「機能」の均衡システムと理論化することができた。このような利点を得るための代価が二重の視野の限定だった。

さきに，第二次世界大戦後の人類学の歴史はさらに一回転の展開を遂げており，戦間期の終わりの時点で歴史的岐路を構成した二冊の書物は，およそ半世紀を経た現在に改めて読み返すならば，評価が逆転すると述べた。実際，40年の論集は，あの二重の視野の限定があまりにも大きな代価でありすぎたと，その歴史的コンテクストの無視が批判されている。主要なテーマだった分節リニージシステムや「未開」王権は，現在の人類学では議論の場を見つけることさえ難しい。それは，この論集と対をなす論集『アフリカの親族婚姻システム』のテーマである，単系出自集団や母系家族についても同じである。ラドクリフ＝ブラウン，フォーティス，エヴァンズ＝プリチャードらが作り上げた「社会の自然科学」，つまり構造機能的な社会理論は，主要なパラダイムの一つとして人類学研究を導き，パラダイムとしての可能性を十分に尽くして，1970年代には役割を終えた。40年の論集が今日，古色蒼然として見えるのは，歴史の流れとして不思議ではない。

その後の人類学はこの遺産の上にさらにさきへと前進した。人類学が今日関心を寄せているのは，現代であれ過去であれ，歴史的時間の中で変化しつつある文化の諸相である。38年の論集『アフリカにおける文化接触の研究方法』が今日なお新鮮に見えるのは，この論集が30年代のアフリカに見出した文化的現象が，現在の人類学が捉え

ようとする現象と，よく似ているからである。この論集は，今日から振り返れば，時代を先取りする革新的な要素に満ちていたと評価することができる。論集では，執筆者によって重点に差があるものの，いずれもマリノフスキーが区別した三領域のすべてに関心を払っており，「古いアフリカ」に言及する場合でも，「古来の」表面のもとで進行していた文化変化を捉えていた。さらに，論集の指導者だったマリノフスキーは，当時のアフリカの文化的状況を，「新しい合成文化」に焦点を絞って捉えようとした。かくしてこの論集は，植民地行政府による西欧近代的な行政，司法，教育制度の移植，部族間戦争や首狩り，妖術信仰などの習俗の禁止，キリスト教宣教師による布教，西欧資本による鉱山やプランテーションの経済，大量の労働移民，彼らの雇用条件，これらによって「脱部族化」した都市住民，それにもかかわらず都市で増えてさえいる妖術信仰，キリスト教徒の行う民俗的儀礼，新たに生じた民俗的儀礼，ヨハネスブルクのアフリカ人スラム文化，人種差別政策，アフリカ人の白人憎悪，バンツーナショナリズムなど，多岐にわたる同時代の現象に言及していた。これらは，現代の人類学者が現代の現象として追跡しても，十分に魅力的でありうるテーマ群である。

現代の人類学は，どのような文化現象であれ，つねに複眼的な視野で接近する。それは，直接の研究対象に対する局地的な視野と，世界大に現象の広がりを追跡する巨視的な視野とである。局地的な現象は，政治，経済，情報のダイナミズムが世界大の規模で速やかに浸透するグローバリゼイションの影響から，無関係ではありえず，局地的な現象もまた，条件を与えられれば，容易に他地域に影響を波及させる。この現代人類学の複眼的な視野は，それぞれの要素を歴史的時間に即して置き換えれば，マリノフスキーたちが1930年代当時のアフリカの文化的状況を「文化接触」の概念で捉えようとした視野と，ほぼ重なることが分かる。

文化接触はヨーロッパ的要因とアフリカの局地的な要因が相互作用するダイナミックな現象を意味していた。巨視的に見れば，30年代に観察された植民地支配と，それを介したヨーロッパ的要素（法，教育，宗教，資本と経済システム，生活様式など）の浸透とは，当時の歴史的位相でのグローバリゼイションにほかならない。このグローバルな状況は，38年の論集が対象にした1930年代には，イギリスの植民地統治を間接統治政策に転換させており，植民地の文化的状況に大きな刻印を残していた。間接統治は植民地住民の社会的政治的条件を統治政策の中に取り込もうとする。この政策転換は，おおかれ少なかれ，植民地現地人（その社会，慣習，制度，価値観）に対する評価の転換を伴っていた。「異文化理解」に関して人類学が用意してきた概念でいえば，西欧近代の自民族中心主義的な普遍主義（具体的には進化主義）から文化相対主

義への転換に相当する。西欧近代の価値観に疑いを持たず，この価値観に照らして植民地住民を否定的にのみ――「異教」的で「野蛮未開」と――捉える「文明化」のイデオロギーから，現地社会の文化を，統治という目的のためであれ，曲がりなりにも理解しようとする姿勢への転換である。今日の植民地史研究は，この転換した文化的状況の中で，間接統治政策が諸民族の文化的「伝統」を認識ないし発見し，操作可能なものとして一定の形態のもとに固定したことを指摘している（レンジャー 1992; Thomas 1989; 永渕 1994)。現代の人類学が植民地史の一環として「伝統の創出＝発明」のテーマのもとに注目しているこの種の現象を，38年の論集はほぼ同時代の現象として対象化していた。

戦間期も閉じようとする時期に，あい前後して出版された二冊のアフリカ研究の論集は，奇妙にねじれた歴史的関係にあったといえよう。両者はほぼ同時期の出版物でありながら，出版当時には，40年の論集は人類学の未来を，38年の論集は棄てられる過去を代表していた。しかし，時代がひとめぐりした後で振り返れば，両者の位置関係は逆転していて，40年の論集は過去に，38年の論集は現代に位置している。そして，この二冊の論集に極端な歴史的位相の差異をもたらしたものは，つきつめれば，調査地で人類学者が直面した現実に対する，人類学者の視野と理論的関心との差異だった。戦間期のイギリス人類学者たちは，彼らのいうところの「参与観察」の調査法を掲げ，科学的経験主義で武装しながらも，最終的には，この立場の想定する「客観的な」観察と記述からは遠く隔たった方向を選択した。同じ選択がイギリス人類学の歴史からマリノフスキーの試行を排除した。次章以下では，マリノフスキーがアフリカ研究プロジェクトをとおして行った主張の数々を考察し，構造機能主義がマリノフスキーの影響に取って代わった過程を追跡しよう。それは戦間期のイギリス人類学が掲げた経験主義の真価を，検証することにもなろう。

4　植民地統治と実用的人類学

4.1　植民地統治への貢献

マリノフスキーが研究と教育の両面で指導的な役割を果たしたのは，トロブリアンドの調査からイギリスに戻った後の15年余りにすぎない。この間のマリノフスキーの活躍は多面的であり，たがいに性格の異なるいくつかの系列の研究を行った。一つは，トロブリアンド諸島の民族誌であり，デビュー作の『西太平洋の航海者たち』

(Malinowski 1922) に続いて『野蛮人の性生活』(Malinowski 1929, 改訂版は1932) を書き，同諸島の民族誌の集大成として『珊瑚礁の菜園と呪術』全2巻 (Malinowski 1935b) を出版した。これと並行して，フロイトの精神分析など同時代の思想的状況に触発された一連の人類学的なエッセイを書いてもいる。そしてさらに，1929年から亡くなる直前まで，調査プロジェクトの一環として「実用的人類学」(practical anthropology) を提唱し，5篇の攻撃的ともいうべき論争的な論文を発表した[9]。

マリノフスキーが実用的人類学を提唱した時期に，彼はそれのみに専念していたのではない。同時に他の系列の仕事も並行して行っていた。しかし内容をみれば，実用的人類学は他の系列の仕事の後に位置づけるべきものである。そこには同時代の人類学に対する批判が含まれており，自分自身の研究にも批判的に言及している。実用的人類学はマリノフスキーがこの自己省察を媒介にして構想した人類学であり，それによって彼は人類学の根底的(ラディカル)な革新を呼びかけた。彼の提唱は，彼みずから教育した若い世代を中心に，当時のイギリス人類学者の間にかなりの賛同者を獲得した。しかし彼は，自説の及ぼした影響の行方を見極めることなく，亡くなった。結果として未完に終わったとはいえ，マリノフスキーが晩年に到達した構想は，当時の時点での新しさはもとより，現在でも振りかえるにふさわしい示唆に富んでいる。その概要を，彼の構想がより尖鋭に展開していく時間的経過を追う形で見ていこう。なお，ここで「実用的」と訳した practical は，「現実的」とも「実践的，実務的」とも訳すことのできる多義的な言葉であり，語感に応じて適宜「現実的＝実用的」などと語を連ねて訳すことにしたい。

実用的人類学を提唱する論文はいずれも，国際アフリカ言語文化研究所 (International Institute of African Languages and Cultures，以下では国際アフリカ研究所と略す) の機関誌 *Africa* で，あるいは同研究所の刊行物で発表された。1926年に設立されたこの研究所は，間接統治の提唱者でもあった英領ナイジェリアの元総督ルガード卿 (Sir Frederick Lugard) を所長に迎えて，植民地統治と科学的調査研究とを密接に関連させることを目的に掲げていた (Smith 1934)。実用的人類学は，マリノフスキーがこの研究所と共同で推進したプロジェクトのガイドラインとして構想したものであり，それだけ彼のこの研究所および間接統治の理念に対する積極的な関与を裏づけるものとなっている。マリノフスキーと植民地統治との関連を考えるのに，状況的な条件の一つとして，この研究所が調査研究に対してリベラルな姿勢を保持したという事実は，留意してよいだろう。研究所の関係者もマリノフスキーもともに強調して

いるように，研究所が研究者に求めたのは，植民地行政官にとって有用な知識であって，政策立案への直接的な提言や参加ではなかった（Smith 1934: 4; Malinowski 1929: 23）。

実用的人類学の構想によって，マリノフスキーは植民地統治に積極的に貢献しようとした。なぜ植民地統治への貢献なのか。ストッキングとグディは，マリノフスキーが実用的人類学によってアフリカ研究に打ち込んでいった要因を，人類学をとりまく当時の社会的環境に求めている。彼らの挙げる要因を整理すれば，

(1) マリノフスキーはロンドン経済学院を拠点として人類学のセミナーを開設していた。イギリス政府は人類学の助成に冷淡であり[10]，マリノフスキーは，育てた学生のために，調査資金を獲得する必要があった。

(2) 学術振興に熱心だったアメリカのロックフェラー財団は，その博愛志向から，福祉の増進に貢献する経験主義的な社会科学を，助成対象として想定していた。

(3) アフリカの植民地統治に関係する西欧の行政官，宣教師，研究者の間では，統治政策と関連したアフリカ研究を要請する声が高まっていた。ロックフェラー財団は研究所の構想に共鳴し，同財団を中心とした拠金によって国際アフリカ研究所が設立された。

研究を助成する意志を示す財団があり，研究計画を必要とする研究所が設立され，いずれも協力者を求めていた。他の競争者より抜きんでてこの需要に応えたのが，マリノフスキーである。マリノフスキーは研究所と協力して実用的人類学の調査計画を立案し，ロックフェラー財団はマリノフスキーの「参与観察」調査法と「機能主義」の解釈法とを高く評価して，1931年に五か年の計画で助成することを決定し，かくしてマリノフスキーの主導のもとに，実用的人類学による大規模なアフリカ研究プロジェクトが出発した（Stocking 1985; Goody 1995: 7–25）[11]。

ストッキングとグディの解釈は，マリノフスキーの実用的人類学の構想が必ずしも彼自身の人類学的思考の内的な展開ではなく，むしろ外的な条件に促されて到達したものであることを示唆している。たしかに，それ以前のマリノフスキーは，人類学的知識によって植民地統治に寄与するといった発想とは無縁だった。調査経験のないアフリカを舞台とした植民地統治への協力は，マリノフスキーの個人史の展開として唐突に見える。しかし，仮に外的な誘因があったとしても，実用的人類学を構想するには，マリノフスキーの内面に，この外的契機に応える必然的な要因があったと考えられる。実用的人類学に対する彼の姿勢は，外的でも偶然的でもない。実用的人類学に

ついて述べたマリノフスキーの文章は，いかにも自己の思考の展開として構想し提唱しているように，確信に満ちている。この点で重要なことは，マリノフスキーの思考が時とともに変化し，成長していったという事実である。実用的人類学を掲げたマリノフスキーを，今日の時点で振りかえる最大の意義は，彼が同時代の人類学に対峙した姿勢と，この対峙をとおして自己の思考を展開させていった過程にある。

4.2　回心

マリノフスキーが植民地統治に関心を向け，実用的人類学を構想したのが，外的契機に促されてであったとしても，ひとたび実用的人類学を構想し始めれば，彼はそれを内的に整合的な体系として整備しようとした。実用的人類学を提唱した当初は，思考が十分に熟していないことをうかがわせる箇所も少なくない。それでもなお，この提唱はひとつの思考体系から別の体系への移行であり，一種の理論的な回心を伴っていた。

> 科学はわれわれの時代の最悪の厄介者であり，最大の災難である。…… 無目的な現代の機械化は……すべての真に精神的，芸術的な価値に対する脅威［である］……。この文化の機械的な監獄から逃れる避難所の一つが，われわれの地球の遠隔地方にいまなお存在している姿での人類生活の未開な諸形態の研究である。少なくとも私にとって人類学は，われわれの過度に標準化された文化からのロマンティックな逃避だった。……そしていま，この人類学の研究を20年続けてきたいま，私は自分自身が嫌気をさしながらも，人間の科学［人類学］を，人間を非人間化する悪しき当事者に作り変えようとしているのを見出す。…　手短にいえば，私は人類学を真の科学に変えようとしている。
> ……私自身，われわれの新しい機能的人類学の脱ロマン化の影響を十分に自覚している……。私もできることならば，人類学者に期待されるものがただ，ある制度の「起源」の発見，新たな伝播ルートの発見であったような時代に帰りたいと思う。しかし，ロマンスは人類学から消えつつある。……われわれ機能的人類学者は，科学が提供するもう一つの魅力，つまり人間的現実を一般法則の確立によってコントロールするという感覚が与える力の実感に頼らねばならない。かくして，科学は活動のもっとも現実的＝実用的な形態なのである。(Malinowski 1930: 405–408)
> かつては遅れた，のろのろした，後ろ向きの存在や事物の研究だった人類学は，いまや，『野蛮人』がどのようにして現代文明の活動的な参加者になるのか，アフリカ人やアジア人が，世界規模の協力と紛糾においていかに速やかにヨーロッパ人とのパートナー関係へと引き寄せられていくのかを，記録するという困難な課題に，直面している。［現状を見れば］……しんがりで後れをとっているのは［人類学の］技術ばかりではない。問題意識と視野，そしてこの変化する世界の経世に対して貢献しうる位置でもまた，人類学は後れをとっている。(Malinowski 1938: vii)

4.3　実用的人類学

一連の論文の最初の論文（1929年）で，マリノフスキーは実用的人類学の概要を簡潔に提示している。

> ［国際アフリカ］研究所の本来の課題は実用的＝現実的な関心と理論的関心との結合にある。［しかるに］大学の人類学……と［実務家の］現実的な関心の間にはギャップがある。……実務家には，野蛮［人の］法，経済，慣習，制度に関する知識が必要であることを表明するよう，要請したい。……人類学者は，原住民の諸制度を，いま現在に存在し機能しているものとして直接に研究する方向へと，進まねばならない。……変化しつつあるアフリカの人類学，白人と有色人の，ヨーロッパ文化と未開な部族生活の接触の人類学に，一層の関心を注がねばならない。……そこには，未開経済，未開司法，土地制度……，財政システムと課税，教育……，人口，衛生，変化する物の見方（outlook）の研究が含まれる。これらはすべて，植民地の実務家にとってますます科学的知識が必要となる問題である。この知識は，人類学の方法の訓練を受けた……人間のみが提供できよう。ただしそのためには，……［人類学者は］彼らの仕事の現実的応用 ……［と］今日現在の諸現実に対する，鋭い感覚を獲得していなければならない。（Malinowski 1929: 22–23）

当時の人類学者の慣用に従って，マリノフスキーは「未開，野蛮，原住民」などの語を用いている。いずれも今日では特定の語感が強すぎる。しかしながら，舞台をアフリカ植民地から「発展途上」地域一般に，「未開，野蛮，原住民」を「現地人」に置き換えるならば，マリノフスキーがここで述べた問題意識は，今日の開発機関（ないし実務者）と人類学の関係にも基本的に当てはまる。半世紀以上を経た今日でさえ，そのように思わせるのであるから，マリノフスキーのこの提言が発言当時に持ちえていた同時代的な現実性が想像されよう。

彼の実用的人類学の構想は，次のような植民地統治と人類学に関する提言に要約することができる。

(1) 植民地統治は間接統治でなければならない。

(2) 植民地統治の実務家は，実効ある間接統治の政策を，植民地現地人に関する実用的＝現実的知識にもとづいて立案すべきである。

(3) 人類学は植民地現地人に関する実用的＝現実的知識を得るのに最適の科学である。

(4) 人類学は，政策立案に参照しうるような，植民地現地人の「いま現在」の状態に関する知識を収集せねばならず，そのためには自己変革が必要である。

それぞれの提言は，従前の植民地統治と人類学の双方に対する鋭い批判を含んでいた。

4.4　間接統治

マリノフスキーが理解した間接統治とは，次のようなものだった。

> 間接統治を原住民自身の組織による原住民の管理と定義するならば，［間接］統治のみが成功しうることは明らかである。……間接統治［政策］は，すべての社会的発展が実際に非常にゆっくりとしたものであることを認識し，それを内部から発するゆっくりとした漸進的な変化によって達成する方が，はるかに望ましいと認識する。……ルガード卿のアフリカ統治および財政政策の指導原則だった政治的間接統治は，文化のすべての側面に拡張する必要がある。間接的な文化管理は，経済生活の発展，原住民による原住民に対する司法，原住民の線に沿った道徳と教育の向上，真にアフリカ的な学芸（art），文化，宗教の発展のための，唯一の道である。（Malinowski 1929: 23–24）

マリノフスキーが想定した間接統治の内容は，今日の開発理念として評価の高い「内発的発展」（鶴見・川田編 1989）の理念とよく似ている。「経済開発」は，第二次世界大戦後に政治的に独立した旧植民地――新たに与えられた名称が「発展途上国」である――を対象とした政策理念であり，植民地を対象とした統治政策と比べるのは，不適切に映るかもしれない。たしかに，開発理論の議論は植民地統治政策に言及しない。しかし，植民地支配を正当化する植民地主義イデオロギーは，植民地の「文明化」を宗主国の「使命」として掲げていた。第一次世界大戦後の国際秩序は民族（国民）自決を理念とし，大戦によって宗主国が替った植民地についても，政治的独立を統治政策の目標に掲げた国際連盟の委任統治制度のもとに，その統治が新宗主国に委ねられた。いずれの目標も，現代の用語で表現すれば，文化的，政治的そして経済的な発展＝開発に相当する。「内発的発展」は，欧米先進国をモデルにした開発至上主義に対抗する発展理念として提示されたものであり，志向価値を当該社会の内部に求めている。マリノフスキーが関与した間接統治も，統治の指針を外部の宗主国にではなく，統治対象社会の内部に求めている。間接統治はあくまで宗主国による植民地支配を前提としていた。しかし，今日の「内発的発展」理念が置かれている時代状況は，新植民地主義という相似の国際秩序である。間接統治と内発的発展との間に，時代を越えた並行関係を認めることには，充分の根拠があるといえよう。1930年代と，20世紀も終わりに近づいた現代とは，マリノフスキーの実験を今日の状況に移しかえて評価しても，現実性を失わないほどに，時代状況がよく似ている。

この歴史的な並行関係は，ある思想の歴史的評価と同時代的評価との関係について，思考を促すものである。マリノフスキーの構想がその中で意味を持ちえた時代状況である植民地主義（その一変形である間接統治政策）は，今日から振りかえれば，歴史的な評価が確定している。他方，今日の内発的発展が置かれているコンテクストは，評価が不確定であり，評価すること自体が容易ではない。それは，今日のコンテクストを評価しようとする者自身が，この同時代のコンテクストを生きているからである。その困難は，マリノフスキーなど1930年代を生きた人々が，同時代のコンテクストを評価する困難と，よく似ているだろう。彼らの営為は，その置かれた状況に対する評価が定まった後世の視点から，つまり現代のわれわれの視点から，批判してもよい。しかしそれと同時に，進行する同時代の状況を彼らと共有する視点から検討することも，重要である（7.5節参照）。

マリノフスキーは西欧によるアフリカその他の植民地支配を支持していた。彼は紛れもない植民地主義者であり，その立場から，植民地支配者による植民地研究の必要を強調した。

> 間接的管理……のもとでは，白人はほとんどの仕事を原住民自身の手に委ねるものの，監督は依然として白人がせねばならない。それゆえ，……彼は彼の監督下にある原住民の組織，諸観念，慣習を知らねばならない。(Malinowski 1929: 24)

ちなみに，今日の世界で少数民族政策といわれるものは，仮に良質のものであっても，戦間期のマリノフスキーが理解した姿でのこの間接統治と，大差あるものではない。マリノフスキーはこの間接統治の理念を額面通りに解釈し，彼の解釈する間接統治に関連させて，新しい人類学を構想した。

統治政策と植民地の実状との乖離矛盾は，植民地現地人の生活に「参与」して調査する人類学者の目には，植民地の現実の中でももっとも目に入りやすい側面だったに違いない。現地人に関する情報の提供者として，宣教師は長い歴史を持つ。リヴァーズらの「フィールド人類学者」は，その宣教師を現地文化の破壊者として批判しつつ，登場してきた。彼らの後継者に当たる戦間期の経験主義人類学者は，現地人の生活を変化させ崩壊させるとして，植民地統治に対し概して批判的だった（Maquet 1964）。マリノフスキーにとって間接統治は，植民地住民の現実に即した政策を推進しようとする理念と映ったのであり，さまざまありうる植民地統治の形態の中で，受け入れやすい性格のものだったことは確かだろう。

マリノフスキーが額面通りに解釈した間接統治の理念には，「原住民のための統治」という原則が含まれていた。彼は決して植民地支配を「原住民のため」だけのものと見ていたのではない。しかしそれでもなお，間接統治は「原住民のため」のもの，「原住民」に利益をもたらすものでなければならない。マリノフスキーはこの最後の原則を譲ることなく堅持した。後に述べるように，彼はこの原則から，「原住民」の現実を無視した植民地政策を痛烈に批判していく。

4.5　人類学の変革――「いま現在」を認識する人類学へ――

現実に即した統治政策を立案するために参照しうるような現実的＝実用的知識を提供すること。これがマリノフスキーの人類学に対する要求である。彼はこの要求を二通りの形で行っている。ポジティブにテーマを指定して調査研究を促す一方で，ネガティブには従前のあるいは同時代の人類学を批判した。

1929年の論文で，マリノフスキーは人類学者に，「いま現在の諸現実に対する鋭い感覚」(Malinowski 1929: 23) を求め，「今日存在するアフリカ人共同体を扱う機能的人類学」(Malinowski 1929: 38)，あるいは「原住民の諸制度をいま現在に存在し機能しているものとして直接に研究」(Malinowski 1929: 22) する人類学を求めた。その上でマリノフスキーは，この要請にそった研究テーマを具体的に述べている。ただし，研究テーマの論述にはかなりの幅があり，それはおおむね次の二群に整理することができる。

(1) 現地人の「経済，司法，土地制度，財政システムと課税，教育，人口，衛生，物の見方」などの一連の個別的テーマ

(2)「変化しつつあるアフリカの人類学，白人と有色人の，ヨーロッパ文化と未開な部族生活の接触の人類学」(Malinowski 1929: 22)，あるいは「西欧文化がアフリカ人の中に作りだす社会的および精神的諸現象」(Malinowski 1929: 36) の研究

二番目の研究テーマと同じ趣旨で，30年の第二論文で次のようにも述べている。

> 機能的人類学者は，有色人とともに白人野蛮人を，ヨーロッパの浸透と植民地経済との世界大的な枠組み――それが半部族的なあるいは脱部族化された生活の本質的な背景である――を研究する。[機能的人類学者] は日常生活の混乱，拙い行政や略奪的政策の混沌でさえ，直面する用意がある。[先の論文で] 私が要請したのは，……人類学内部の改革，まず現実を人類学的な関心の中核に据えることによって，人類学を現実に一層近づけるような改革だった。(Malinowski 1930: 419)

「いま現在の諸現実」という大枠の研究課題を具体化した二種の表現が，明瞭な差異を含んでいることに気づこう。一方の表現が「原住民の諸制度」に焦点を絞っているのに対し，第二の表現は「ヨーロッパ文化と［植民地の］部族生活の接触」にまで，さらには「植民地経済の世界大的な枠組み」にまで視野を広げている。29年の論文の各論で詳しく考察したのは，第一の視点に沿った項目だった。しかし，その後のマリノフスキーは第二のテーマ設定のように，植民地的状況の全体へと視野を拡大し，この観点からアフリカ植民地の「いま現在の諸現実」を「文化接触」と「文化変化」の二つの概念に収斂させていく。実用的人類学を提唱した当初のマリノフスキーは，調査すべき問題についても，それにアプローチすべき方法に関しても，いまだ十分に練り上げてはいなかったといえよう。

それでもなお，「原住民の制度」という限定的な視点からではあれ，マリノフスキーが29年の論文で指摘した「財政システム」以下「衛生」までの項目は，当時の人類学にとって斬新なテーマ設定だった。同じ論文の各論部分で，現地人の政治組織，現地人教育のための現地語を，法や土地制度，経済と並ぶ主要な研究テーマとして論じている。これら社会（政治，経済）的事象に重点を置いたアプローチは，植民地統治との関連に言及せずとも，同時代の人類学にとって新鮮だった。当時の人類学者の間では，儀礼や風俗慣習，神話，宗教など，19世紀以来の関心がなお根強く持続していたからである。このコントラストのゆえに，当時の人類学者のあいだでは，たとえば「土地制度研究」といえば，マリノフスキーの実用的人類学を想起させるまでに，象徴的な語感を獲得していく。

4.6　人類学批判

マリノフスキーの実用的人類学の構想が時とともに成長していったように，彼の人類学批判も時とともに重点を移していった。当初，彼は彼のいうところの「古物趣味人類学」（antiquarian anthropology）に批判を集中させた。それは，眼前の「いま現在」の現実を無視して，架空の過去を復元しようとするサルベージ人類学であり，具体的には彼より前の世代の人類学だった進化主義と伝播主義，そして同世代でも台頭しつつあった構造機能主義を指している。

> ［政治組織に関する現実的な知識の要請に対して］なぜ人類学者は諮問されず，役に立たなかったのであろうか。‥‥ 人類学の関心は従来，いささか別の方向に向けられていた。たとえば，未開王権の制度の研究は古典期古代という迂回したルートを経てきた。‥

……［J. フレイザーの］ネミの司祭王を中軸とする関心……［である。］しかし，未開政治が作用している現実のあり方……については，われわれは総じて無知である。(Malinowski 1929: 25)

完全に脱部族化され，ヤンキー化されたインディアンの研究においてでさえ，われらが米国の同僚たちは一貫して，現在あるがままのインディアンを無視し，1，2世紀前に「そうであったに違いないインディアン」を研究している。(Malinowski 1929: 28n)

親族，家族，村落共同体，そして部族の研究は，人類学のお手の物のフィールドだった。……しかしながら，人類学の……この分野はいまなお総じて，センセイショナルなあるいは古物趣味的というべき関心によって支配されている。擬娩，義母の忌避，……イトコ関係にまつわる奇妙な慣行［などなど。］……しかし，社会人類学の広範な……諸問題がいまなお陰に隠れている。［Rattray, Smith と Dale, Junod ら同時代のアフリカ民族誌家による］優れた書物をみれば，奇妙な不均衡に気づく。生活の日常的な事実と，特異な事実との間，……たとえば家族とより難解な親族の諸形態との間［の研究の不均衡。］……原住民のごく当たり前の人生過程における性格形成の問題……を，人類学者は理論においても観察においてもほとんど完全に無視してきた。(Malinowski 1929: 27)

人類学は……みずから塹壕に立てもこり，古物趣味の愚者の天国でロマンティックな余暇的な存在であり続けてきた。［われわれにすぐ］先立つ世代の人類学でさえ，生きた人間よりも死んだ人間の研究を好んだ。……お好みの研究テーマとして，もっとも身近な人間存在をではなく，文明のはすれに残存するもっとも遠方の数少ない原住部族を選んだ。それでもなお，それはみずからを無限定な［普遍的な］「人間の科学」と称していた。しかしながら，こうした原住民でさえ，現実の彼らの全体において研究したのではない。彼らは，「未開人」あるいは「野蛮人」に，「前論理的な」存在に，「先史時代を代表するもの」に，作り上げられていた。かくして，われわれは中央オーストラリアの小部族，……太平洋の1，2の環礁，セイロンのジャングルの近寄りがたい洞穴に身を寄せあっている僅かのヴェッダについては，非常におおくを知るようになっている。その一方で同時に，われわれ人類学者は，中国，マレー，インドの大衆のような人類の膨大な部分の存在そのものについて，ほとんど完全に無視してきた。人類学はまた，最近まで，混血の人種，脱部族化された原住民の研究，ヨーロッパ文化と原住文化の間に生起した伝播の過程の研究を，人類学的な関心の外にあるものとして等閑視した。……

将来の人類学は「変化しつつある」原住民……の研究にかかわるものとなろう。それはタスマニア人と同様にヒンドゥーに，オーストラリア原住民と同様に中国農民に，メラネシアのトロブリアンド人と同様に西インドの黒人に，ペラックのピグミーと同様にハーレムの脱部族化されたアフリカ人に，関心を払うだろう。それはまた文化と文化的同化の諸過程を研究するだろう。……植民地の諸問題の取り扱いに現に影響を与えている様態においての［変化，同化］過程をもである。総じて，このような人類学は現実的により重要になるばかりでなく，同時に，それは真の科学になるだろう。たとえ［その代償として］ロマンティックな逃避，すばらしい白日夢の機会であることを，止めたとしてもである。(Malinowski 1930: 406–407)

著者と出版年を伏せたまま，この引用文を読まされれば，おおくの人類学者は，

1980年代に行われた人類学批判の文章かと，疑うのではなかろうか。それより半世紀も以前に人類学者（それも指導的な位置にあった人類学者）がみずからこのような人類学批判を行っていたという歴史は，人類学者の記憶から完全に消去されてきた。

この引用文に「トロブリアンド人」の名が見える。さきに言及したように，人類学の「ロマンティックな逃避」に対する批判は，他者ばかりに向けられたのではない。批判する対象には，マリノフスキー自身の研究姿勢も含まれていた。たとえば，

> 太平洋の島々で私は，スタンダード石油の製品や週刊誌，木綿製品，安物の推理小説，ありふれた内燃エンジンのモーターランチに追いつかれてであるが，それでもなお，ほとんど努力することなく，自然の漠とした汚されていない無辺の広がりに囲まれた，石器時代の道具類でかたどられた……タイプの人間生活を，追体験（re-live）し再構成することができた。(Malinowski 1930: 406)

マリノフスキーは，実用的人類学を推進するかたわらで，トロブリアンドの民族誌『珊瑚礁の菜園と呪術』を書き進めてもいた。その中で，この二つの研究志向の矛盾に関連して，調査当時に進行中の文化接触を視野から除外した記述考察を，自分のトロブリアンド研究を貫く最大の欠陥だと，自己評価している（Malinowski 1935a: 479–481）。

「古物趣味人類学」に対する批判の焦点は時とともに，前世代の進化主義から同時代の人類学に移っていった。名指しはしていないが，その主なターゲットはライバルのラドクリフ＝ブラウンだったと考えられる。1930年代にマリノフスキーが文化接触研究を尖鋭化させていったのに並行して，ラドクリフ＝ブラウンも，後に彼の社会理論の骨格を示す論集『未開社会における構造と機能』（Radcliffe-Brown 1952）に収録されることになる論文を，順次発表し，理論家として存在感を増しつつあった。そのブラウンは，典型的な過去志向の理論家である。マリノフスキーの批判は，人類学者が調査地で観察する現実と，民族誌として記述する内容との乖離を，媒介する方法の科学的確実さに向けられる。

> われわれが研究すべきなのは，変化しつつある原住民であって，手つかずの野蛮人ではない。実際，［仮に彼の意図が過去の復元にあるとしても］現代のフィールドワーカーの現実の実践は，現にあるがままの野蛮人，つまりヨーロッパ文化の影響を受けた野蛮人を研究すべきであり，その後で，この新しい影響を排除してヨーロッパ以前の状態を再構成するようにならねばならない。(Malinowski 1929: 28)
>
> 科学者は彼が観察し記録できることがらに立脚しなければならない。このような素材から，

もし彼の主な関心が古物趣味的ならば，過去を再構成できるだろう。しかし，彼の描く古い伝統的な文化を，科学的に正しいものにするためには，彼はそれを，あたかもいまなお生きている現実であるかのように描いてはならない。彼はわれわれの前に，彼の観察による真の資料と，過去を再構成する彼の方法を提示しなければならない。その上でのみ，再構成した過去の概要提示へと進むことができる。(Malinowski 1938: xi)

4.7　実用的人類学プロジェクトの進展

マリノフスキーは実用的人類学をテーマとした最初の二編の論文の後，8年の期間を空けた1938年に，三番目の論文を発表した。この間に，マリノフスキーと国際アフリカ研究所による実用的人類学のプロジェクトは，ロックフェラー財団の助成を得て実行に移され，調査を終えた若き人類学者たちが，調査結果を民族誌や論文として公刊し始めていた。マリノフスキー自身も約6か月をかけてアフリカを旅行する機会を得ていた。1934年より，このプロジェクトの参加者たちは，その中の一人 L. メアの編集のもとに，国際アフリカ研究所の機関誌 *Africa* に，文化接触をテーマとした一連の論文を発表した。彼らの論文を主体に同研究所の『覚書』(Memorandum) シリーズの一冊として公刊されたのが，論集『アフリカにおける文化接触の研究方法』(Mair 1938b) であり，マリノフスキーの第三論文はこの論集に寄せた「序論」である。

人類学をとりまく時代状況に関連させてこの論集を位置づければ，この論集が刊行された時点では，マリノフスキーがロックフェラー財団の助成を得て行った五か年計画のアフリカ研究プロジェクトは，終了していた。ストッキングによれば，同財団は，マリノフスキーのプロジェクトが始まって間もなく，人類学関係のすでに多岐に分散していた助成の再検討を開始し，1933年には，新たに人類学に対する大規模な助成は行わないことを決定していた (Stocking 1985: 128–131) [12]。マリノフスキーの第三論文は，プロジェクトの進展がひとまとまりの成果を生みだした時点での，この成果に対するマリノフスキーの全体的な評価を表明したものと見ることができる。

5　文化接触へのアプローチ

5.1　弟子たちとの亀裂

38年の論文は，論集への序論という性格から，論集のテーマである文化接触の研究方法に論点を絞っている。ここでもまたマリノフスキーは，攻撃的といえるほどに批

判的であり，しかも批判を論集の寄稿者たちに向けていた。人類学の変革を求めるマリノフスキーにとって,変革の障害はもはやかつてのように外部のライバルではなく，この時点ではむしろ彼自身が指導してきた若い世代の思考だった。そして，彼の批判の語調は，弟子に向けるにはふさわしくないと思われるほどに厳しいものだった。

マリノフスキーの批判は，具体的には，論集の寄稿者たちが「文化接触研究」のために提示した3つの方法に向けられる。

(1) 植民地の現状を統合体の観点から捉えようとする方法

(2) 植民地の現状を文化的混合態と捉える方法

(3) 西欧との「接触以前」を再構成し，それを基点として現状までの変化を測定しようとする「ゼロ・ポイント」仮説

これらをさらに要約すれば，マリノフスキーと寄稿者たちの亀裂は，「いま現在」の現実を理解する方法という，この論集の大命題にかかわるものだった。寄稿者たちは，変化のただ中にある現実を理解しようとして，何らかの静態的なシステムを仮定し，それに還元して理解しようとした。マリノフスキーがとりわけ厳しく批判したのは，このシステムを過去の時点に想定する第三の方法であり，それはマリノフスキーからみれば，ラドクリフ＝ブラウンに代表される「古物趣味人類学」に回帰することにほかならなかった。マリノフスキーの弟子たちは，アフリカの同時代の変化しつつある現実を理解しようとして，当時のイギリスで対峙しあう二人の指導者的人類学者，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの狭間に追い込まれていった。

マリノフスキーが38年の論集で展開した批判は，寄稿者たちに共通する静態的システム志向との対決であり，同時に，システム志向を乗りこえて到達すべき認識枠組みの模索でもあった。長い歴史的視野でいえば，最終的にマリノフスキーはこのシステム志向に敗北することになる。いいかえれば，マリノフスキーがシステム志向と対置させた論点は，その後の人類学史で生かされることはなかった。マリノフスキーの思考を発掘する意図を込めて，彼の批判を見ていこう。

5.2　植民地の文化的状況——鳥瞰図——

論集の寄稿者たちに対するマリノフスキーの批判は，当時のアフリカの文化的状況に関する彼自身の認識を踏まえている。その概要をよく伝えているのが，3.3節で引用した1930年代のアフリカに関する鳥瞰的な認識である。マリノフスキーの批判を理解する背景として，ここにふたたび簡単に要約しておこう。マリノフスキーは，1930年代のアフリカを三つの文化領域からなる複合状態と理解した。

(1)「古いアフリカ」

(2)「移入されたヨーロッパ」

(3)「新しい合成文化」

マリノフスキーによれば，この三領域の相互の差異は鮮明であり，アフリカの植民地を空間的に三種の領域へと色分けすることが可能だった。

植民地の大半を占める後背地は当時なお「古いアフリカ」であり，アフリカ人が少なくとも表面上は「手つかず」のアフリカ的生活を送っている。植民地の政治経済の中枢が位置する都市は「移入されたヨーロッパ」として，ほとんどヨーロッパ都市の外観のもとで，ヨーロッパ人がヨーロッパ的スタイルで生活している。両者の中間に位置する地方都市，鉱山，プランテーションなどでは，ヨーロッパの要素とアフリカの要素を取りこんで，アフリカ的でもヨーロッパ的でもない新しいタイプの「合成文化」が作りだされていた。

ただし，中心都市の文化がヨーロッパ的に見えるのは外観だけであり，アフリカの地理的および人的環境に適応し変容したヨーロッパ文化である。アフリカ的生活を送っているように見える後背地でも，実態は男の大半を鉱山労働に送り出していたり，ミッションが布教していたり，あるいは部族間戦争や首狩り，妖術信仰の慣習が，禁止されていたりする。どの領域であれアフリカの現状を規定しているのは，西欧とアフリカ双方の文化要素が相互作用する文化接触であり，人類学にとっては文化接触によって進行中の文化変化を経験的かつ理論的に把握することが課題である（Malinowski 1938: vii–x, xxviii–xxix)。

5.3　文化変化の基点「ゼロ・ポイント」の構想

論集の寄稿者たちはアフリカ植民地の現状をどのように把握しようとし，それがいかにマリノフスキーの意見と対立したのか，個々の論点ごとに見ていこう。まず，L. メアが構想したゼロ・ポイント仮説である。この仮説はマリノフスキーが寄稿者たちに対する批判の最後に取りあげたものであるが，マリノフスキーの思考を解剖するには，最初に取りあげるのが分かりやすい。

> もしわれわれが，［植民地支配が始まって以来の］集約的かつ強制的な変革の期間に生起した変化の真の意味を理解しようとするならば，われわれは，この変革の時代が始まる前の事物の状態を，再構成することから出発しなければならない。たとえ［この再構成が方法的に］不完全であることが避けられないとしてもである。(Mair 1938a: 5)

このように変化を測る基点として再構成された「変革の時代が始まる前の」文化状態が，ゼロ・ポイントである。変化の認識には何らかの基点が必要だと考えたのは，メアだけではない。マリノフスキーと国際アフリカ研究所とのプロジェクトによって最初にアフリカに赴き，ベンバ人社会を調査したリチャーズは，すでに1932年の論文で，「部族のオリジナルな社会構造」の知識を得るまでは，彼らの文化が変化していることを認識しえなかったと述べていた。彼女は，ベンバ人の間で文化変化の度合いが異なる集落を4か所選んで調査し，相互に比較して，文化変化の現状を把握しようとした。そして，マリノフスキーのいう「古いアフリカ」に相当する遠方の村々が，この「オリジナル」な社会構造を保持していると見なした（Richards 1932: 144）。ただし彼女は，すでに引用したように，その村においてすら「成人男性人口の不在によって」「部族システム」は「根底を揺るがされている」とも認識していた（Richards 1938: 49）。こうした矛盾した認識はそれだけ一層，ゼロ・ポイント仮説が，文化変化を理解しようとする人類学者にとって，陥りやすい思考の型であることを示唆している。仮に文字どおりのゼロ・ポイントでないことが明らかだとしても，現在に連なる変化に先立つ状態を想定し，それとの比較で変化を測ろうとする思考である。

植民地を当時の状態へと変化させた西欧の支配は，メアにとって基本的に否定すべきものだった。植民地統治以前のアフリカ社会を理想化することはいさめつつ，それでもなおメアはそれを，調和のとれた「社会的協力が作動している社会」と描く（Mair 1938a: 2）。

> 問題点を比喩的に解説すれば，現在のアフリカで観察できるような大規模な接触過程にさらされている文化は，病理的な状態にあり，その理解は正常な状態との対比によってのみ可能である。（Mair 1938a: 4）

メアの想定では，ゼロ・ポイントは一つの「正常な状態」を体現する。ただしメアは，伝統的にみえる文化要素を，単純に肯定したわけではない。西欧のインパクトによって生じた現地文化の「病理」に関するメアの理解は，回顧趣味的（ノスタルジック）な相対主義の域を越えた，後世のコロニアル文化史研究を思わせるものがあり，同時に，統治者の認識不足を指摘する批判を含んでいた。たとえば，植民地行政官などの白人は，「原住民」が依然として盛んに妖術を行うと非難する。しかしメアによれば，それは単純にアフリカ的な伝統が持続しているのではない。植民地統治が導入した西欧的法制が，慣習的権利を認知せず，それによって権利を否定された住民は，残された手段として妖術

に頼っている。白人が妖術を非難するのは見当違いであり，むしろ不適切な法制にこそ問題がある。同様にして，白人がアフリカ人の「伝統」と理解していたものの中には，植民地統治が変容させて活用していた制度も，含まれていた（Mair 1938a: 5, 7）。メアが求めたのは，植民地住民の伝統を部分的に理解した上での，不適切な伝統対策ではなく，彼らの伝統的社会のメカニズムを全体として理解した上での政策だった。植民地支配以前の状態を復元したゼロ・ポイントに，メアは現地人の文化の全体的理解を期待したと考えられる。

5.4　真実の過去，幻想の過去，生きている伝統

メアは，ゼロ・ポイントを方法的に不十分にしか再構成しえないことを認識していた。それでもなお，作業仮説としての操作的な価値を評価して，この概念を構想したのであり，決してゼロ・ポイントの再構成を自己目的にしたのではない。しかし，ゼロ・ポイントの具体的な内容は，西欧との接触以前の「手つかず」の文化であり，それは古物趣味人類学の研究目的とまったく同じものだった。このゼロ・ポイント仮説に対してマリノフスキーは，操作的な価値を顧慮することなく，古物趣味人類学と共通する歴史観として批判を集中させた。それは同時に彼の歴史観の表明でもあった。彼はまず，人類学者が共有しがちだった変化に対する評価から，コメントしていく。

> 変化は，部族的な均衡と調整のとれた元来の状態からの逸脱である。変化はまた一般に不適合，悪化，社会的緊張，法的道徳的原則の混乱を意味する。……変化の程度を評価するためには，文化接触のゼロ・ポイントの知識が必要であるようにみえる。……民族誌家はだれでも，当然の傾向から，汚されていない原住民文化を，……変化の病理と部族の健全な状態とを比較する唯一の正当な標準と見なすようになろう。……かくして，このような比較が，メア博士のいうように，「政策を決定する一つの客観的な根拠」を提供することもありえよう。（Malinowski 1938: xxv）

しかしながらマリノフスキーは，このようなゼロ・ポイント仮説には重大な錯誤が含まれているとして，区別すべき三つの伝統ないし過去を指摘する。

(1)「科学的」手順によって再構成された過去，とりわけ西欧との「接触以前」の「手つかずの」原住民文化

(2) 現在時に人々が保持している過去に関する記憶像

(3) 現在時にも植民地の社会で生きて作用している伝統

植民地統治のもとにある「未開，無文字」社会の「接触以前」を再構成するためには，

現在時まで生残している老人の記憶，あるいは現在時の住民に伝承されている過去に関する口頭伝承が，信頼のおける資料となる。19世紀以来のサルベージ人類学者は，過去に詳しいとされる老人などを情報提供者（インフォーマント）にして，過去に関する記憶や口頭伝承を聞き取り，それを主な資料として「接触以前」の「原住民」文化を復元してきた。マリノフスキーはこの方法に対して，記憶や伝承を現在時の文化的コンテクストと関連させて，異議を申し立てる。記憶と伝承は，それが保持され語られる同時代のコンテクストにおいて，一定の機能を果たしており，記憶と伝承の内容はこの機能によって規定されるからである。

> 過去に関する主観的な，高度に情緒的な幻想，ヨーロッパ以前の『黄金時代』に関する今日の神話の中で生きているような幻想と，同じ過去の時代に関する真実の客観的な形姿とを混同することは……誤解のもとである。(Malinowski 1938: xxvi)
>
> 重要なのは，『記憶された過去』つまり人の記憶の中の幻想は再構成する必要がなく，事実，再構成は不可能だという認識である。……原住民が好んで語り，耳を傾ける，過去に関する神話的な幻想……。いまだに彼ら自身の文化に忠実であり続けるようなアフリカ人にとって，過去は回想の中で，永遠に失われたパラダイスになる。進歩派あるいは裏切り者，つまり変化からしばしば実質的に得るものがある人間にとっては，過去は紛れもなく悪の時代である。老人の記憶を信頼することも，あるいは過去に関する現在の説明を信頼することも，再構成の目的にとっては不毛であろう。(Malinowski 1938: xxix–xxx)

人々の記憶し伝承している過去と，科学的手続きによって再構成された過去という，論理的に疑いようのない区別を立てた上で，そのいずれを採るのか。マリノフスキーは人類学にとっての価値づけを問う。

> 文化変化の学徒にとって真に問題なのは，客観的に正しい過去，科学的に再構成したもので，古物趣味者にはこれ以上はないほど重要な過去ではなく，今日の心理的現実である。前者は死んで葬られた出来事の次元であり，……後者は原住アフリカ人の今日の行動を決定する強力な心理的力である。人々は彼らの感ずる錯誤に左右されるが，彼らの無視する真実には左右されない。……古物趣味者にとって真に問題なのは過去，真実で客観的な，［とはいえ］すべての懐古的な栄光に満ち，悪評の種は慎重に除去された過去である。文化変化の学徒にとっては，偏見，コントラスト，そして虚偽の色づけがもっとも重要である。それらは変化を促し，あるいは遅らせる力だからだ。……人の記憶や部族の伝承の中にある過去の幻想は，今日のアフリカ社会において作用している心理的影響力として，それ自体として研究すべきものである……。政治のいかなる実務的＝現実的思考にとっても，生きて作用しているアフリカの伝統について十分に熟知していることは重要である。再構成された過去の知識は問題ではない。(Malinowski 1938: xxx)

5.5　歴史的「現在」

「断片的な資料から多大の労力を払って慎重に復元せねばならぬような過去」（Malinowski 1938: xxvi）は，「死んで葬られた」文化であり，「現在」という時間においては存在価値がない。この断定の背後には，現在時にまで生きのびる「活力」のある伝統は，現在時までの持続を達成しており，現在時の社会で機能しているとの認識がある。

依然として生きていて機能しているアフリカの制度は，「再構成する」必要などない。それは民族誌家自身のフィールドワークで観察することができ，また観察せねばならない。現に存在し作用している形態は，過ぎ去った死んだ形態と同一ではない。（Malinowski 1938: xxvii）

われわれは，ヨーロッパ人の到来以前に存在していたような歴史的過去の「ゼロ条件」を構成していた一部分が，すでに死んで葬られており，それゆえ［今日の文化に］かかわりないものとなっているのを，文化の諸側面（経済的，法的，教育，政治など）のあらゆるところで見出す……。（Malinowski 1938: xxxi）

［その一方で］アフリカの諸制度の活力はおおくの制度を現代のただ中へと生きのびさせた。……古いアフリカの部族状態の今日における持続態は，同じ制度の過去の姿とは本質的に異なる……。（Malinowski 1938: xxix）

禁止され禁圧されたものの中には，部族的生活の表面からのみ消えたものもある。それは秘密裏に実行され，アフリカ現代文化に絶大な影響を与えている。妖術信仰はこのような持続の典型である。祖先崇拝も，コミュニティの中のキリスト教徒の地区でさえ完全に死んではいない。（Malinowski 1938: xxviii）

それでは実用的＝現実的観点から見て何が重要なのか。明らかに，文化と伝統の依然として生きのびていて，今日フィールドワークで観察可能な部面である。……現に生きているもののみが，生きている原住民社会を管理しなければならないものにとって，指針を与えることができる。……

このように，生きた歴史と再構成されたゼロ・ポイントとの区別は，理論，フィールドワークの方法，実用的応用のいずれにも等しく必要である。……歴史の過程はつねに自動選別機として働く。それは人間の諸制度の中で，持続し抵抗する要素を，弱体で過渡的な要素から選別する。歴史はかくして，何が不可欠で再適応可能であるか，他方それに対して，容易に棄てられ，あるいは抑圧されるべき要因や力は何であるかに関して，自然の鍵をわれわれに与えてくれる。（Malinowski 1938: xxxi–xxxii）

5.6　マリノフスキーの歴史観

マリノフスキーの歴史観を見るために，ほとんどアンソロジーのようにおおくの文章を引用した。過去および現在時に関するマリノフスキーの認識を把握するためには，

この長い引用が是非とも必要だった。ここに示されている彼の歴史観の歴史的意味を理解するには，マリノフスキー後の経験主義人類学の推移を大枠として認識しておく必要がある。経験主義人類学はマリノフスキーの死後，彼が攻撃してやまなかった「古物趣味」の構造機能主義が主力となり，ふたたび「手つかず」の文化へと関心を絞っていった。この関心は「接触以前」という抽象的な過去の時間に視点を据えて，この時点で再構成された文化社会を，理論的な比較分析の素材とする。この再構成像は，当該社会が置かれていた歴史的コンテクストから完全に抜きとられ，さらに当該社会が経過すべき具体的な歴史的時間の進行からも遮断されている。私の用語でいえば，「永遠の未開文化」の構成である（清水 1993）。この研究姿勢に対する疑問はいくつかのルートを経て，経験主義人類学から歴史研究を派生させた。その最初の試みは，エヴァンズ＝プリチャード，シャペラなど，マリノフスキーの学生でもあった構造機能主義者がみずから行っている。

歴史研究へと関心を広げた人類学者にとって，マリノフスキーは「非」ないし「反」歴史的な人類学を代表する批判対象だった（Gluckman 1947; Schapera 1962）。たしかにマリノフスキーは，過去そのものを研究対象にすることを否定した。しかし，この観点はただちに非歴史的あるいは反歴史的と評すべきものだろうか。マリノフスキーが否定したのは過去そのものであって，過去への関心ではない。そして，この区別の背後にはきわめて現実的な歴史意識の理解があった。過去つまり過ぎ去ったものは，定義によって，すでに「死んで」時の中に「葬られて」いる。それが現在時まで記憶され，伝承されているとすれば，それは過去に関する記憶が，記憶という行為をとおして，現在時のコンテクストの中で価値を帯び，何らかの社会的機能を担っているからである。それゆえ研究の中で過去について扱うとすれば，過去を特定の形で記憶する歴史意識を，その現在的な根拠を研究すればよい。これは一つの明快な歴史観というべきものではなかろうか。

「手つかずの未開」を前提とする研究姿勢は，多様な「未開」文化の比較から抽象的な論理的結論を得ようとするレヴィ＝ストロースの構造主義によって，復活する。「手つかずの未開」を想定する根拠を本格的に崩したのは，1980年代のポストモダン人類学批判である。それに応えて，経験主義人類学は植民地時代の歴史研究を枢要な研究分野として定着させた。「接触以前」という抽象的な過去に関する人類学的な研究から，紀年的（クロノロジカル）な過去に関する歴史研究への，本格的な転換である。人類学者は具体的な歴史的コンテクストから抜き出して描いていた社会の文化を，ふたたび具体的な歴史的時間の中に（再）コンテクスト化して認識しようとする。

マリノフスキーは，後世のポストモダン人類学批判が要求するこのコンテクスト化を，すでに先取りするかのように，次のように述べていた。

> ［人類学者，フィールドワーカーは］歴史家として，人類進化の中でもっともドラマチックで広範な危機の一つを記録しているということを，自覚しなければならない。（Malinowski 1938: xii）

マリノフスキーが把握しようとしたのは，統合されたシステムはなく，同時代に進行中の文化接触の過程である。過程は通時的な現象であり，時間の流れに従って現象を追うことになる。マリノフスキーは具体的に，1930年代という同時代にアフリカの現場で観察しうる現象を，把握しようとし，必要に応じてさらに，この現象に機能的に関連する諸要素を，世界大の視野で追跡しようとした。彼は同時代の歴史的コンテクストを確実に捉えていた。

マリノフスキーの歴史観に欠けているものがあったとすれば，それは，過去に関する記憶についてであれ，古物趣味人類学に関してであれ，もう一段高みに立った洞察だったろう。人々の歴史認識，つまり彼らが保持する過去の記憶は，彼らが生きている同時代のコンテクストの中で特定の意味を帯びる。この指摘は正しい。しかし，マリノフスキーが想定した過去の記憶の機能は，むしろ類型的だった。過去を記憶する人々は，同時代の変化する状況の中のどのような要因に促されて，どのような内容の記憶を強調し，過去像を形成していくのか。この追求はたとえば，後の「国民の伝記」としての歴史観[13]と同様の歴史観を導いたはずである。

さらに，歴史認識がもつ現在的機能という観点は，サルベージ人類学を，論破すべき学説としてではなく，一つの歴史創出（発明）の行為として対象化することを可能にしただろう。この点では，ポストモダン人類学批判もマリノフスキーと同じく，サルベージ人類学の果たしうる現実的＝実践的な機能を見落としていた。人々の記憶にない過去の発掘は，埋もれた「真実の」歴史の再発見として，現在時に新たな意味を持つことができる。サルベージ人類学者が「手つかずの伝統文化」を再構成しようとしたとすれば，この作業もまた，それが位置する同時代のコンテクストの中で，特定の意味を帯びたはずである。現代では，先住民はしばしばサルベージ人類学と同じ手法で彼らの文化的「伝統」を認識し，それを彼らの文化再生運動のシンボルに掲げている。先住民運動が彼ら「本来の伝統」を認識するために，サルベージ人類学者の描いた「手つかずの」文化像を参照することも，稀ではない。サルベージ人類学は，対

象の人々とその文化が「滅びる」ことを前提に，その文化が失われる前に収集し，記録にとどめようとした。このサルベージ人類学者の行為を社会関係に投影していえば，宗主国が「滅ぼす」植民地の現地人文化を，当の宗主国が領有する行為にほかならない。他方，先住民運動は「奪われた」自己の文化を取り返そうとする。両者は行動の意味も方向もまったく違っていて，「本来の伝統」を認識する手法だけが似ているのにすぎない。それでもなお，サルベージ人類学は過去にのみ沈潜するのではなく，「手つかずの伝統」を再発見し，現在時においてその意味を創造＝発明する。時代状況との関係をずらすだけで，サルベージ人類学（その方法）は大きな現実的役割を担うことができる。サルベージ人類学が秘めているこの可能性を，マリノフスキーは見落としていた。

5.7　文化混合——文化要素の起源＝所有——

マリノフスキーは，「いま現在」の文化的状況を把握するのに，過去に設定したゼロ・ポイントを参照して理解する方法を退けた。M. ハンター（Hunter 1938）にとってゼロ・ポイントの再構成は，次に見るフォーティスと同じ理由で不可能だった。それに代わる方法として，彼女は，リチャーズが実践していた比較法を採用し，現地人が分布する地域から，変化の度合いの異なる4地点を選んで調査した。ヨーロッパ人居住地から遠い現地人保留地，周囲をヨーロッパ人居住地に囲まれた現地人保留地，ヨーロッパ人農場の中の現地人居住区，ヨーロッパ人町の中の現地人地区の4地点である。

ヨーロッパ人との接触の度合いが異なる地点を比較すれば，現地人の文化模様の多様性は把握することができる。しかし，観察された現状をそのまま記述しても，それは変化を認識したことにはならない。ここでハンターは，過去の情報の不足，現地人の父祖の時代の生活形態に関する知識の不足を，痛感させられる。たとえば，保留地でも現地人の間にキリスト教が定着している。彼らは洗礼，婚礼，葬礼の際に，教会による典礼とともに，羊ないし山羊を殺して，祭宴を行っていた。しかし，この行為にはシンボリズムの要素が稀薄であり，ハンターは人々の説明から何の意味も引きだすことができなかった。この行事が「異教」（現地人宗教）に由来することは明らかであり，老人は，彼らの父祖が人の出生，婚姻，死に際して，羊の供儀を行っていたと語る。しかし，キリスト教以前の現地人宗教について，まとまった知識を得ることができず，結局ハンターは，「過去の知識がないがゆえに理解不可能」と結論するしかなかった。

ハンターはマリノフスキーと同じく，文化接触による文化変化の状況を理解するのに，機能的方法は困難であることを認める。もはや対象は「同質的な」文化ではないからだ。彼女はしかし，マリノフスキーが「新しい合成文化」と呼んだものを，文化要素の「混合」(mixture) と捉え，この認識を鍵として，理解に到達しようとした。保留地でもすでに文化は「部分的に融合した諸要素の混合」であり，それぞれの要素は「親文化」から「借用」されてきたものである。各要素は「親文化を参照することによってのみ，理解することができる」(Hunter 1938: 10)。それゆえ，いまは失われた「異教」的「親文化」から「借用」された儀礼的要素について，その理解を阻む「過去の知識」の欠如を，彼女は痛感せざるをえなかった。

このハンターの理解の方法に対して，マリノフスキーは正反対の価値づけを行い，まったく逆の方向で意味関連を読みとろうとする。マリノフスキーによれば，現実を要素に分解し，「親文化」と関連づけて分類すること，眼前の現実を理解する鍵を他所に求めることは，いずれも眼前の現実からの逃避である。第三者としてこの論争に立ち会う読者にとっては，ハンターのシステム志向，進行中の過程の混沌とした状況を理解するために，その鍵を，諸要素がよく統合された過去のシステムに求めたいという志向が，印象深い。

> ［ハンターの方法は］明らかに，変化の新しい諸傾向には生命がなく，それ自体では無意味であることを意味するだろう。ハンター博士にとって真実で意味があるのは「親文化」である。これでは，彼女の比喩を延長して，両親が死産の子を産んだとさえ，いうことができよう。私の見解では，文化変化の諸過程，新しい文化的現実の形成は，機械的な混合態とみなすことはできない。(Malinowski 1938: xix)
>
> 原住民の町，鉱山施設の区画……といった現象は混合態だろうか。否である。それらは，原古のアフリカに対するヨーロッパ文明のインパクトから成長してきた諸条件のまったく新しい産物である。原野の学校にはヨーロッパにもアフリカの部族生活にも先例がない。［若い］男女を，彼らが［人種差別制度によって］法的に閉め出されている職業のために教育するという問題は，ヨーロッパでもバンツーのアフリカでも生じようがない。この学校制度が最終的に生みだす教育あるアフリカ人を取りあげてみよう。彼についてもっとも重要なもの，つまり彼の人格を破壊せずに，西欧化されたアフリカ人を［アフリカ的ないしヨーロッパ的］構成部分へと仕分けするという仕事をやってのけられる民族誌学者がいるならば，会ってみたいものである。(Malinowski 1938: xxii)［ちなみにこの文章からは，アフリカ植民地の現実に対するマリノフスキーの批判的な視線が読みとれよう。］
>
> 西欧化されたアフリカの新しい現実の中のどの要素であれ，それを理解するには，現に置かれている新しい状況の中でその要素が作用している様相において，それを研究すべきであり，……「借用された」ものとしてではなく，新しい諸制度の中から生みだされたものとして研究すべきである。どのような新しいアフリカの現実であれ，その一部をコンテク

ストから引き裂くことは通常不可能であり，必ずや部分と全体の意義を等しく曖昧にしてしまう。
……ここでの問題全体の唯一正しい取り扱いは，文化変化を，ヨーロッパ文化とアフリカ文化の間の接触とダイナミックな相互作用が生みだす一つの独特の過程，さらにこの接触によって第三の「西欧化されたアフリカ文化」が作りだされる，そのような過程と把握すること［である］。(Malinowski 1938: xix)

文化「混合」概念に対するマリノフスキーの批判は，この引用で十分に説得的だろう。しかし，この概念について考えるべきことは，1938年の論集での議論で尽くされているのではない。より広い視野で再考するならば，文化「混合」の概念からは，文化史の理解に関する重要な示唆を読みとることができる。すでに見たように，フォーティスやリチャーズは，1930年代のアフリカの社会的状況を描くと同時に，古い「手つかず」の「部族」社会を描いていた。二人とも，一方では実地調査で観察した現実を描写し，他方では同じ調査資料から分析的に再構成した社会像を提示した。直接観察したのではない「手つかず」の「部族」社会を，彼らが再構成できたのは，彼らがハンターと同じように文化「混合」観を共有していたからである。彼らはハンターが行ったように，彼らが現地で観察した事象を，アフリカ的要素とヨーロッパ的要素とに分類し，アフリカ的と分類した要素のみをつなぎ合わせて，「手つかず」の「部族」社会像を構成した。マリノフスキー亡き後に復活するサルベージ人類学は，基本的にこの手法によって「未開」社会を構成し続けた。

植民地の現実をアフリカ的要素とヨーロッパ的要素に分類することを戒め，むしろ第三の新たな現実と見るマリノフスキーの観点は，世紀末の現代世界を理解しようとする人類学者にとっても示唆的である。世界の周辺部に位置する民族が，「伝統」の名によって文化的に自己主張しようとするのに対し，人類学者はしばしば，彼らが「西欧」から受容した「伝統」と「文化」の語法によって文化的主張を行っていると批評する。マリノフスキーのひそみに習っていえば，そのような批評は，民族主義的な自己主張を「死産」の試みに変換する行為である[14]。さらにいえば，ある文化的現象を要素に分解し，要素を「親文化」へと分類することは，この文化的現象に対する所有権を「親文化」に認定する行為でもある[15]。マリノフスキーがハンター批判として鋭い語調で批判した志向，つまり文化的現象を，それが「本来属すべき」「親文化」に関連づけて理解しようとする人類学者の志向は，いまだ払拭されているとはいえない。

5.8　統合体としての植民地社会

メアはアフリカ植民地の現実を，過去のゼロ・ポイントを参照することによって理解しようとした。同じように文化変化のただ中にある現実を，ハンターは「親文化」を参照して理解しようとした。「いま現在」の現実を理解するために参照する対象は，過去に，あるいは同時代であっても別の空間に，いずれにしても「いま現在」とは異なる時空に位置していた。二人の見解を退けた後に残されているのは，現在時の現実をそれ自体によって，つまり現在時に観察される諸要素のみによって理解する方法である。論集の寄稿者の中ではフォーティスがこの課題に挑戦していた。

フォーティスは，文化接触による文化変化の状況を，地域社会（コミュニティ）を一つの統合的全体としてみることによって捉えようとした。彼にとってこの視点は，ゼロ・ポイント仮説に代るべき構想だった。アフリカ西海岸のように，ヨーロッパ人の介入がすでに数世紀を経ているところでは，ゼロ・ポイントつまり西欧との「接触以前」の現地文化を復元することは不可能である。ゼロ・ポイントの追求は，方法の不確実な社会史にならざるをえない。現地人社会はもはや現地人のみによって構成されるのではなく，宗主国が植民地に導入したすべての要素を加えて成立した歴史的産物である。そこでフォーティスは，「ダイナミックな過程としての文化変化」を捉える方法として，地域社会に焦点を当て，この地域社会を，地域行政官，診療所の医師，ミッションなど，接触のエイジェントをその内部に統合的部分として含み込むシステムとして，理解しようとした。この観点からは，地域社会を機能的に観察し分析することになる（Fortes 1938）。

このような統合的な見方に対し，マリノフスキーは文化接触状況についてまったく異なる認識を対置させる。彼によれば，文化接触がもたらすのは一つの「よく統合された」「同質的な文化的全体」ではなく，流動的な文化変化の過程である。

> 西欧の影響をほとんど被っていない原住部族の場合，あるいは接触過程で一時的に平衡状態に達しているような場合……古いフィールドワークの方法によって研究する［ことができる。］……
> しかしながらわれわれは，……二つの文化の接触と相互浸透が，いかなる歴史的時点であれつねに自己充足的なよくバランスのとれたタイプの社会をもたらすという……誤った見方を採用する必要はない。……変化という現象の本質は，……人種偏見と差別政策という溝を挟んでたがいに対峙しあっている二つの異なる文化的世界の相互作用にある。
> 定義し研究すべき［テーマ］が二つの文化の接触とそのメカニズムであるならば，そこに

> 存在しているのは二つの文化ではなく，だた一つの文化であるかのように仮定して，問題を単純化することは容認できない。この相互作用から結果する新しい混合的な諸制度という第三の文化的な現実を無視することも，同じく誤りである。実際，文化接触のあらゆる状況において，われわれは，一つでもなく，また二つでさえなく，三つの共存する文化的位相を眼前にしている。(Malinowski 1938: xiii–xv)

5.9　構造的社会史

フォーティスはゼロ・ポイントの再構成を不確実な社会史として退け，現在時の社会的状況を一つの統合体と見る視点を対置させた。しかしシャペラにとって，この二つは矛盾するものではなかった。彼は，ゼロ・ポイントを再構成する意義を認め，同時にフォーティスと同様に，植民地社会の現状を統合体と見ようとした。さらに，ゼロ・ポイントと現在時との，時間的に隔てられた二つの統合体の間を，方法的にきわめて健全な社会史研究によって連続させようとする。ゼロ・ポイントの再構成は，単に現存の人々の記憶と口頭伝承を資料として行うのではなく，公刊された文献やヨーロッパ人の残した資料（史料）も参照して行うべきであるといい，さらに，西欧との接触から現在時にいたるまでの社会変化も，同じように利用可能の文献資料を参照して追跡すべきであるという（Schapera 1938)。

マリノフスキーは論集の寄稿者たちを厳しく批判したが，それと同時に，文化接触研究に対する彼らの貢献を高く評価してもいた。そうした中で唯一シャペラに対してのみは，こうした両義的な幅を見せることなく，妥協の余地のない厳しい批判に終始した（Malinowski 1938: xiii–xvii, xxxii–xxxvi)。シャペラに対するマリノフスキーの批判は，文化変化の現状に関してシャペラがフォーティスとともに提示した見解に集中している。

> 著者は，まるでわれわれが「一つの部族文化」の存在と対面しているかのように語り，在留ヨーロッパ人と受容した西欧的要素とを，部族文化の統合的部分であるかのように取り扱うよう提案する。(Malinowski 1938: xiii)

シャペラが示した，方法としてはただちに欠点の見えない社会史の研究方法について，マリノフスキーは一言も触れない。シャペラの目には，それはマリノフスキーの基本的に反歴史的な姿勢を示すものと写っただろう[16]。しかしマリノフスキーは，文化接触の過程を一つの社会に生起する現象として扱うフォーティスとシャペラの解釈を，容認しなかった。それとまったく同じ理由で，植民地社会の歴史を，一つの社会に生

起した構造的変化の歴史として追跡しようとするシャペラの歴史観は，マリノフスキーにとって受け入れがたいものだったと思われる。

5.10　文化接触の三領域——伝統が析出する枠組み——

マリノフスキーは，文化接触という現象を捉えるために，「古いアフリカ」および「移入されたヨーロッパ」の二つの領域に並んで，「新しい合成文化」という第三の領域を設定した。彼のシャペラ批判はこの枠組みと関連させることによって，理解できるように思われる。

マリノフスキーが三つの文化領域を認識しえたのは，彼が観察した文化接触の舞台が，1930年代のアフリカ植民地だったという事情も，有利に働いていよう。彼が実見した地域では，鳥瞰的にではあれ三文化領域を，とりわけ宗主国にも植民地の在来の文化にも還元しえない第三の新しい文化領域を，明瞭に識別できた。彼は文化に視点を置いて考察し，社会や民族——当時の表現では「人種」——区分については述べていない。しかし，文化の三領域を認識する過程では，アフリカ人とヨーロッパ人という明瞭な「人種」区分と，彼らの社会的配置が，格好の手がかりとなったはずである。そして，1930年代のアフリカの状況では，植民地の社会的な多様性は文化の三領域によく対応していた。入植したヨーロッパ人が作るコロニー，旧来の生活様式を生きているように見える現地人社会，そして新たに作られた都市や鉱山やプランテーション農場などの，そこに移住してきたアフリカ人およびヨーロッパ人が構成する混成社会である。

植民地統治下にあった一時代の断面を見れば，植民地社会はこのように多様であり，かつダイナミックに変化しつつあった。それに対し，歴史の視点から，とりわけヨーロッパ人の到来する以前の社会——それは均整のとれた一つの統合体として描かれる——を出発点として，時代を下りつつ社会史を描くことは，もっとも新しい時代——「現在」——の多元的な社会構成を捨象し，通時的な変化をも包み込んで，すべてを一つの社会的連続性へと還元することになる。それは，一つの社会を通時的存在として実体化することである。マリノフスキーがシャペラの社会史観を肯んじえなかったのは，それがこのような過度の社会的一元化と実体化を含意していたからではなかろうか。

近代国家の母体となる国民（民族）について，その歴史を描く行為もまた，過度の一元化を例示している。おおくの植民地では，政治的独立に伴ってヨーロッパ人コロニーが解消された。この状況は，「人種」民族を参照することによって，社会はヨー

ロッパ人に支配される以前の構成へと復帰したと，認識させよう。西欧による植民地支配を免れ，ヨーロッパ人コロニーに相当する社会的空間が形成されることなく，近代西欧の文化的影響にさらされた地域もある。そこではますます強固に，一つの社会の連続性が認識されるだろう。いずれも，国民の歴史を描くのに格好の条件である。国民の歴史は社会の連続性を前提し，それを現代の国家を過去に投影して構成するからだ。

しかしその状況においても，その過去には必ず，文化要素の移出入が交錯した歴史がある。それはその都度に第三の「新しい合成文化」を形成する過程が累積した歴史である。非西欧地域における近代国家の歴史で主役を演ずるのは，現地人と外来者との混成社会から育つ新興エリートであり，「新しい合成文化」の系統に属す文化である。いずれも決して，西欧近代の文化的影響を被る以前の社会と文化の，とぎれのない連続体ではない。文化的「伝統」の意識は，しかしながら，そうした「新しい合成文化」を外来「文化」か「伝統文化」かのいずれかに還元して命名し，第三の「新しい文化」が形成されたという記憶を消去してしまう。

シャペラとマリノフスキーの論争は，多様な文化的現実とその一元的な認識とのずれについて，さらに思考を誘うものである。文化接触の状況が作りだす三つの文化領域は，マリノフスキーが機上から鳥瞰したように，まずは客観的な視点から識別される。文化的多様性を三つの領域へと識別するのに，直接には対象の中に見出される差異を手がかりにしている。しかし，この差異はただちに，識別された領域のアイデンティティを認識させてくれるものではない。マリノフスキーが一方を「古いアフリカ」と呼び，他方を「移入されたヨーロッパ」と命名しえたのは，それぞれの文化領域を担う社会，その「人種」的な構成，そして「接触」の歴史を考慮するからである。背景にある社会的「人種」的な差異が，この二つの文化領域のアイデンティティを特定させている。しかしながら，その社会的ないし「人種」的な差異は決して固定的ではなく，文化に劣らず流動的に変化する。ある文化領域に固有名が与えられるとしても，その実態は，可変的な文化領域に，同じく可変的な社会領域や「人種」区分の名称を当てはめているのにすぎない。しかし，一旦「アフリカ」や「ヨーロッパ」という名称が与えられれば，その固有名を帯びる文化領域を，一つの実体として，しかも歴史的な連続体として，構成してしまう。事情は社会領域でも，あるいは「アフリカ」の内部の個々の民族についても同じだろう[17]。

文化的「伝統」の表象は，過度の一元化と，命名によるアイデンティティの不可思議を，よく示している。マリノフスキーが「古いアフリカ」文化と呼んだものは，「手

つかず」に見えたとしても，それは「少なくとも表面上は」という保留つきのことであり，実態は外来の影響に多少とも浸されていた。「古いアフリカ」と「新しい合成文化」との差異は相対的であり，両者の差異が一方を，「古いアフリカ」つまり文化的伝統を体現しているように見せ，他方を「新しい」文化に見せるのにほかならない。同じことは，「新しい合成文化」と「移入されたヨーロッパ」文化との関係についても当てはまる。後者とのコントラストが強調される状況では，「新しい合成文化」は伝統的なアフリカに見えるだろう。しかし，それと同時に後背地の「古いアフリカ」と対比されれば，「新しい合成」のアフリカ文化に映るだろう。このアフリカ文化の「新しい合成」の側面を強調すれば，つまりホブズボウムらが概念化した「創造＝発明（invent）された伝統」（ホブズボウム／レンジャー 1992）に該当する。マリノフスキーの三文化領域の枠組みは，接触の状況において伝統のアイデンティティが析出する過程を考える上で，示唆的である。

6 「いま現在の過程」——マリノフスキーの求めたもの——

6.1 課題と回答

文化接触研究をともに推進してきた弟子たちに対するマリノフスキーの批判は，共同研究者に向けたものとしてはあまりに厳しい批判のように見える。それは，マリノフスキーと弟子たちとの理論的格闘の苛烈さを示すとともに，マリノフスキー自身の内面的な格闘を証言するものでもあったろう。メアのゼロ・ポイント仮説，ハンターの文化「混合」論はいずれも，「いま現在」の現実とは異なる時空に想定された統合体に意味関連を求め，それを参照することによって現在時の現実を理解しようとする方法である。この方法を退けることによって，「現在」をそれ自体の条件によって理解する方法が残される。しかしここでも，「現在」を統合体として理解しようとするフォーティスの方法は退けられた。シャペラの社会史は双方の欠点を併せ持つものであり，それだけ論外である。いずれも，現実の中に何らかの統合システム的な意味関連を読みとろうとする試みである。これらの方法を退け，いわば外堀を埋めることによって，マリノフスキーはみずからが求めたものの核心へと，自分自身を追いつめていった。それは，完成したつまり過去の整合的システムではなく，その対極にあるもの，つまりたがいに異質でさえある要素が雑多に混在して相互作用している「いま現在」の過程だった。

1930年代のアフリカにマリノフスキーが見出したのは，まさにこのような，矛盾し対立する諸要因が作りだすダイナミックな変化過程である。「変化という現象の本質は，……二つの異なる文化的世界の相互作用にある」(Malinowski 1938: xiv)。それは「平衡状態ではなく変化であり，妥協と葛藤，あるいは協力を伴う変化である」(Malinowski 1938: xxxvi–xxxvii)。この流動的な過程を捉えようとするマリノフスキーは，しかしながら，読者に二面的な印象を与える。一方では，この流動的な過程を観察し分析する方法を，一般的な形で定式化することを求めた（ただし定式化自体は将来の課題として残したままで終わった)。他方で，流動的な眼前の過程を捉える視野と手順を，具体的な形で示そうとした。この二面をあわせて評価すれば，マリノフスキーは問題提起に終わったというのが，妥当な結論だろう。私の理解では，時間とともに進行する過程を捉えるという課題を，人類学は現代にいたっても充分には解決しえていない。その意味で，マリノフスキーの苦闘は現代でもなお振り返る意味を保っている。

6.2　現在進行中の過程を把らえる

1930年代のアフリカ植民地に見出した文化接触の過程を，マリノフスキーは，おおむね次の3点に要約される手順で把握しようとした（Malinowski 1938: xvi, xix–xxv, xxxvi–xxxvii)。

(1) 現在時の変化しつつある文化的状況を，文化接触の観点から把握すること，つまり，必ずしもたがいに整合しない二つの文化が参与する相互作用の過程として把握すること

(2) この文化接触が作りだす多様な文化変化の現実を，包括的に把握すること，具体的には，文化接触が色分けする「古いアフリカ」，「移入されたヨーロッパ」，「新しい合成文化」の三領域を視野におさめること

(3) 三領域をそれぞれ個別に研究し，それぞれに作用している独自の「文化的決定性」(determinism) を分析し，その後に三領域の知見を総合すること。

(3) で言及される「文化的決定性」という概念は，後に改めて考察するように，内容が明らかではない。この表現は，とくにマリノフスキーが「新しい合成文化」の特徴として描いたものに，そぐわないように思える。文化接触の過程，とりわけ「新しい合成文化」領域で生起している過程について，マリノフスキーは，システムないし構造としての規則的な特徴ではなく，むしろこの過程に関与するヨーロッパ的要素，アフリカ的要素，そして新しい「合成文化」的要素の3種の要素を洗い上げ，これら

諸要素の間の相互作用を観察し分析する必要を指摘していた。

一例として，鉱山や農場などの大規模な産業についてマリノフスキーが挙げているものを見てみよう。ヨーロッパ的要素として，計画，資本，設備，交通，その他さまざまの機材，技師などを挙げ，アフリカ的要素として，環境と労働者を挙げる。これらを単に混合しても，産業は成立しない。これらを一つの産業へと組織するには，「新しい合成文化」の要素を生みだす必要がある。

> 人種差別，それを支える法制，保留条件つきの雇用，不況時に余分の労働者を部族地域に送りかえす失業保険の方法，人種によって差別した賃金，アフリカで広く行われている［契約当事者の］一方のみが刑事罰を課せられる労働契約，それにサインさせるための誘導策。これらはヨーロッパに原型があるわけではない。これらはすべて，ヨーロッパとアフリカの双方にとって新しいものである。……［これら諸要素を巻きこんで］現実に生起するのは，人種差別，政治的経済的帝国主義，［人種］隔離の要求，ヨーロッパ人の生活水準の維持と保護，そしてこれらのすべてに対するアフリカ人の反発など，一定の［文化］接触の諸力の相互作用である。
>
> アフリカの労働者は，……集団交渉を知らない。それは需要と供給の原則に従うことを許されていない商品である。それは法的，経済的，社会的にヨーロッパの労働者とは異質である。同時に，この労働者はいかなる方法でもアフリカの部族経済と関連することができない。……ここでわれわれが扱わねばならないのは［これらの］巨大な現象であり，その本質は，新しい必要に対応して生まれた一群の経済的，法的，社会的諸条件によって定義される。ヨーロッパ人による，西欧の目的のための，そしてアフリカ人労働者を手段とした，アフリカの資源の大規模な開発という必要である。(Malinowski 1938: xx–xxi)

こうしてマリノフスキーは，植民地で生起している産業の諸現象を，多様な――理論的に整理すれば三種の――要素の間のダイナミックな相互作用の過程として，具体的に認識することを求めた。なお，ここでの論旨から外れることであるが，ここに引用した文章から，植民地の現状に対するマリノフスキーの広い視野と批判的な視線とを読みとることができよう。

6.3　視野の拡大

フォーティスのように，植民地の「部族」社会を，そこに駐在する植民地支配の実行者たちを含めてであれ，一つの統合的社会と見なす限り，観察と分析の視野はこの統合的社会に限られる。人類学者の関心が文化接触ではなく，ゼロ・ポイントないし「手つかず」の「部族」文化にあるならば，研究の視野はさらに限定され，調査地の，ヨーロッパ人などを除いた当該「部族」成員のみを，観察することになろう。

植民地で進行中の文化接触に研究課題を置いたマリノフスキーは，まったく逆に研究視野の拡大を求めた。さきに引用した，1930年代のアフリカの現状を鳥瞰したマリノフスキーの文章に，「新しい合成文化」領域に所在する金鉱に関連して，次の指摘があった。

> 町は重要な金の輸出貿易センターであり，［それを理解するには］アフリカの労働［市場］と天然資源のみならず，世界市場，海外の産業センターおよび金融組織との関係を視野に入れた社会学者が研究する必要がある。(Malinowski 1938: viii)

さらに彼は，「接触」に関与するヨーロッパ的要素に関して，機能的関連をたどって他の要素へと視点を移し，結果として世界的な視野を要求した。

> ［文化接触の］ヨーロッパ側に関連してわれわれは，本国政府，その植民地政策，行政システムを考慮しなければならない。キリスト教宣教組織の世界，……教育システム，入植者のコミュニティ，そして西欧資本が経営し，世界市場に供給する企業がある。これらの研究は……現代の民族誌家に新たな視野を要求し，西欧の政治的，経済的，教育的意図に関する社会学に通暁する必要を強いる。……現地の白人の調査に加えて，それを補うものとして，文献的証拠，政策とその実行者の知識，宣教団の目的の研究，そして少なくとも現代の帝国主義経済に関する限定された知識が必要である。「間接統治」や「隔離」，……「原住民の権利」などさまざまな机上の政策ないしスローガンがいかに接触の実行者の実際の施策と関連しているのかに，［文化］接触研究の課題と困難……がある。(Malinowski 1938: xvi–xvii)

この広い視野は，1930年代の人類学者がみずからに課した視野の要求としては，破格のものである。というよりも，人類学者がこれに匹敵する広い視野で現象を考察し始めるのは，開発研究が人類学の中に定着した1970年代，80年代のことにすぎない。マリノフスキーは，現象の機能的な関連をたどって数珠つなぎに視野を拡大するよう求め，それが当時の人類学の常識的な研究範囲をはるかに越えていたにもかかわらず，この要求に躊躇しなかった。現在時の過程を捉えようとするマリノフスキーの方法は，その後の人類学が乗りこえるべきいくつかのハードルに，すでに到達していたといえる。

6.4　未達成の課題

マリノフスキーは具体的な事象に即して，文化接触の過程を追求する手順を示した。アフリカの現実を理解するために，世界大の視野で現象を追う必要も指摘した。個別

の現象を研究するには，彼が示した手順と視野は，一種のガイドの役を果たすことができるだろう。しかしそれだけでは，彼が「文化接触の研究方法」――彼が序論を寄せた論集の書名――を一般的な形で示したとはいえない。

文化接触の研究方法を述べて，マリノフスキーは「文化的決定性」という表現を用いていた。文化接触の現象に関与する「公約数」を追求し，「新しい合成文化」の「文化的決定性」を研究する（Malinowski 1938: xxxvii）といった表現である。いずれも「科学的」な法則定立の語彙であり，マリノフスキーが文化接触の研究でも，ラドクリフ＝ブラウンたちと同じく，「科学的」な目標を共有していたことを示している。この目標設定からは，文化接触の研究方法を一般的な形で定式化するよう，マリノフスキーに期待してもよいだろう。論集の寄稿者たちがアフリカの現実に直面してさまざまに考案した方法を，マリノフスキーは批判した。その批判の厳しさからも，マリノフスキーにはそれにふさわしい彼自身の方法を提示することが期待される。しかし，彼がこの期待に応えたとはいえない。文化接触の「公約数」に言及した箇所で，マリノフスキーは同時に，この言及が当面の論考の範囲を超えているとした上で，次のように述べた。

> 文化接触を現場（フィールド）でいかに研究し，理論的分析においていかに扱うべきかという主題について，より積極的な見解を近い内に示したいと思っている。(Malinowski 1938: xxxvii)

この見解は，しかしながら，示されることなく終わった。マリノフスキーが，「現在」を過程として捉えるという志向を，新たに取り組むべき課題として自覚していたことは確かである。彼みずからが人類学の基本的な方法として確立しようと努力してきた「フィールドワーク」について，「古い」と形容し，文化接触研究では有効性を失っていることを述べていた（5.8節参照）。さらに，彼はアフリカの現実を前にして，機能主義の限界をも認識していた。

> フォーティス博士が「機能的方法の可能性を限界まで」開拓するという目標を掲げる時，私は「機能主義宗家」として当然のことながら彼に賛成する。この方法は，しかしながら，一つの文化，それも，時代を経た長期の歴史的発展をとおして，よくバランスのとれた平衡状態に到達しているような文化の記述分析の目的に，使い古されてきた。単純な形態での機能主義が依拠するこの二つの大前提は，接触の研究では破綻する。(Malinowski 1938: xxxvi)

しかし，現在時に進行中の過程を捉えるというこの新たな課題に対して，マリノフスキーは，具体的な観察と分析の手順を例示するのにとどまり，方法を一般的な形で定式化するにはいたらなかった。マリノフスキーにはこの課題に応える時間的余裕が残されていなかった。仮にその時間的余裕が与えられたとしても，彼がそれに成功したという保証はない。マリノフスキー亡き後のイギリス人類学は過去のゼロ・ポイントへと回帰していった。その軌跡は，現在進行中の過程を捉えるという課題が，人類学にとってその後ながらく解決困難だったことを示している。そしておそらくは，現在進行中の過程を観察し記述，分析する方法は，現代人類学にとってもなお獲得すべき課題であり続けている。

7 現 実 批 判

7.1 実用的人類学の挫折

すでに述べたように，マリノフスキーは1938年に渡米し，39年に始まった世界大戦で帰欧を阻まれ，42年にアメリカで客死した。この歴史は何重かの意味で，マリノフスキーが実用的人類学に賭けたプロジェクトを挫折させた。第一に，マリノフスキーの死は彼の思考の死でもあり，思考の生きた展開を停止させた。もはや，新しい知見を得て，理論を新たに発展させることはなく，他者からの批判に反論することもなかった[18]。

第二に，すでに言及したように，30年代の大恐慌を含む状況は，ロックフェラー財団による研究助成が継続される可能性を失わせた。さらに戦争は，植民地における間接統治のみならず，間接統治をめぐる実用的人類学の議論，そしてアフリカ研究，人類学研究の全般を困難にした。国際アフリカ研究所の機関誌 *Africa* は1940年の途中から42年まで休刊を余儀なくされ，ほぼ同じ期間，イギリスの王立人類学協会の機関誌も極端にページ数を減らした。こうした機関誌類が再刊され，かつての生気を取りもどした後も，戦後に植民地統治体制がふたたび整備されるまでは，実用的人類学をめぐる考察は，結論を将来に託す形でしか行えなかった。第三に，しかしこの条件が整った頃には，すでにどの植民地でも独立が具体的な目前の課題として視野に入っていて，もはや間接統治は検討課題としての意味を失っていた。これら何重かの挫折は全体として，第二次世界大戦後のイギリス人類学を「古物趣味人類学」に回帰させる要因となった。

7.2　中断した思考

すでに見てきたように，実用的人類学について論じた初期の1929年，30年の論文と，晩年の38年，39年の論文の間には，いくつかの顕著な差異が見てとれる。マリノフスキーが実用的人類学を提唱してから，彼の学生たちが調査の成果を公刊し始めるまでの約10年間に，彼らによる同時代のアフリカの研究は大きな進展を見せていた。その間，マリノフスキーが人類学的知識の植民地統治への応用について言及することは，目に見えて少なくなっていった。晩年の論文で，アフリカに関する人類学的知識に関連して，政策立案の裏づけとなる現実性を述べないではない（たとえば Malinowski 1938: xi–iii）。しかしマリノフスキーの視線は，現実的知識の実用的価値よりもむしろ，現実そのものの透徹した解剖に向かっていった。「実用的人類学」という言葉を，晩年の論文ではほんの数か所（Malinowski 1939: 34, 38–40）を除いて，まったく用いていないのも，印象的である。この意味で，マリノフスキーの研究志向は実用的人類学から文化接触研究へと変化した考えるべきだろう。

歴史を考察するのに，現実と異なる仮定は無意味だといわれる。しかし，それでもなお私は，マリノフスキーが戦後まで生きていたらという想定を禁じえない。マリノフスキーの植民地認識を，彼の実用的人類学が挫折した要因の中に数えること，あるいはむしろ，その最大の要因と考えることは，不自然に見えるかもしれない。しかし，彼の「徹底した経験主義」（thorough-going empiricism）（Malinowski 1939: 27）は，植民地の批判すべき現実の認識を深めさせていった。マリノフスキーの思考が生命を保ち続けていれば，彼はやがて，実用的人類学——間接統治に実用的＝現実的な価値のある知識を提供する人類学——への関与を困難にする地点にまで，植民地の現実批判を強めていったのではなかろうか。第二次大戦後の植民地が独立へと向かう動きの中で，マリノフスキーがどのように植民地認識を変化させていったのか，できることならばそれを見たかったと思う。

7.3　植民地統治批判

1929年当時，マリノフスキーが実用的人類学を提唱した背後には，従前の植民地統治政策に対する徹底した批判があった。宗主国によるアフリカの植民地支配という大枠を承認した上での批判であり，その対象も，現地の現実に適合しない不適切な統治政策という，限られた側面にすぎない。しかしそれでもなお，マリノフスキーに関する限り，実用的人類学の推進と植民地統治批判とが対をなしていたという事実は，忘

れることのできない特徴である。

植民地統治政策に対するマリノフスキーの批判がどの程度のものだったのか。実用的人類学を提唱した直後の論文に，それをうかがうことができる。マリノフスキーの提唱した実用的人類学に対し，植民地の現場の実務家が同じ *Africa* 誌に否定的な見解を寄せ，人類学を，植民地統治に貢献する能力のない非現実的な学問として揶揄した（Mitchel 1930）。マリノフスキーはただちに反論を寄せ，そこで積年の批判を爆発させるように，激しい言葉で統治政策を非難した。この実務家が描いた人類学像は，マリノフスキーがまさに革新を呼びかけた旧世代の人類学だっただけに，彼の反論の激しさには，人類学に対する彼のいらだちも加わっていたと思われる。

> ［植民地統治の］実務家はしばしば［彼らが非難する古物趣味の人類学が野蛮な慣習について述べるのと］等しく仮想的な根拠にもとづいて，「人殺し」と叫び，原住民を吊し首にする。場合によればそれによって原住民の復讐を呼び起こすだろうし，そうなればわれわれは懲罰的討伐を見ることになる。この討伐では，「実務家」はみずからが殺人者として行動するだろう。……不幸なことに，私は実務家が……原住民部族全体を悲しみに陥れた現実のケースを，南洋から数おおく引用することができる。ニューギニアのゴアリバリ大虐殺の報告，南洋の「ブラックバーディング」の歴史，あるいは「ブラックバーディング」で駆り出されたカナカの故郷メラネシアへの送還を述べたデータ，……南洋における懲罰的討伐のおおくの先行例を［実務家に］読ましめよ。アフリカは私の専門のフィールドではないが，その私でも，「懲罰的討伐」，白人による原住民の皆殺し，「正義，威信，白人の名誉」の名による奇妙な報復が，あの暗黒大陸でもやはり行われたこと，「人殺し」のタイトルに値するのは現地のアフリカ有色人のみではないこと，このような罵倒語を自己の人種的優越の印として用いるべきは，決してヨーロッパ白人ではないことを，曖昧ながら知っている。（Malinowski 1930: 411）

若い頃，マリノフスキーは自身をコンラッドになぞらえたといわれる（Firth 1957: 6）。実際，行政官に植民地住民を指して「人殺し」と叫ばせ，その当の行政官を「殺人者」と指弾するマリノフスキーの筆致は，コンラッドを想起させるものである。同じポーランド出身のこの作家は，ヨーロッパ人の「文明」観の傲慢な矛盾――「文明」を自認するヨーロッパ人がアフリカでアフリカ人に仮想した「野蛮」以上の「野蛮」を演じた――と，その犠牲になったアフリカの悲惨とを描いている[19]。

この論文でマリノフスキーは，土地政策などの具体例をあげて，植民地行政府の無

策を非難し，植民地統治に人類学的知識を活用するよう求めた。また，イギリスの植民地統治が人類学を軽視してきた一例として，植民地行政官の養成を，ベルギーやオランダでは四年制の教育課程で行っているのに対し，イギリスでは一年コースのみであり，「特別なもっとも重要な学科つまり人類学」はこのコースの教科目の十分の一を占めているにすぎないと指摘している（Malinowski 1930: 420–421）。事業家や宣教師など，植民地に関与する人々は，立場に応じてさまざまに利害が対立する。その中にあって，行政官のみが

> 原住民の利益を養護せねばならぬ立場にある。原住民は自己自身の運命について決定に参与できず，実際参与していないからだ――ただし遅かれ早かれ合同の評議に彼らの参加を認めねばならないだろうが。（Malinowski 1930: 423）

と述べ，このような行政官の職務だからこそ，行政官の人類学的訓練が必要だと説く。

> ［人類学の］訓練はアフリカ原住民に特有の社会組織，慣習，信仰に関する専門的な知識を与えるのみではない。それは行政官に人類学的な見方，つまり他の文化を理解し，共通の関心事を原住民の側から理解する能力を与えるだろう。（Malinowski 1930: 426）

7.4　植民地主義批判

後年の論文では，このように直接に植民地行政官に語りかけることも，植民地の状況を具体的に指摘して，人類学的知識の効用を述べることもなかった。同時に，統治政策に批判的に言及することもなくなる。それにかわって，植民地の現実に向けるマリノフスキーの視線は鋭さを増し，認識した現実を表す言葉には，その現実をもたらした当事者に対する批判が込められてくる。そのいくつかの例は，これまでに引用した文章にも読みとれる。ここでは，もっとも強い批判を表す現実認識を引用しよう。ヨーロッパとアフリカの間の相互作用に関連して，

> ヨーロッパが与えるギブはつねに高度に選別的である。われわれは……われわれの文化の以下の要素をいかなる原住民にも与えることはない。……（1）物理的な力の装置，つまり火器，爆撃機，……（2）われわれの政治的支配の装置……つまり主権。……原住民には，わずかの少数者を除いて，参政権がない。……（3）経済的な富と機会の実体部分をわれわれは彼らと共有しない。金鉱，銅鉱から産出される金属は，アフリカ人の水路に流れ込むことはない。［アフリカ人が手にするのは］不十分な賃金のみである。……（4）われわれは教会の信徒会議，学校，応接室で，アフリカ人を［われわれの］同等者として受け入れることはない。……政治的，社会的に，そして宗教においてさえ，完全な平等が与えられ

ている場所はない。

実際，［両者の関係の］問題はつねに，与えるもの（ギブ）……ではなく，取るもの（テイク）である。土地は大規模に，しかも通常はもっとも豊かな地域で，アフリカ人から接収された。……アフリカ人は課税されるが，税収は決して彼の管理下にはない……。彼が従事せねばならぬ労働は，自発的とされるが，それは名目にすぎない。

これに対して，ヨーロッパが善意，自己犠牲，無私の目的からアフリカのためになしたことをすべて挙げれば，長いリストができることに疑いはない。……しかし，与えたものを取ったものに対置させて価値を評価するならば，われわれは，精神的な贈与は容易に与え，しかしなかなか受けとろうとしないことを，忘れてはならない。他方，物質的な贈与は容易に受けとるが，不承不承にしか手放そうとしない。われわれがもっとも気前のよいのは精神的贈与のみであり，われわれは富，権力，独立，そして社会的平等を，自分たちだけに留めようとする。以上［の指摘］は告発でも原住民支持の主張でもない。これは単に一つの警告，［文化］変化の研究から真の［現実の中で作用している］駆動力を除外するアプローチは，必ずや偏った一方的なものになるという警告である。(Malinowski 1938: xxii–xxiv)

植民地統治との関連で人類学を批判するのは，行政官ばかりではなかった。「『進歩的』な原住民や，善意のしかし人類学的な情報には通じていない原住民支持派ヨーロッパ人」は，人類学をしばしば「抑圧的反動的保守主義」と非難する。それに対してマリノフスキーは，間接統治の意義を強調して次のように述べる。

間接統治の原則は実際，アフリカ人とヨーロッパ人の共通の利益の認識に基礎を置いている。ヨーロッパ人にとって間接統治は安上がりでより効率的である。……それは統治される者の合意による統治の原則を表している。

しかし，ヨーロッパ人の企業となると，共同の利益という共通の要因はたしかに顕著ではなくなる。西欧の企業が鉱山やプランテーションや工場でアフリカ人労働者を雇って得た利益は，容易に述べることができる。……［他方で］リチャーズ，シャペラ……らの［文化］接触の研究は，ヨーロッパ人に雇われる労働力の大量流出が［社会］組織に対し破壊的な影響を与えたことを示した。科学的人類学はかくして，略奪的な労働［雇用］方針は，長期的な視野では，アフリカ人労働者の供給源というヨーロッパ企業の最大の資産に対し，逆効果であると主張する。

接触研究の人類学者は，雇用方法と賃金システム，人種差別法制の影響，アフリカ人労働者の変則的な契約形態の影響，通行証（パス）法の影響などを……科学的，客観的に研究せねばならない。人類学者は科学的な研究において，いかなる党派的な問題，あるいはいかなる現実的＝実践的な問題にもとらわれる必要はない。……かくして，もし人類学者が賃金に依存する家族の家計を調査するならば，収入が決して支出と釣り合っていないことを見出すだろう。科学的なフィールドワークは，鉱山労働者が受け取る賃金が，彼が出稼ぎに出ることによって部族経済に生じた損出の総額を補うものではないことを暴露する。このことからさらに，彼は義務として次の結論を下すだろう。原住民の蓄えを不可避的に貧困化

させるようなシステムは，栄養不良，社会組織の解体，道徳的退廃をとおして，必ずや人口衰退を結果する。……

［文化］接触と変化の科学的なフィールドワークは……公平に，数量的に，かつ具体的に，家計の収支，部族経済に与える損出の額，見込まれる現金収入，部族的な起業にとって正当な労働雇用の限界などの問題を研究する。このようなフィールドワークは，ヨーロッパ人企業の将来が，新たなバランスのとれた経済という確固とした基礎の上になりたつか，あるいはそれは本質的に略奪的であるかという疑問に直接かかわっている。（Malinowski 1939: 36–38）

7.5　遡及的批判と同時代的批判

文化接触研究を推進する努力の最終局面で，マリノフスキーが到達していた植民地認識は，このようなものだった。彼は，西欧（人，権力，資本，キリスト教）と植民地現地（人，社会）の間の，政治的，法的，経済的不平等を認識し，植民地を支配する西欧の，精神的，道徳的な不公正を指摘している。直截に批判や非難を表明する言葉を用いてはいない。しかし，ここまで透徹した現実認識は，認識の質において「批判的」というに値する。彼の認識は，確実な現実認識が持ちうる説得的な批判を含んでいた。

ただし，植民地支配の歴史的評価が確定している後世の視点からすれば，マリノフスキーが示した認識はむしろ当たり前の認識であり，批判は穏健でさえある。独立運動を推進した当事者や，それを支援した西欧の知識人，彼みずからがいう「『進歩的』な原住民や，……原住民支持派ヨーロッパ人」にとっては，取り立てて植民地主義「批判」と形容するほどのものではなかっただろう。すでに述べたように，マリノフスキーは宗主国による植民地支配を容認した上で，植民地の現状を批判的に認識した。その意味で，ジェイムスによる「気の進まない帝国主義者」というマリノフスキー評（James 1973）は当を得ている。

しかし，どのような評価を下すにせよ，後世の時点から時間を遡って行う歴史批判は，過程的な出来事を結果によって判断する。また，この批判は批判の時点での歴史認識に依拠する。ここで判断材料となっている「結果」も，依拠している「歴史認識」も，過程のさなかにあっては未確定の未来に属していたはずのものであり，過程を生きる行為者には，参照することができない。歴史の批判は，未来が未確定な過程のさなかにある者と視野を共有しつつ，行うべきものであろう（4.5節参照）。

7.6　人類学者の思想的条件

たとえ後世の視点からは平凡に見える批判だったとしても，戦間期にマリノフスキーほど経験的認識にもとづいて植民地の現状を告発し，統治政策を公然と批判した人類学者はいなかった。良くも悪しくも，それが人類学の歴史的事実である。

植民地支配に対して人類学者が現実にとりえた思想的な態度の幅は，どの程度のものだったのだろうか。マリノフスキーのセミナーに出席し，アフリカ研究を行った人類学者といえば，マリノフスキーの次の世代に興隆するイギリス系社会人類学の主力を担った人たちであるが，彼らの出身は驚くほど国際的だった。イギリス本国人は，エヴァンズ＝プリチャードなど，むしろ少数であり，おおくは植民地の南アフリカ出身，あるいはヨーロッパ大陸の出身だった。そして彼らのさらに次の世代に当たるグディによれば，彼らのおおくはユダヤ人であり「赤」だった（Goody 1995）。彼らは，植民地行政府がもっとも警戒する部類の知識人だったというべきだろう。いずれの特徴も，マリノフスキーが推進しようとしていた，実地調査を組み込んだ人類学研究の実践にとっては，重大な制約条件として作用したと推測される。

マリノフスキーたちが実用的人類学を推進した1930年代は，世界経済が大恐慌を経てブロック経済へと移行し，宗主国相互の対立と宗主国内での階級対立は，国際共産主義（コミンテルン）と社会民主主義とファシズムのイデオロギー対立を伴って緊張を高め，最後は第二次世界大戦へと突入していった時代である。この時代状況から考えて，若い学生たちが思想的に「赤」だったとしても不思議はない。当時，イギリス本国のエリート大学で学んでいた学生は，大半が急進主義的な，ほとんど共産主義的な政治信条を抱いていたという（Leach 1984: 9）。ただし，これらはいずれも，後にイギリスのエリート校（ケンブリッジ大学）に身をおいた人類学者の回顧的証言である。「赤」という表現は，アカデミックでリベラルな関心の傾向を示す以上のものではなかっただろう。実際，「赤」と評された人類学者たちの著作に，マルクスの政治経済学や唯物史観の理論的影響は稀薄であり，階級闘争その他，マルクス主義の語彙を見出すことはない。

仮に尖鋭な「赤」の思想であろうとも，学生はそれを自己の思想として自由に選択できただろう。しかし，人類学を同じような自由さで選ぶことはできなかった。他に障害がなかったとしても，少なくとも彼らが人類学者として実地調査に赴こうとしたときに，植民地という調査地の状況が調査者を思想によって選別したからである。マリノフスキーの学生たちは国際アフリカ研究所のプロジェクトで調査を申請し，その

研究所の中枢部には植民地行政府の高官が参加していた。しかし，こうした条件にもかかわらず，アフリカの各植民地行政府は人類学者の実地調査にきわめて警戒的だった[20]。ストッキングとグディは，マリノフスキーの学生の中でキルヒホフ（Paul Kirchhoff）が，マリノフスキーらの奔走にもかかわらず，調査申請を拒否され，調査を断念せざるをえなかった経過を追跡している。彼はドイツの出身で，ベルリンを経由してロンドンに来，むしろロックフェラー財団からの推薦で，マリノフスキーのアフリカプロジェクトに参加した。彼が植民地への入境を拒否された理由は，公表されなかったが，彼が共産主義者で，ベルリン時代に左翼運動に参加していたといった疑いが，推測されたという。マリノフスキーはキルヒホフの調査許可を得ようと奔走し，拒絶が確定した後は，さらに調査地をアフリカからニューギニアに変えて，調査機会を作ろうとしたが，ここでもキルヒホフはオーストラリア政府から拒絶された。キルヒホフに対する二度にわたる拒否は，アフリカプロジェクトに参加した学生たちに，植民地行政府の姿勢の厳しさを実感させたという。キルヒホフの代わりに調査プロジェクトに加わったのが，南アフリカ出身のフォーティスであり，彼も共産主義思想を疑われたが，彼の場合は植民地行政府の査問をくぐり抜けて，調査許可を得ることに成功した。このフォーティスの顛末についてもグディは，マリノフスキーの奔走を含めて，詳細に追跡している（Stocking 1985: 136; Goody 1995: ch. 3）。

マリノフスキー自身，同じような選別を受けていた。彼がトロブリアンド諸島を含むメラネシアを調査したのは，第一次世界大戦のさなかである。この戦争は彼がオーストラリアに滞在中に勃発した。当時のマリノフスキーは，生国ポーランドの政治的地位を反映して，オーストリア国籍であり，戦争によって滞在国オーストラリアの敵国人となった。ただし，オーストラリアの扱いは寛大で，マリノフスキーはほとんど敵国人ゆえの制約を受けることなく，調査を行うことができた（ファース 1987: 15）。しかしそれは，マリノフスキーの経歴と行動がオーストラリア政府の許容範囲内だったからにほかならないだろう。

マリノフスキーらの提唱によって，人類学者自身による実地調査は人類学研究の不可欠の条件として確立していった。それは同時に，調査の実施過程が調査地の権力関係に制約されるようになったことを意味する。1930年代のアフリカのコンテクストでは，植民地行政府は人類学者の調査申請を執拗に審査した。同時期に実地調査を行い，人類学者となっていった者は，事実上，植民地行政府による選別を通過できた者に限られる。つまり，1930年代の状況で，思想的に尖鋭な反植民地主義者が人類学者になる機会は，ほとんどなかった。

さきに，マリノフスキーは自身の内発的な動機から植民地統治への貢献を意図したのではないことを見た。彼は積極的な植民地支配の支持者ではなかった。それと同時に，その裏返し，つまり当初から植民地支配の自覚的な批判者でもなかった。マリノフスキーは，職業的人類学者を成立させた外的制約が許容する範囲内の思想の持ち主であり，それゆえ，植民地統治への貢献を自己の立場として提唱することができた。この点はマリノフスキーの学生たちも同様である。彼らはアカデミックな関心の上では「赤」に見えたかもしれない。しかし同時に，植民地統治への貢献を意図した実用的人類学に，少なくともマリノフスキーの指導下にあった短い期間だけであれ，従事することができたのであり，その範囲内の思想の持ち主だった。

7.7　批判的認識のダイナミズム――「徹底した経験主義」――

マリノフスキーが実用的人類学を提唱した当時，彼は反植民地主義の思想の持ち主ではなかった。この点が，私の確認しておきたかった第一点である。これに，第二の特徴をつけ加えてみよう。つまり，彼の植民地の現状に関する認識が時とともに変化していったという特徴である。すでに見たように，植民地を見る視野は，現地人社会に焦点を絞った視野から，現地を支配する宗主国政治経済を含めた視野へと拡大し，それとともに批判的認識の対象も，統治政策から，現地人社会に与える西欧のインパクト全体へと拡大深化した。

この変化はどのような要因によるのであろうか。第一点として確認したマリノフスキーの思想的な背景，あるいは，晩年の植民地批判を深めていった時期の彼の思考の特徴などを考え併せるならば，同時代の西欧社会における思想状況から受けた刺激が主動因となって，植民地批判を深めさせていったとは考えにくい。彼は最後まで，宗主国による植民地支配を容認する「気の進まない帝国主義者」に留まった。植民地の現状を鋭く指摘した晩年の論文でも，批判的認識を表明する論理は機能主義であり，使用する語彙もまたリベラルなアカデミズムのものであって，決して反植民地主義運動や階級闘争の語彙ではなかった。マリノフスキーは主として自己の内面的な展開として植民地認識を深めていったと考えられる。

マリノフスキーが植民地の西欧人社会と現地人社会の間に政治的，法的，経済的不平等を見出し，それを表現する彼の語調が，批判を含意するのは，彼の認識した植民地の現実が，彼の理解する「間接統治」理念と一致しないからである。この理念も外的に与えられた条件であるが，マリノフスキーの理解によれば，西欧宗主国による植民地支配という条件を唯一の例外として，それ以外の条件では，西欧人と植民地の現

地人とが共同の利益を同等に享受すべきことを謳う理念だった。この理念を共有する一方で，マリノフスキーは人類学者として植民地の現実を具体的に認識しようとした。調査地の「いま現在」の現実に肉薄しようとする態度を，彼みずから「徹底した経験主義」と表現している（Malinowski 1939: 27）。そして，この「徹底した経験主義」が，アフリカ植民地の現実の中から「間接統治」理念と矛盾するおおくの事実を認識させていった。マリノフスキーの植民地批判を整理するならば，「間接統治」理念と矛盾する現実の摘発に尽きる。私がここで求めていたもの，つまりマリノフスキーを植民地の批判的認識へと導いたものは，彼がトロブリアンドを調査して以来一貫して身につけていた「徹底した経験主義」にほかならない。植民地の現実に対する彼の鋭い批判の言葉を想起するならば，認識する主体を変化させる「徹底した経験主義」の力を，改めて認識してよいだろう。

マリノフスキーがみずから関与するに値すると見た「間接統治」の理念は，所詮は植民地支配という枠の中で実現不可能な，自己矛盾をおかしたイデオロギーだった[21]。宗主国による植民地支配を容認する「帝国主義者」ではあったが，実用的人類学にかかわり始めたマリノフスキーは，「徹底した経験主義者」として植民地の認識を深めることによって，植民地の現状に「間接統治」理念とそぐわない収奪的な構造を見出し，植民地批判を強めて「気の進まない帝国主義者」へと変化した。この地点にまでいたれば，その後の選択肢として，マリノフスキーには，「間接統治」理念の実行を阻む要因へと関心を集中させる以外に，途はなかったと思われる。想像をたくましくすれば，それは「間接統治」理念の破綻を認識させ，植民地支配を全面的に批判する方向へと，彼を導いたのではなかろうか。しかし，マリノフスキーの歩みはその前の地点で終わった。彼が反植民地主義へと踏み出したかどうかは，彼の中断された未来に属していた[22]。

8　実用的人類学の浸透

8.1　応用人類学作業委員会

マリノフスキーが提唱した実用的人類学は，イギリス人類学の中で徐々に受け入れられていった。1937年，イギリスの人類学協会は「文化接触の諸問題，および植民地の諸人種の統治に対する人類学的知識の応用」に関して定期的に討議するために，協会内に応用人類学作業委員会（Standing Committee on Applied Anthropology）を設

けた。研究を推進すべき「典型的」問題として当初に予定されたものには，大衆的ないし村落レベルの教育，ヨーロッパ人関係者の妖術に対する態度，混住人口における原住民［慣習］法の発展，村落組織に対する出稼ぎ移住労働の影響，不法滞在者居住地区（squatter communities）の発展，新興宗教祭祀の発生，近年における「原住民」の政治的権威の機能的変化，諸種の課税が「原住民」の経済生活に及ぼした影響などが挙げられていた（Committee on Applied Anthropology（CAA）1937）。ちなみに，この作業委員会の目的のおおくは，マリノフスキーの実用的人類学と語彙レベルまで一致しており，彼の影響は明らかである。

人類学協会の会員誌 *Man* は，その後1年半にわたってこの作業委員会の活動内容を伝えている。それによれば，研究会では，「原住民」の教育問題（CAA 1938a; 1939d），経済開発や住民の健康改善などに障害となりうる現地人の慣習や偏見（CAA 1938a），卒業後は農村部に帰る学生に教育すべき，現地人の社会的現実にもとづいた道徳律（CAA 1938b），間接統治の理念と変化しつつある社会の実態との乖離（CAA 1938c），オーストラリア原住民（アボリジニー）の依然として続く人口減少（CAA 1938d），人口増加，換金作物栽培の拡大，環境の過剰開発などによって進行する土壌流出（soil erosion）（CAA 1938f），製茶産業における幼児労働（1939a），ヘイリー卿の報告書『アフリカ調査（サーヴェイ）』の合評（CAA 1939b），南アフリカの土地政策と「原住民」の経済状態（CAA 1939c），「原住民」農民経済と国際市場（CAA 1939e）など，多岐にわたるテーマを取りあげていた。いずれも，同時代の植民地住民が直面していた現実的なテーマであり，それぞれのテーマについて人類学として可能な貢献についても討議している。この委員会はまた，ある部族領域を南アフリカ連合に併合しようとする政策に関して，「原住民」の意見を聴取するようイギリス植民地相に求めた請願書を，採択してもいる（CAA 1938e）。

8.2　戦時下に描いた「社会人類学の将来」

実用的人類学の浸透は王立人類学協会（Royal Anthropological Institute）の設立百周年記念行事にも見てとることができる。同協会の発足は1871年であるが，協会の前身であるロンドン人種学会（Ethnological Society of London）が設立されたのは1843年であり，第二次世界大戦のさなかの1943年に百周年を祝った。式典では会長の挨拶に続いて，記念講演が行われた。J. マイヤーズ（協会の会誌 *Man* を創設し，長年同誌の編集長をつとめた）が学会および協会の歴史について，ヘイリー卿が「植民地の発展における人類学の役割」についてそれぞれ講演し（ただしマイヤーズの講演は病

気のために代読された），さらに「人類学の将来」を共通テーマとする連続講演が行われた。当時の概念での人類学を構成する主要な分野，自然人類学，考古学，社会人類学，物質文化研究の，それぞれに講演者が立ち，社会人類学はR.ファースが担当した（*Man* 1944）。

植民地行政官だったヘイリー卿が記念講演を行うという人選もさることながら，社会人類学の代表に，ラドクリフ＝ブラウンとマリノフスキーの双方に師事した，まだ若いファースが選ばれたということも，実用的人類学との関連で興味深い。彼は，戦争が終り，ふたたび研究が自由に行えるようになる時を見越して，「将来」の社会人類学を展望している。その展望では，もはや「未開」文化も過去の再構成像も主要な関心事ではない。社会の規模の大小を問わず，「いま現在」に生起している文化変化が主題であり，現実的＝実用的な志向が強調される。そして，この未来の人類学の推進には，学際的かつ国際的な協力が不可欠だと描いていた。

> 人類学者は主として未開民族，いわゆる野蛮人に関心を抱きがちだった。しかし，……過去百年あまりの間に……未開部族はかつての孤立状態を脱し，古来の慣習のおおくを失った。……現代の野蛮人はジャングルの中とおなじくゲシュタポの中に見出されよう。人類学者はすでにこの変化にあわせて研究の方向転換を開始し，いまでは彼らは文化変化……によりおおくの関心を払っている。
>
> 戦争が終われば，コミュニケイションはスピードアップし，栄養と健康などの生活条件の改善は一層促進され，そして自治の要求は加速的に高まると予測することができる。その他の運動も含めて，これらの動きは一層複雑な変化の問題を人類学の研究課題とするだろう。
>
> われわれ［人類学者］は，文明の外縁部に孤立した部族を研究することに反対しない。……［彼らとの親密な交流，複雑な儀礼など］そこに見出されるものは，概してわれわれの好むところである。……しかし，同じように興味深い問題が……現代のアフリカ，太平洋，あるいは極東の変化しつつある文化の中に見出される。
>
> 戦争が終われば，農村的な文明であれ産業的な文明であれ，［ヨーロッパ，中国，日本などの］古い文明を持った社会でも巨大な規模の変化が起こるだろう。……この種の問題については，すでに「社会保障，教育改革，国際協力，対等な関係（パートナーシップ）の植民地理論，宗教への回帰」などが研究題目になっている。……
>
> この将来の科学領域では，……明らかに社会人類学は単独では成果を上げることができない。他の社会科学との共同作業が必要である。……人類学はまたそれ自体の研究領域でも，従来にまして広範にそしてより網羅的に，国際交流を組織せねばならないだろう。非常におおくの国々から専門の人類学者が輩出してくることが望まれる。中国人，アフリカ人，アメリカ人，ヨーロッパ人（そしてヨーロッパ外ではロシア人も忘れずにである），インド人，そしてインドネシア人の参加が，彼ら自身の社会の問題を研究するためばかりでなく，相互の問題について外部者によるあの有用な比較分析を提示しあうために，求めら

れるだろう。……
［さらに］人類学者が現実的＝実践的問題について益々大きな役割を要請されるようになるという兆候がある。そして私は，そうなることがわれわれの望みでもあると考える。……（Firth 1944: 20–21）

これが，第二次世界大戦のさなかにあってファースが展望した，戦後の来たるべき時代の社会人類学だった。さまざまの課題の取りあげ方は，羅列的で未整理であるが，それでもなおこの「社会人類学の将来」像は，半世紀以上を経た現在の人類学者に，新鮮な響きを伝えないだろうか。それは1938年の論集『アフリカにおける文化接触の研究方法』（Mair 1938b）とは異なって，理論的な枠組みがとりたてて新しいというのではない。対象世界の現実，その変化に，敏感に応答し，把握していこうとする真摯な経験主義の新鮮さである。ファースが例示する研究テーマのおおくは，時代を現代に置き換えてもなお有意義でありうるようなテーマであり，彼の要請する学際的，国際的協力も，いまなお要請されている課題である。この時点でイギリスの社会人類学は，同時代の地球上のあらゆる種類の社会で生起しつつある文化変化を，視野に収めつつあり，研究テーマに対する姿勢は学術的であると同時に実践的だった。いずれも，マリノフスキーの構想に一致する方向である。

個人的見解と断りつつも，ファースは社会人類学を代表して，このような社会人類学の将来像を描くことが可能だった。第二次大戦後のイギリス社会人類学の軌跡を知ってしまった者としては，ファースの展望と実際の歴史とのあまりのコントラストに驚くほかはない。ファースの講演は，社会人類学分野の代表がこの「個人的」見解を示しうる程度に，マリノフスキーの提唱が人類学者の間に定着していたことを証している。

8.3　科学的研究と実用的研究の乖離

ファースの展望からやや遅れて，リチャーズが実用的人類学の回顧を *Africa* 誌に寄稿し，ファースよりやや悲観色の濃い見解を示した。彼女はファースより直截にマリノフスキーの貢献に言及して，彼の提唱した人類学の改革が広範に受容されていることを指摘する。「研究所が設立されて以来，人類学者の関心の焦点は革命的といえるほどに変化した」（Richards 1944: 291）。急速に変化しつつあるアフリカの大規模な社会を，人類学者は当たり前に研究するようになり，大学も文化接触の授業を開講し始めた。行政報告に人類学の観点と語彙が散見されるようになるなど，人類学者の

研究は行政にも影響を及ぼしつつある。このように実用的人類学の浸透を評価しながらも，リチャーズはこの浸透の限界と困難を指摘する。人類学者の提供する知識の現実的な活用の面では，ほんの僅かしか成功していない。その最大の要因をリチャーズは「実用的」人類学と「理論的」人類学の乖離に求めている。

宗主国で教育を受けた人類学者はおおむね，専門的人類学者だけの関心を惹くような理論的問題――その中には文化変化を含まれる――を追求し，専門的な語彙を駆使して議論する。人類学者の研究は，長期的な視野では，植民地に関する基礎的な知識の提供という点で，植民地行政官などにとって有用でありうる。しかし，植民地の実務家にとって必要なのは，当面する課題に応える知識，土地権や首長位をめぐる係争といった具体的問題の解決に必要な個別的で詳細な知識である。リチャーズによれば，この両者の溝を埋めるには，行政府の求める知識を，行政官と密接に連絡を保ちつつ専門的に収集する，熟練した人類学者が必要であり，人類学者が自己の職業的専門をこのように特化するためには，人類学者として行政府内に安定したポストを与えられる必要がある。しかし，行政府は散発的に特定の問題の調査を人類学者に委嘱するのみで，それ以上のポストを用意しようとはしなかった（Richards 1944）。

マリノフスキーは，少なくともその当初の構想では，自然科学からの抽象的な類推に依拠して，「純粋」科学と「応用」科学の区別を認めなかった。科学の知見は実験と応用によって真実さが確認される。同じようにして，科学的人類学は「純粋」理論と「応用」の統合の上になり立つ（Malinowski 1930: 419, 428–429）。この観点からマリノフスキーは，「いま現在」の現実に関する知識，そして現実に応用可能な知識を提供するよう，人類学者に求めた。しかし，植民地に関する知識がどのような条件をそなえていれば，植民地統治の政策立案に参照しうる知識となるのか。マリノフスキーはこの条件に踏みこんで考察してはいない。むしろ，植民地の現実を「科学的に」調査すれば，それで政策立案に参照可能の知識を提供しうると，楽観的に想定していたようである。

リチャーズはマリノフスキーより植民地統治の現場に近い位置にいた。彼女の認識は，マリノフスキーの実用的人類学の構想を，現場の条件に応じて一層深化させたものといえよう。彼女は，統治政策に活用するためには，マリノフスキーの想定以上に専門化した人類学的知識が必要であると指摘する。マリノフスキーにとって，実用的人類学は人類学そのものの変革された姿だった。しかしリチャーズは，人類学のより専門分化した一部門として，実用的人類学を位置づける。「そのような区別が可能であれば」（Richards 1944: 298）という保留つきながらも，彼女は「実用的」人類学と

「理論的」人類学の区別を想定し，前者を，植民地行政府の機能の一部として専門化した形態の人類学と捉えた。実用的人類学の専門化は理論的人類学の専門化と対応する。それは，植民地の現場から離れた純アカデミックな志向を，容認することに連なった。この点でリチャーズはマリノフスキーより寛容であり，実践的応用にまったく関心のない「科学者」が集めた資料にも「特別の（理論的）価値」があると認め，さらには「実用的な助言を求められたくはないと主張する最近の」人類学者の存在も容認した（Richards 1944: 297）。

リチャーズの認識は人類学の内部の専門分化を述べるのであって，そこに実用的人類学を軽視する意図は読みとれない。しかし，彼女が描いた人類学の専門分化は，アカデミックな志向の人類学者から見れば，まったく別の価値づけを伴う人類学の構成に映ったはずである。マリノフスキーの構想した実用的人類学は，実行に移され，深化することによって，アカデミックな志向に場を用意した。みずから批判し打倒しようとした，その当の相手に，活路を拓いて与えた。

9　ふたたびサルベージ人類学へ——マリノフスキー以後——

9.1　持続する人類学的関心

リチャーズには，戦間期の終わりの時点で，マリノフスキーの求めた変革が人類学に浸透しているように見えた。ファースは社会人類学がこの変革一色に染め上げられると展望した。しかし，いずれもマリノフスキーの同調者らしい見方というべきだろう。マリノフスキーの実用的人類学がもっとも影響を発揮した時期，つまり1929年の提唱から第二次世界大戦が終るまでの間でも，彼の提唱に積極的に応えた声は，イギリス人類学の中の周辺部に偏りがちだった。植民地の文化変化と統治政策に関連した論文は，テーマの現場に近い地域研究誌 *Africa* には，ごく当たり前に掲載されていた。しかし，人類学協会の雑誌では，一般会員を対象とした会誌 *Man* に散見されるのみで——さきに言及した応用人類学作業委員会の記事など——より専門的な機関誌 *Journal of the Royal Anthropological Institute* ではほとんど皆無に近かった。この専門誌の傾向はむしろ逆であり，マリノフスキーが非難してやまなかったスタイルの研究が，着々と整備されていた。

1931年の機関誌は，当時の人類学協会会長だったマイヤーズによる会長の年次講演「純粋および応用人類学」を収録している。この講演論文でマイヤーズは，マリノフ

スキーが2年前に行った「古物趣味人類学」の批判に応えている。彼は，「原住民の宗教や制度の研究は『古物趣味』であり，それゆえ役に立たない」とする主張，あるいは「原住民の社会や文化を『ヨーロッパ人と接触する以前にそうあったであろう』姿で研究」するのは無用だとする議論を，歴史を認識する意味を否定するものとして退けた。名指しはしなかったものの，彼が言及した議論はいずれもマリノフスキーのものである。マイヤーズはこの反論と同時に，人類学が植民地行政府に不評である事実に言及し，人類学に対する「実務家」の要求が性急だと反論する（Myres 1931: xxix–xxxi）。ゴールド・コーストでは，植民地行政府に人類学者として職を得ていたラトゥレー（R. S. Rattray）が退任した後，行政府はその後任を雇用せず，かわりに行政官に人類学的な訓練を受けさせて，必要な調査を行わせることにした。マイヤーズは，このゴールド・コースト行政府の措置を歓迎し，他の植民地政府も行政官に人類学的な訓練を受けさせる制度を設けるよう要請している（Myres 1931: xxvii–xxviii）。植民地統治に対する人類学の影響の無力について，マリノフスキーと同じように危機感を抱きながらも，マイヤーズの対応策は消極的であり，「古物趣味」志向も含めて現状容認に終始した。彼の見解は，マリノフスキーの提言に対する当時の人類学界の主流の態度を反映したものと考えられる。

イギリス人類学協会は，さきにも述べたように，自然人類学，考古学，物質文化研究そして社会人類学の集合体であり，社会人類学は機関誌の掲載論文の中で，この分野構成に見合った比重を占めるに過ぎなかった。他の三分野では進化論ないし伝播論に連なる歴史的関心が強く，マリノフスキーの「古物趣味人類学」批判を受け入れる用意は元々少なかったといえる。1930年代から1940年代半ばまでの機関誌の掲載論文を，マリノフスキーに続く世代の社会人類学者に限って追跡すれば，戦後の興隆を担う人材が数おおく寄稿しており[23]，その中にはマリノフスキーのアフリカプロジェクトで養成された者も含まれている。しかし，彼らの掲載論文はいずれも，マイヤーズに呼応するかのように，「手つかずの接触以前の」文化に注目するものであり，親族，儀礼，戦争，呪医，物質文化，生業，呪術など，伝統的な人類学的関心に沿ったテーマについて考察していた。

9.2　ラドクリフ＝ブラウンとオックスフォード・グループ

これら若い世代の人類学者に対して，当然のことながら，マリノフスキー自身のトロブリアンド研究も影響を与えていた。さきに述べたように，彼は1930年代の前半まで，実用的人類学の指導と並行して，「手つかずの」文化に焦点を当てる手法でトロ

ブリアンド民族誌を書き続けていた。しかし，再構成した「接触以前の手つかずの」文化を理解する理論と方法について，マリノフスキーがトロブリアンド民族誌以後さしたる進展を見せず，理論的関心を文化接触研究に集中させていったのに対し，ラドクリフ＝ブラウンは着実に概念的考察を積み重ねていた。

植民地統治への関与という点ではラドクリフ＝ブラウンの方が先行していた。舞台はオーストラリアであり，彼は1926年以来，シドニー大学人類学科の初代科長教授を勤めていた。この学科は植民地行政官の養成を主目的の一つとして設立されたものであり，学科の設立と，設立後に実施されたオーストラリアオセアニア調査プロジェクトとは，マリノフスキーのアフリカ研究プロジェクトと同じく，ロックフェラー財団の資金助成で実現したものである。しかし，彼の後任のエルキンが慨嘆を込めて批評しているように，ラドクリフ＝ブラウンの志向は理論的に過ぎて，調査の知見を統治政策に応用するという現実的関心からは遠かった（Elkin 1956）。

ラドクリフ＝ブラウンは勤務する大学をしばしば変えたが，研究対象に対する姿勢はアンダマン諸島および西オーストラリア調査以来一貫していた[24]。ケープ・タウンに在職していた1924年に論文「南アフリカにおける母の兄弟」，シドニー時代の最後の仕事としてオーストラリア諸社会の概論（1930年），シカゴ時代に「父系的および母系的継承」（1935年），「社会科学における機能の概念について」（1935年），『社会の自然科学』（1937年）[25]を書いた。さらに，1940年にはイギリス人類学協会の会長に選ばれ，会長の年次講演として1940年に「社会構造について」，41年に「諸親族システムの研究」を論じた。また1940年の，戦争の混乱により休刊を告げる号の *Africa* 誌に，「冗談関係について」を寄稿した。これらはいずれも，ラドクリフ＝ブラウンの社会理論の骨格を提示するものであり，オーストラリア諸社会の概論と『社会の自然科学』を除いて，後に論集『未開社会における構造と機能』（Radcliffe-Brown 1952）に収録され，ながらく構造機能主義の理論的原典として影響力を発揮した。これらはいずれも，後世の人類学者の評価によれば，マリノフスキーに欠けていた理論を提供するものだった。

ラドクリフ＝ブラウンが提示したのは，「手つかずの接触以前の」「未開」社会を想定した上で，その統合形態を理解しようとする理論であり，理論の構えにおいて「古物趣味人類学」そのものである。彼は1940年の会長講演で，社会変化に触れて，マリノフスキーの名を明示せずにではあるが，「文化接触」という捉え方を批判した。それは，マリノフスキーの文化接触研究に対して表明された初めての批判だったといえる。この批判は，ブラウンがマリノフスキーの文化接触研究を無視していたのではな

いことを示している。しかしブラウンは，マリノフスキーの再三にわたる「古物趣味人類学」批判には応えることなく，無視を貫いた（Radcliffe-Brown 1940）。

1937年にオックスフォード大学に社会人類学科が新設され，ラドクリフ＝ブラウンがシカゴから帰還して，学科長教授に就任した。次いでエヴァンズ＝プリチャード，さらにフォーティスが加わって，小規模な学科の陣容がととのった。この三人の共同作業の最初の成果が，すでに見た1940年の論集『アフリカの政治システム』（Fortes and Evans-Pritchard 1940c）である。

スタンダードな人類学史として評価の高いクーパーの著作によれば，戦間期にラドクリフ＝ブラウンが練り上げていた「構造」および「機能」概念を，個別社会に適応可能な理論へと仕上げたのは，この40年の論集，およびそれと対をなす1950年の論集『アフリカの親族婚姻システム』（Radcliffe-Brown and Forde 1950）である。40年の論集は社会の全体構造つまり政治システムが，個別社会の構造機能的な記述分析にとって一つの課題であることを示した。50年の論集は同様にして，全体構造の中で諸個人を結合させる家族・親族システムが，研究課題であることを示した。両者は相互に補完しあって，個別社会を構造機能的に理解する枠組みを構成した。エヴァンズ＝プリチャードとフォーティスはそれぞれ，この二冊の論集と同じテーマの組み合わせで，時間的にもこの二冊の論集と前後して，二冊ずつの民族誌（モノグラフ）（Evans-Pritchard 1940; 1951; Fortes 1945; 1949）を公刊し，二冊の論集の理論を補強した（Kuper 1983: 83–87, 95–97）。彼らの提示した，政治システムと親族システムとからなる枠組みは，ラドクリフ＝ブラウンの社会観と同じく，仮設的な「手つかずの接触以前の」社会を対象として想定したものだった。

9.3　パラダイムの交代

図式化していえば，1930年代には，マリノフスキーの提唱した実用的人類学が，指導的パラダイムの役割を果たし，アフリカを中心に文化接触研究を推進した。他方，ラドクリフ＝ブラウンの構造機能理論は，1930年代末に大学での制度的地歩を確保し，40年代をかけて，もう一つの理論的枠組みとして内容を整備していった。二つの枠組みは，それぞれの対照的な時間的志向が示すように，たがいに相容れない性格のものだった。両者はイギリス系の社会人類学者に大きな影響を及ぼしたが，それには盛衰があり，指導的パラダイムの地位を入れ替えた。一方は上昇し他方は下降する両者の影響力の軌跡は，第二次世界大戦が終了した時点で交差した。それがつまり，イギリス社会人類学にとっての戦後期の始まりである。

マリノフスキーがアメリカに去り，やがて死去して，推進力を失いかけていたとはいえ，少なくともマリノフスキーの弟子だったファースやリチャーズの目には，彼らの推進してきた人類学の変革が浸透していた。彼らは，第二次大戦の終了が予見された時点で，来るべき戦後の人類学を文化接触および文化変化の研究として展望することができた。人類学をこの方向からふたたび，マリノフスキーが批判してやまなかった「古物趣味人類学」へと回帰させるためには，自覚的にかつ公然とパラダイムを転換する努力が必要だった。そして，その決定的な役割を担ったのがエヴァンズ＝プリチャードである。

9.4　エヴァンズ＝プリチャードの転向宣言

エヴァンズ＝プリチャードは，マリノフスキーがロンドン経済学院で開設したセミナーの最初の受講生だった。しかし，マリノフスキーが推進したアフリカの文化接触研究のプロジェクトには参加せず，むしろ，マリノフスキーより一世代上の「フィールド人類学者」で，同じロンドン経済学院で「民族学」を講じていたセリグマンの指導で，東アフリカで調査を行った（Goody 1995: 15–16）。1937年にはアザンデ人の妖術信仰をテーマとした重厚な民族誌（モノグラフ）を，40年にはヌア人の生業と政治システムの民族誌を相次いで出版し，さらにその間に，関連したテーマで調査結果を報告する論文を数おおく発表していた。ことに二冊の民族誌は，異文化の理解という人類学的な課題に応えた模範的な民族誌として，後々まで高い評価を保った古典である。ただし，エヴァンズ＝プリチャードの著書や論文は，サヌシア教団の歴史を扱ったもの（Evans-Pritchard 1949）を例外として，いずれも「手つかずの接触以前」を再構成して記述分析したものだった[26]。

そのエヴァンズ＝プリチャードは，第二次大戦後の研究再開に当たって，オックスフォード大学で講演し，実用的人類学を退け，「科学的」人類学への回帰を宣言した。彼はまたこの講演を論文として *Africa* 誌に寄稿した（Evans-Pritchard 1946）。論題は「応用人類学について」であるが，人類学研究の再出発という時にふさわしく，人類学のあるべき指針を述べている。それによれば，個々の人類学者が自己の価値判断によって植民地などの現実的問題に貢献しようとするのは自由である。しかし，人類学の「純粋に科学的な諸問題」の追求に道徳的な価値判断を差し挟んではならない。人類学の科学としての目的は人類社会および社会的発展の本質の発見にある。人類学者は，この目的に最適の知識を最適の方法で追求すべきであり，それがつねに実用的な価値を持つとは限らない。このような認識に加えて，エヴァンズ＝プリチャードは

次の四つの理由を挙げて，人類学研究の中で実用的問題を優先させることに反対した。それぞれの根拠に便宜的に番号をつけて，引用しよう。

(1) 人類学者が現実的諸問題を調査するならば，彼はもはや人類学の領域で活動しているのではなく，行政という科学外の領域で活動していることを知らねばならない。……政治的，行政的関心の圧力が……［本来］純粋に科学的な諸問題に取り組むべきわれわれ［人類学者］の小さな集団から，おおくの人材を吸収してしまうならば，われわれの科学の発展に深刻な遅延をきたす恐れがある。

政治や行政に対する人類学の価値は人類学の理論的な達成に依存するのであるから，人類学者はそれだけ一層，研究活動を科学的諸問題の追求に集中させるべきである。

(2) 長期的な視野でいえば，人類学研究の価値は，未開社会……に関するわれわれの理解に対する貢献ではなく，われわれ自身の社会とそこでの諸問題に関するわれわれの理解に対して行う貢献にある。……われわれは［自国の］人々にポリネシアや中央アフリカの社会システムについて説明しようとするが，それは人々がポリネシア人や中央アフリカ人に特別の関心を抱いていると期待するからではない。これらの知識をとおして，人々が人類社会一般の性格について，ひいてはわれわれ自身の社会……ついて，より明確な理解を得られるようにと意図してのことである。

(3) 科学の発展においては，研究者の最大の科学的関心事で，その解決が結果として人類に多大の恩恵をもたらすことになるような問題でも，その時点では実務家に無益としか見えなかったということが，しばしば起こる。……平定計画，土地所有の諸困難，労働移民といった問題は行政官の関心を惹く。親族システム，儀礼，神話は彼らの関心を惹かない。しかし，宗教と呪術など，人類学者がつねに関心を払ってきた基本的な諸問題の研究が，目先の利益を約束するものではないという，それだけの理由で等閑視されるならば，嘆かわしいことである。

(4) もっと重要なことに，……未開社会，その研究からわれわれは人間とその諸制度の本質について非常におおくを学ぶことができるのであるが，その未開社会がわれわれの目の前で消えつつあり，場合によっては社会とともに［未開の］人々自身が滅びつるある。われわれは，社会の修繕屋でも左官工でもなく，科学の人士であり，後世では記録しえない事柄を記録するという，われわれの時［に特有］の責任を負っている。［ハッドン博士は1903年に同様の呼びかけを行った。それ以来］42年間にわれわれがなしたことは哀れなほどに小さい。まだ取り入れていない収穫物は膨大であるのに，刈り入れ人は少数しかいないのだ。(Evans-Pritchard 1946: 93–94)

エヴァンズ＝プリチャードはリチャーズと同じように，人類学者が人類学的知見によって植民地行政に貢献するためには，行政府がその機構の一部として人類学者を雇用する必要があると主張する。人類学が実務家に軽視されているという認識は，マリノフスキーにも，またさきに参照したように，メイヤーズのような学界の重鎮にも，一種の危機感を抱かせていた。しかし，エヴァンズ＝プリチャードにそのような危機

感はまったく認められない。彼はむしろ，植民地行政府に次のように昂然と要求して，講演論文を締めくくった。

> もし彼ら［植民地省および各植民地の行政府］が有能な人材の助力を欲するのであれば，そのような人材を引きつけるようなポストを行政府の中に設けなければならない。そうすれば，［数少ない大学に拠点を置く人類学者は］科学的な調査を，［行政府からの要請に］いつも邪魔されたり歪められたりすることなく，安んじて遂行することができ，しかも同時に，科学的調査がもたらす知識を植民地［行政府内の応用人類学者を介して］行政の分野に応用することができる。(Evans-Pritchard 1946: 98)

エヴァンズ＝プリチャードはこの講演で，人類学に関して，リチャーズの内部専門化の構図（8.3節参照）とほぼ同じ構図によって立論している。しかし，価値づけと結論はまったく独自であり，その論点の一つ一つが，マリノフスキーを名指しこそしていないものの，マリノフスキーに対する反論である。

マリノフスキーが政策立案に参照しうる現実的な知識を求めたのに対し，エヴァンズ＝プリチャードは「人類学者がつねに関心を払ってきた基本的な諸問題」を追求すべきだという。彼が実務家の関心事として列挙したものは，マリノフスキーが調査するよう求めたテーマだった。マリノフスキーは人類学の変革を求めたが，エヴァンズ＝プリチャードは伝統的かつ古典的な研究テーマへの回帰を要請した。植民地社会は，マリノフスキーにとって，同時代のグローバルな歴史的時空を共有する存在であり，西欧宗主国のパートナーでさえあった。しかしエヴァンズ＝プリチャードにとっては，歴史的時空を超越し，「人間とその諸制度の本質」を例示する「未開社会」だった。マリノフスキーは，「古物趣味」人類学者が植民地社会を「未開」なものとして構成すると非難した。エヴァンズ＝プリチャードの目にはまさにその「未開」の姿でしか写っていなかった。

さらにエヴァンズ＝プリチャードにとって，「未開社会」はそれ自体に価値があるのではなく，人類学が行うべき「貢献」のために参照しうる素材として，価値を帯びるに過ぎない。そして，この資料源として貴重な「未開社会」は急速に「滅びつつある」。エヴァンズ＝プリチャードがこのサルベージ人類学に特有の危機感を，まったく同じ表現で，すでに1940年の論集で表明していたことを想起したい（3.2節参照）。エヴァンズ＝プリチャードが主張したのは，人類学者のための人類学，あるいは「われわれ」西欧社会の知的水準に貢献するための人類学という，自己完結的なアカデミズムの論理である。そこでは，「未開社会」は研究資料を残して「滅びる」だけの存

在としてしか，想定されていない。

エヴァンズ＝プリチャードの提言とそれを支える論理は，あらゆる点でマリノフスキーと対照的であり，それゆえ一層明瞭に，マリノフスキーの試行がはらんでいた同時代との齟齬に気づかせてくれる。彼は植民地の現実およびそこにかかわる人類学について，次のように述べてもいた。

> しかしながら，人類学者はこれまでのところ，みずから高く掲げるフィールドワークの技術，科学的叡智，人道主義的思想にもかかわらず，原住諸人種の将来と福祉をめぐる熾烈な議論の闘いから，高踏的に身を引いてきた。……それは，知識がただ，人間的な関心や生死にかかわる諸課題からわれわれを盲目にすることにしか，役立っていないということを，意味するのであろうか。文化を理解し，人種問題の手がかりを得ていると自認している科学［人類学］は，文化の摩擦，人種の衝突のドラマについて，沈黙のままであってはならない。(Malinowski 1938: x)

さきに，マリノフスキーが植民地統治への貢献を意図し，実用的人類学を提唱した動機について，外的で偶然的な要因によると解釈した。しかし，ここで吐露しているのは，人類学の具体的な形態の選択にかかわる動機ではなく，もう少し深いレベルでの，人類学そのものあるいは学術研究そのものの選択にかかわる動機である。この証言に関する限り，マリノフスキーは植民地に関心を寄せる内面的な必然性を表明している。人類学は，あるいは実用的人類学は，マリノフスキーにとって，みずからが生きている世界の現実に対して，みずからが関係する一つの形態だった。その点で，彼はエヴァンズ＝プリチャードのような知的貴族とはまったく異なる姿を見せている。

9.5　マリノフスキーのその後

さきにも触れたように，マリノフスキーの文化接触研究に対する批判を最初に表明したのは，ラドクリフ＝ブラウンの1940年の論文だった。マリノフスキーが，植民地の変化する状況を，「文化」をキー概念として，文化接触が生みだす三領域を識別して理解しようとしたのに対し，ラドクリフ＝ブラウンは，具体的に観察しうるのは社会関係であるとして，一つの植民地行政府が管轄する範囲の社会を，一つの社会システムとして扱うべきだと主張した（Radcliffe-Brown 1940: 10–11)。すでに38年の論集でフォーティスとシャペラが表明していたのと同じく，自己完結的な植民地システムの想定である。同じ論集でマリノフスキーがフォーティスらを批判したように，この社会システム観では，白人社会と現地人社会との対立をはらんだ植民地の動的な過

程を，捉えることはできなかっただろう。さらに，学説史の流れの中で評価すれば，ラドクリフ＝ブラウンの批判は欺瞞的ですらあった。彼自身の研究は，植民地の現実から現地人社会のみを抜き出して抽象的に考察することに，終始したからである。植民地行政府を含む広い視野も，矛盾をはらんで進行する現実を捉える視点も，彼はまったく持ちあわせていなかった。

1945年にマリノフスキーの名で『文化変化の動態』と題する書物が出版された（Malinowski 1945）。文化接触研究についてマリノフスキーが著した既発表の論文と未公刊の草稿を，ケイバリーが一冊の書物の体裁に再編集したものである。掲載されているものはたしかにマリノフスキーの手になるものであるが，マリノフスキーの生きた思考を表現するものとはいえない[27]。マリノフスキー自身の思考を判定するには不適切な書物であるが，それでもなお人類学の歴史の中で一定の役割を果たした。

この死後刊行の書物について，1947年にグラックマンが書評論文を *Africa* 誌に寄せている（Gluckman 1947）。マリノフスキーの論調を党派的と非難しながらも，それ自体が大変に党派的な言葉で綴られたこの論文は，マリノフスキーの文化接触理論の価値を全面的に否定する。論点は多岐にわたるが，批判はマリノフスキーの反歴史主義と文化変化の三領域説に集中する。それに対置させるのは，上記のラドクリフ＝ブラウンによるマリノフスキー批判と同様に，行政府の管轄下にある植民地全体を一つの統合的社会システムと見る観点である。この観点から，マリノフスキーが批判したフォーティスとシャペラの統合的コミュニティ観――行政官や宣教師など現地人社会に変化をもたらす要因を現地人コミュニティの統合的要素と見る見方――を擁護している。グラックマンの若干の新しさは，矛盾対立もまた社会構造に対して統合的機能を果たすという論点の導入である（Gluckman 1947: 109–111）。グラックマンは，後にこの論点を発展させて，ラドクリフ＝ブラウン流の自己完結的で静的な社会理論とは一線を画すグループ，マンチェスター学派を形成した。

ただし，このグラックマンの構想にもかかわらず，植民地の対立を含んだ過程を社会システムの概念で理解しえないことは，植民地のその後の歴史が示している。決して公平とはいえないこの書評は，次の結論で締めくくられている。

> これは悪書である。……それが，マリノフスキーの名声，彼自身のフィールドワークと社会人類学に対する全般的な貢献のゆえに十分にふさわしい名声を，汚すためだけに出版されたのは，悲劇である。（Gluckman 1947: 121）

グラックマンの批判は，人類学の方向転換を舵取りしたエヴァンズ＝プリチャードを補佐するとともに，マリノフスキーの提唱に沿った実用的人類学の流れに止めを刺す役割を果たした。それと同時に，構造機能主義者たちが受け入れることのできるマリノフスキーの貢献，とりわけ「フィールドワーク」を画定してもいた。

マリノフスキーはすでに亡く，これら一連の批判に応えることはなかった。彼にとってのもう一つの不幸は，45年の書物が，前年に出版された『文化の科学的理論』（Malinowski 1944）と一括して，マリノフスキーの文化理論として扱われたことだろう。後者は，社会，経済，政治，宗教などの事象を，人間の身体生理および心理との「機能的」関連によって説明する理論を提示した。この文化理論は，45年の『文化変化の動態』に収録された未定稿でも，姿を現していたので，この二冊の書物を一括して扱うことに，まったく根拠がないわけではない。しかし，同じように「文化」をテーマにしてはいるが，同時代の現実，同時代の人類学と切り結んだ文化接触研究の諸論文と，この抽象的な文化理論を同列に扱うのは，適切ではない。理論としてまったく魅力に乏しいこの文化の「機能」理論は，結果として，マリノフスキーの文化接触研究の構想をも道連れにした。構造機能主義者は両者を一括して葬り去った。

9.6　歴史の書き換え

グラックマンは，マリノフスキーの「社会変化」研究を退けると同時に，マリノフスキーの貢献を高く評価した。批判と背中合わせの賞揚であるから，それは，マリノフスキーの仕事の中からグラックマンにとって受容しうる要素を，選別する行為でもあった。彼の目に具体的に賞賛に値すると映ったのは，マリノフスキーの「フィールドワーク」への貢献である。この評価はエヴァンズ＝プリチャードも踏襲し（Evans-Pritchard 1962），マリノフスキーの弟子たちも受け入れ（Kaberry 1957），人類学史の著者たちはそれをスタンダードな評価として定着させた（Kuper 1983; Stocking 1984）。

このスタンダードな人類学史は，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンに続く世代の社会人類学者たちが，結果として，二人のそれぞれ最良部分を摂取したという理解である。というよりも，評価者たちは，ラドクリフ＝ブラウンにない要素を，マリノフスキーに見出したのであるから，スタンダードな人類学史は，「ブラウンの補完者としてのマリノフスキー」像を形成したというべきだろう。1930年代から1960年代にかけての時期は，二人の指導者の貢献が時間的に前後しつつ影響を発揮して，イギリスの社会人類学が順調に成熟していった連続的な一時代――機能主義ないし構造機

能主義の時代――だったと描く。しかしながら，それは，マリノフスキーの実用的人類学および文化接触研究の構想を除外した学説史の理解であり，また，彼のこの構想を無視しうる立場の者が描いた学説史である。

事実は，すでに見てきたように，マリノフスキーの学生たちが，二人の指導者の提供するものから，選りどりで摂取したというのではない。二人の間で対照的だったのは，前者の調査法と後者の理論なのではない。二人とも実地調査の必要を強調し，それぞれ独自の社会文化理論を教示した。二人は理論の面でも厳しい緊張関係にあり，たがいに影響力を競い合った[28]。要約すれば，ラドクリフ＝ブラウンは過去に焦点を当てて，「滅びつつある未開」社会の純粋科学的な研究を志向するサルベージ人類学を提唱し，他方，マリノフスキーは現在に焦点を当てて，植民地社会の現実と対峙しようとする実用的人類学および文化接触研究を提唱した。人類学史が次世代に対するラドクリフ＝ブラウンの理論的影響を強調するのは，二人の間の理論をめぐる競争でラドクリフ＝ブラウンが勝利したという歴史を反影している。歴史の進行に即していえば，サルベージ人類学を受け継ぐラドクリフ＝ブラウンが，辺境ともいうべきオーストラリアとアメリカで科学的理論を唱えている間に，マリノフスキーはイギリス本国にあって，サルベージ人類学を打破しようとした。しかし，遅れて本国に帰還したラドクリフ＝ブラウンが，マリノフスキーの影響力を排除して，勝利した。マリノフスキーは敗北したのであり，彼の理論は後世に受け入れられず，忘れ去られた。理論で勝利したとはいえ，ラドクリフ＝ブラウンは実地調査において明らかにマリノフスキーに劣っていた。それゆえ，次世代の人類学者はマリノフスキーから「参与観察」の調査法のみを受け継いだ。これが，二人の影響を描くスタンダードな人類学史の，歴史的な背景である。次世代の人類学者たちがこの二人からそれぞれ理論と調査法を習得したという認識は，マリノフスキーをラドクリフ＝ブラウンの補完者と見なす，ラドクリフ＝ブラウンの影響に染まった者の見方であり，後世の視点で過去を遡って特徴づけた解釈，その意味で多分に一面的な歴史解釈である。

クーパーの二冊目の人類学史は，人類学史とマリノフスキーとの関係について考えるのに，示唆に富んでいる。クーパーによれば，「原始＝未開」社会は現実の存在ではなく，人類学者による発明＝創造（invention）の所産である。人類学者はこの架空の「原始＝未開」社会をめぐって，初期の進化主義からレヴィ＝ストロースの構造主義まで，さまざまの「未開」社会理論を構想した。マリノフスキーは，この「未開」社会理論の系譜に接続しない外部から，経験主義人類学の形成に参与したが，人類学的な「未開」理論の自己展開には参与しなかった。クーパーはこのような観点から，

マリノフスキーを取りあげることなく，人類学における「未開」社会理論の歴史を跡づけた（Kuper 1988）。たしかに，「未開」社会に関する人類学理論の歴史は，マリノフスキーに言及せずに描くことが可能であろう。「未開」社会の理論的考察は，ヨーロッパの影響を被っていない「純粋な未開」を，サルベージ人類学のスタイルで追求することによってのみ可能である。マリノフスキーの用語でいえば，それは「古物趣味」人類学にほかならならず，それこそが，晩年の彼が最大の精力を払って排除しようとした研究スタイルだった。いいかえれば，マリノフスキーは，進化主義からレヴィ＝ストロースの構造主義にいたるまでの人類学理論の大半と，対峙する地点に位置していた。クーパーの描く人類学史は，人類学が「古物趣味」のサルベージ人類学に留まっている限り，マリノフスキーが再評価される余地のなかったことを示している[29]。

10　結　　語

10.1　ポストモダン人類学批判の共犯関係

戦間期とそれを挟んだ時期のイギリス人類学の歴史を追跡し，その見直しが必要であることを指摘してきた。関連するいくつかの論点に言及して，本稿の締め括りとしたい。

9.4節ではエヴァンズ＝プリチャードの方向転換を取りあげて，彼の論点の一つ一つをマリノフスキーの主張と対置して提示した。この仮想的な対話でのマリノフスキーは，その後の人類学の歴史を目撃してきた者には，1980年代に盛んに行われた人類学批判を，連想させたに違いない。マリノフスキーは，人類学者の認識が対象を構成するという，ポストモダン的な観点を示していた。さきに引用したように，彼は，人類学者によって「[原住民] は『未開人』あるいは『野蛮人』に，『前論理的な』存在に，『先史時代を代表するもの』に，作り上げられていた」と批判していた（6.7節）。しかし，このような人類学批判の類似を論拠に，マリノフスキーをポストモダン人類学批判の先駆者と見なすのは，適切ではないだろう。彼にとってもエヴァンズ＝プリチャードにとっても，自己とは異質な「他者」を定立することによるオリエンタリズム的なアイデンティティの政治といったテーマ，あるいは他者支配の一様式としての人類学的認識といったテーマは，未知のものだった。マリノフスキーの論理を貫いているのは，適切な科学的方法と，それによる客観的な正しい認識との追求である。マ

リノフスキーが80年代の人類学批判と批判の論理を共有していたわけではない。

しかしそれにしても，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンが切り拓いた人類学史上の一時代は，後世の人類学批判が描くようにサルベージ人類学一色ではなかった。ここでの「サルベージ人類学」という表現で私は，具体的にはラドクリフ＝ブラウンの構造機能主義に代表される研究スタイルを念頭に置いている。対象社会が現実に置かれている植民地的状況を無視し，対象を歴史的時間から抽象して，「民族誌的現在」という架空の時空――それはメアたちが提言したヨーロッパの影響以前の「ゼロ・ポイント」に相当する――に移し替え，内部的に整合した静的なシステムとして描き出す，あの研究スタイルである。ポストモダン批評家の一人フェビアンはサルベージ人類学批判の要点を，「時の共有」（coevalness）の欠落に求めている（Fabian 1983）。マリノフスキーが彼の人類学に対する計画を実用的人類学から文化接触研究へと展開させる過程で，もっとも重視したのは，まさに考察対象の社会との「時の共有」だった。彼が植民地社会を，同時代のグローバルな歴史的時空を共有する存在であり，西欧宗主国のパートナーでさえある存在として描いていたことを，想起したい。しかし，フェビアンの歴史的回顧は，マリノフスキーを典型的なサルベージ人類学者として批判するばかりで，マリノフスキーの文化接触研究の試みを顧慮しない。マリノフスキーの試行を消去することによって成立したのが，構造機能主義の描く人類学史であり，それはフェビアンが狙い定めた批判対象の中心に位置していた。つまりフェビアンは，構造機能主義を非難すると同時に，構造機能主義と立場を共有してマリノフスキーの企図を消去した。「未開な他者」を定立したとしてサルベージ人類学を批判するフェビアンは，批判対象を批判にふさわしい「他者」へと一元的に定立してもいた。批判はいかに厳しい批判であっても，当の批判対象と共犯関係にあったわけである。

10.2　歴史研究への転進

批判対象との共犯関係はフェビアンに限らない。サルベージ人類学の要ともいうべき「民族誌的現在」概念について，バートンがルーツを探索している。バートンは当初この概念の提案者をマリノフスキーと見ていたが，その予見は外れたとしながらも，この考え方を確立したのはマリノフスキーであり，彼は「接触後」の変化を考察する基礎として，「接触前」の状態を再構成する必要を強調したと述べる。さらに，マリノフスキー以来の人類学が思考の基礎に据えた「接触前」の「純粋な未開社会」は，西欧による植民地支配の歴史を無視して構成した「神話」であるが，人類学はこの神話的な「未開社会」を扱う専門分野として，学術の中に地位を確保したと述べる。ポ

ストモダンの人類学批判にふさわしい論説である。

しかし，そこからさらに前進して到達する結論は，独特でかつ示唆的である。「未開社会」の虚構性をはぎ取って，改めて人類学を振り返れば，それは「無文字の」人々（諸民族）の歴史学だった。「接触前」を起点として「接触後」の変化を追うという時間設定は誤りではない。誤りは，「接触以前の純粋な未開社会」を推論によって再構成したことであり，この再構成像を実体化して人類学的考察の主題としたことである。この誤りを正すならば，人類学が研究してきたものは，「接触後」に「未開社会」が経験してきた歴史にほかならない。それはそれにもっとも適切な方法，つまり歴史学の方法で研究すればよい（Burton 1988）。

バートンのマリノフスキー認識が誤りであることは，もはや多言を要しまい。「ゼロ・ポイント」の仮設もその後の変化の歴史的追跡も，現実にはマリノフスキーが強硬に批判したものである。ただし，バートンのこの誤認は偶然の誤認ではない。バートンが描くマリノフスキー像は，その後歴史研究へと関心を移し変えていった構造機能主義者による類型的なマリノフスキー像と同一であり，その意味で，バートンは批判対象である構造主義者と見事な共犯関係に陥っている。共犯関係と認識するのは，直接にはマリノフスキーの文化接触研究を無視するという「罪」を，構造機能主義者とともに犯しているからであるが，それと同時に，この無視によって成立した構造機能主義の，その後の発展に，バートンの議論が見事に寄与しているからでもある。

バートンは，「接触以前の純粋な未開社会」を求めたサルベージ人類学を，方法の上で批判しながらも，サルベージ人類学が視野にいれたのと同じ期間の過去の歴史に，関心を集中させることにおいて，サルベージ人類学の問題関心を受け継いでいる。この意味でバートンの思考は，人類学的な歴史研究がサルベージ人類学の正統に属すことを，的確に指摘している。5.6節で簡略に述べたように，イギリス人類学は実際，構造機能主義的な社会理論を純化させた後，さらに歴史研究へと舵とりしていった[30]。

歴史研究への方向転換は，バートンがいうように，民族誌的現在時制で行う「純粋な未開社会」研究に，単純に歴史的視野を加えれば，達成しうるようなものではない。民族誌的現在の「未開社会」研究は，歴史の中に再コンテクスト化することによって，パラダイムの革命的な転換を求められる。歴史へのコンテクスト化は，個別社会の理解を変えさせるばかりではない。民族誌的現在という抽象的な時空に実体化された「永遠の未開文化」を素材として，人類文化について思弁する人類学的思考――レヴィ＝ストロースに代表されるような――を，困難にするからである。ブッシュマンをめぐ

って闘わされた「カラハリ論争」は，この転換の激しさを例示している[31]。このような学説の展開を経た現在では，仮に実地調査によって調査時現在の現象を扱うにしても，歴史的視野が不可欠であることは，人類学者に共通の認識として定着している。

しかし，歴史的視野の必要がただちに歴史研究を意味するのであろうか。バートンの考察は人類学的な歴史学を指示していた。仮にマリノフスキーにいわしめれば，バートンもラドクリフ＝ブラウンあるいはメアと同じ誤りを犯していると，批判したのではなかろうか。架空の「神話」的な過去の「誤った」研究であるか，現実の過去の「正しい」研究であるかは，問題ではない。いずれも「過去」の研究であることにおいて，誤っている。過去の歴史の「正しい」研究であろうとも，「いま現在」の，実地調査の現場で進行中の事象から，逃避していることに変わりはない。眼前の現実から逃げてはならない。「いま現在」の事象の研究が歴史的視野の欠如を意味しないこと，「いま現在」を理解するには，逆に「現代」という時代の歴史的コンテクストの理解を世界大の視野で求められることは，マリノフスキーの歴史観を追いながら，確認したことである（5.6節）。

人類学の歴史研究への傾斜は，構造機能的な社会観がその内的な論理の必然として展開した，その意味できわめて自然な推移だった。歴史研究は構造機能主義の嫡子であり，それゆえ構造機能主義の限界を同時に受け継いでいる。バートンは批判した構造機能主義との共犯関係をとおして，後者の論理的な展開を跡づけ，それに理論的根拠を与えた。

10.3　イデオロギーと経験主義

「共犯関係」という言葉は，マリノフスキーにも該当する。マリノフスキーの実用的人類学を取りあげた数少ない論考は，いずれも植民地主義との共犯関係という観点から人類学に接近し，その典型例としてマリノフスキーのアフリカ研究プロジェクトを見出している（James 1973; ルクレール 1976）。ただし，すでに見たように，この関係は緊張に満ちた両義的な関係だった。マリノフスキーは植民地統治に貢献しうる実用的人類学を目指すと同時に，植民地統治あるいは植民地の当時の現状を痛烈に批判した。その批判の深化は，やがて彼に植民地支配そのものを否定させたのではないかと，思わせるほどものだった。

社会的な実践としての人類学が，おおくの外的な制約に取り囲まれていることは，7.6節で見たところである。とりわけ，実地調査は調査地をおおっている権力関係に制約される。もうひとつ，西欧による非西欧の植民地支配を正当化するイデオロギー

もまた，この外的制約の中に数えてよいだろう。マリノフスキーは植民地行政府が受け入れる範囲内の思想の持ち主であり，植民地主義イデオロギーの戦間期ヴァージョンである間接統治理念を，自己のイデオロギーとして内面化していた。植民地統治への貢献という，彼の植民地主義との共犯関係は，このようにして，彼を囲い込む外的条件に順当に対応した結果でもある。

それでもなおかつ，マリノフスキーは時とともに植民地の現実に対する批判を強めていった。調査地の権力関係と衝突することはなかったが，少なくとも植民地の現状認識では植民地主義のイデオロギー的な制約を突破していたと，認めてよいだろう。それを可能にした要因を，私は彼の「徹底した経験主義」に求めた（7.7節）。

社会の権力関係を補完する支配的イデオロギーは，内的な論理構成がいかに整合的であれ，また制度的なイデオロギー装置による人々の取り込みがいかに完璧であれ，所詮は現実の矛盾した権力関係と対をなしている[32]。マリノフスキーの植民地批判は，良質の「徹底した経験主義」というものが，この現実の矛盾を認識し，その補完イデオロギーの矛盾を暴く能力を持っていることの，よき例証となっているだろう。

人類学が実地調査を行う地域の権力関係は，20世紀も終わりに近づいた現在でもなお，人類学者にとって制約条件であり続けている。旧植民地が独立した後の独立政権が，国内での自由な調査活動を許すとは限らない。また，調査地の権力関係は国家的な支配権力ばかりではない。人類学者の調査は，相手の人々の社会生活に長期間「参与」しようとする。調査者は相手の人々にとって，自己の生活に介入する外来者であり，当然のことながら，調査対象に選んだ当の人々が，調査に対してさまざまの制約を加える。近年では，支配的な勢力（植民地を支配する権力，あるいは支配的な外来入植者，支配的な多数派集団など）との共犯関係の歴史が長い人類学は，それだけ一層，調査地の社会から拒絶される事例が増えている[33]。いずれにしても，調査地の権力関係との間に形成される緊張関係は，調査のみならず，人類学者の思想的資質をも選別するだろう。結果として，人類学者は調査地の状況に順応的に関係しうる人物に限定されていくはずである。現地の状況との関係を「順応的」と記したが，現地の状況が否定的に評価されるようなものであれば，それは「共犯関係」である。現地の状況が肯定的に評価されるならば，この関係は「協力関係」と表現されるだろう。両者の間には紙一重の差しかない。

人類学者が実地調査を行うとき，現地社会と密接な関係に入っていくことは不可避である。仮にそれが「共犯関係」と評価されるような質のものだとしても，人類学はこの共犯関係を受け入れざるをえない。というよりも，そのような関係を受け入れる

ことによって，人類学者になることを許される。しかし，このような制約が作用しているからといって，人類学者の思考や研究成果を決定論的に解釈するのは，速断というべきである。また，人類学者がこのような制約を忌避して，みずから人類学的な調査研究を回避する必要もない。むしろ，現実を知るためには，現実に触れることの方が重要だろう。徹底した経験主義のもたらす認識は，外的条件に制約し尽くされるものではないからだ。戦間期の人類学が切り拓き，その後の人類学の基本的方法となった実地調査は，この経験主義の能力が発揮される現場である。マリノフスキーの例証した，外的制約をのり超える経験主義の認識能力は，現代でも人類学者への励ましであるに違いない。

10.4　マリノフスキーと日本の人類学

前節では，またさきに7.7節では，マリノフスキーの「徹底した経験主義」を高く評価した。しかし，植民地を広く見わたす視点から見れば，彼の植民地批判はむしろ穏健なものだった。植民地に関する思想史あるいは研究史のコンテクストでは，何ら特筆すべき批判とは見なされないものだったろう。それでもなお，彼の植民地批判を私は貴重なものと評価したい。ひるがえって日本における人類学の歴史と比べてみれば，マリノフスキーの穏当な植民地批判でさえ，日本では望むべくもなく，イギリス人類学の際だった特徴をなしている。

戦間期から戦後期にかけて，日本の人類学はイギリス人類学とよく一致する軌跡を描いて進展した。その日本では，イギリス以上に人類学者は「時局」に動員され，戦後はその反省から，脱政治的な純粋科学としての人類学研究に戻っていった。この過程を二人の人物，岡正雄と石田英一郎がよく代表している。

日本の人類学は明治（あるいはさらに近世）に遡る歴史があるが，「民族学」の名で学会組織を形成し，一研究分野として自立を確保したのは，日本が中国への軍事介入を強めていった1930年代の半ばである。国家政策が帝国主義的拡張に傾斜するのに対応して，東アジア，東南アジア，太平洋地域を対象とする研究所が，数おおく設立された。その中でも人類学にとって重要だったのは，国立民族研究所である。岡は1930年代のほとんどをウィーンで過ごした。その間，ナチス統治を体験し，国家主義的なドイツ民俗学の興隆と，ナチスに席巻される中欧バルカンの民族状況を目撃した。ヨーロッパで第二次大戦が始まるとともに帰国した岡は，日本が連合国と開戦した後，みずから中心となって，政府に国立民族研究所の設立を働きかけた。その設立にあわせて，民族学の学会は自発的に解散し，代わりに財団法人が設立された。国立研究所

は国家の「大東亜」民族政策に協力することを目的に掲げ，財団はこの研究所の外郭団体として，民間の民族学者を組織し，研究所の活動に協力することを目的としていた。国立研究所の設立とともに，それを核として，人類学者を国家政策に動員する態勢ができあがったわけである。実際，戦時中を人類学者として過ごした人のほとんどが，これら研究所あるいは財団法人を介して戦地に赴き，人類学的な活動に従事した。そして，彼らが戦後に人類学を復興し，発展に導いた。

この一連の動きの中で，人類学的な思考にとって非常に重要なことに，岡は民族学の変革を主張した。彼は「従前の民族学」が「未開民族，エキゾチックな異民族」を対象とし，「歴史的過去」に重点を置いていたと特徴づけ，その上で，戦時下の現在，民族学は「現実の諸問題」に関する「政治」からの「期待」に応え，「民族政策を基礎」づけるような，「現実の民族の研究を特に強調する民族学，一つの現在学的民族学」でなければならないと呼びかけた（岡 1943）。

戦後，人類学の再出発に当たって，日本の戦争政策との共犯関係を浄化する役を，石田が果たした。戦後は1950年代に入るまで，人類学にとって学会誌『民族学研究』が唯一の研究の場だった。再刊後間もなく同誌の編集長をつとめた石田は，編集方針の表明の中で，実地調査の成果の学術的価値と，調査を可能にした軍事的，政治的状況とを区別し，戦時中の人類学研究の学術的価値を救済しようとした。同時に，民族政策などの現実的＝実用的な問題を人類学の課題から排除した（石田 1948）。

岡と石田の主張は，本稿で見てきたマリノフスキーとエヴァンズ＝プリチャードの主張に，それぞれ驚くほど似ている。彼ら相互の関係（マリノフスキーとエヴァンズ＝プリチャード，岡と石田）も相似である。彼らのおかれた状況も，一方は比較的安定した植民地統治であり，他方は流動的な戦時下であるという差異はあるものの，おおむね並行関係にある。岡がマリノフスキーを参照し，石田がエヴァンズ＝プリチャードと連絡をとりあったというのではない。それぞれの類似は，状況の類似がしからしめたものと，解釈するのが妥当だろう[34]。

イギリスと日本の人類学は，戦間期から戦時期，戦後期にかけて，よく一致する軌跡を描いて変身を遂げた。しかしながら，この並行関係にもかかわらず，際だった差異にも気づかないわけにはいかない。日本の人類学には，マリノフスキーの激しい植民地批判に対応するものが，まったく欠けていた。むしろ逆の印象を禁じがたい。

もう一つだけ……あげれば，43〜44才の参謀本部嘱託時代をめぐる一連の問題である。その頃の［岡］先生は，民族研究所の創設をめぐる多忙の中に，中野学校で講義をしたり，

少佐参謀を帯同して南方を視察するというふうに，民族政策について積極的な姿勢をとっておられた。(鈴木 1965: 262)

ここで比較しているのは，個々の人類学者の単独行動ではない。イギリスおよび日本の人類学でそれぞれ指導的な位置にあった人物の比較である。マリノフスキーのイギリスの1930年代と，岡の日本の40年代前半とでは，状況の苛烈さに懸差がある。調査地は人類学の用語では「フィールド」であるが，ここで取りあげている時期の日本人人類学者にとっては，それは同時に戦場（バトルフィールド）でもあった。そのようなフィールドでの調査経験が，フィールドを包み込む政治的状況に対する批判的認識を形成させるには，日本人人類学者に与えられた時間は，あまりに短すぎたのかもしれない。繰り返しになるが，当時の日本の権力に，イギリスでマリノフスキーを受け容れたようなリベラルな政策は，望むべくもなかった。さらに公平を期すならば，戦時下のイギリスでの指導的人類学者の行動を追うべきかもしれない。しかしその反面で，1930年代に日本の植民地統治を批判した日本人人類学者を，私は寡聞にして知らない。私はこの論考で同時代の視点からマリノフスキーのプロジェクトを追跡してきた。同じように，日本の人類学者についても，批判は，同時代の視点から追跡した後にすべきであるのかもしれない。たしかにいえることは，マリノフスキーの人類学と植民地批判とが，岡を介して，日本の人類学史を照らし出してもいるということである。

注

1) 学科長クラスの教授である professor に次ぐ地位であり，日本でいえば学科長クラス以外の教授に相当する。
2) M. フォーティスによれば，セミナーでマリノフスキーは『珊瑚礁の菜園と呪術』の草稿も素材に提供し，学生たちに詳細に検討させたという（Fortes 1978: 5)。4.1節で見るように，マリノフスキーはこのトロブリアンド民族誌の総集編ともいうべき書物を，実用的人類学のプロジェクトと並行して書き進めていた。実用的人類学では学生に，変化する現実を調査するよう指示し，同時にセミナーに，変化を捨象したスタイルの民族誌を出して，検討させてもいたわけである（4.6節参照)。L. メアによれば，後述するアフリカプロジェクトに参加した人類学者は，最初の一年間，マリノフスキーのセミナーで人類学の基本を習得し，アフリカの現地に向かう。実地調査の中間に一度帰国して，マリノフスキーのセミナーで調査報告をし，マリノフスキーの指導を受け，再び後半の調査のために現地に向かったという（Mair 1957: 231)。調査期間を二分し，中間で一度，調査地を離れて，調査の成果を整理し，後半の調査計画を検討するという方法は，マリノフスキーみずからがトロブリアンドで実践したことであり，後には，人類学的な実地調査の方法として定式化した（Malinowski 1935a)。マリノフスキーのセミナーは単に人類学や調査法を教える場ではなく，学生の調査活動の一環として，また学生に対する教師の指導の一環として組まれてもいたわけである。
3) 注25参照。

4) ストッキングは両者が理論的に対決して，ラドクリフ＝ブラウンがマリノフスキーに勝利していった過程を後づけている（Stocking 1984）。
5) マリノフスキーの死後に『文化の科学的理論』（Malinowski 1944）が出版されたが，この書物は人類学者の間でほとんど影響力をもたなかった。
6) 戦間期のマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの理論的な確執を追跡したストッキングも，この二冊の論集に対しては，ここで述べたのと同じ評価を下している（Stocking 1984）。
7) 当時の人類学者が用いた「社会学」という言葉を理解するには，社会学が当時のイギリスの大学にまだ専門分野として採りいれられていなかったという事情を，念頭に置く必要がある。彼らが「社会学」といえば，具体的にはデュルケームらのフランス社会学を指している。イギリスでそれに習って社会学的研究を行いうる位置にあるのは，リヴァーズやマリノフスキー，ラドクリフ＝ブラウンに学んだ人類学者だった。それゆえ，イギリス人類学者が用いた「社会学」の語は，広い意味で，人類学者が行うべき科学的な社会研究を含意していた。
8) ここで「サルベージ人類学」と呼ぶのは，真正の「未開」文化を研究対象とし，それが西欧近代の影響によって変化する（真正の未開文化でなくなる）前に，調査し記録にとどめようとする研究スタイルを指す。キリスト教の布教や植民地支配など，西欧近代の影響で「未開文化」が変化することは，サルベージ人類学者にとっては「未開文化が滅びる」ことを意味した。現実には，西欧近代の影響の方がはるかに先行し，人類学者による調査はつねに後れをとっていたので，人類学者は変化との競争で，わずかに残存している「未開」の断片を採集することを強いられた。この調査手法から，「サルベージ（救いあげ＝掬いあげ）人類学」と呼ばれる。この研究スタイルは，考察対象を「未開文化」の体現者として本性化（本質化）すると同時に，彼らの現状には価値がないと前提する。「未開文化」が「滅びる」過程では，その担い手である「未開人」もしばしば死に絶えた。サルベージ人類学は西欧近代による知的な植民地収奪の典型でもあった。本稿が対象とする時期の代表的なサルベージ人類学は構造機能主義であるが，人類学の歴史は，1970年代の構造主義ないし象徴人類学にいたるまで，基調としてサルベージ人類学だった。この観点から人類学史を描いた別稿（清水 1996）を参照されたい。
9) 文化接触に関するマリノフスキーの論文と草稿は，彼の死後，ケイバリーの編集でまとめられ，『文化変化の動態』（Malinowski 1945）として出版された。注18参照。
10) この点は，人類学と植民地主義との関連を否定する論者が必ず指摘することである（Kuper 1983: ch. 4; Goody 1995: 16）。
11) ロックフェラー関係の財団は，1928年に統合されるまでは，4つの組織に分かれ，それぞれが個別の活動をしており，マリノフスキーに研究助成を与えたのはローラ・S・ロックフェラー記念財団であるが，叙述の便宜上，いずれも「ロックフェラー財団」と記すことにする。ちなみに，ロックフェラー財団が戦間期に人文社会科学の振興に果たした貢献は巨大であり，イギリス，アメリカにおける経験主義的な人類学，社会学は，事実上，同財団の助成によって育成されたといっても過言ではない（Stocking 1985; Goody 1995: ch. 1）。オーストラリア最初の人類学科であるシドニー大学の人類学科は，事実上ロックフェラー財団の援助で設立された。その初代の教授兼学科長として招聘されたのが，ラドクリフ＝ブラウンである（Peterson 1990）。マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンという，イギリス社会人類学の二人の創立者はいずれも，同財団から資金援助を得て学生を養成し，その学生たちが第二次世界大戦後にイギリス人類学の興隆をもたらした。
12) ストッキングによれば，ロックフェラー財団の助成をめぐっても，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンはライバル関係にあったが，後者がシカゴに赴任して間もなく，アメリカ人類学協会はブラウンの構想を拡大して，「滅びつつある未開社会」を地球大の規模で網羅する研究プロジェクトを，同財団に提案した。財団は，すでに分散傾向のあった人類学関係の助成を，再検討することにして，アメリカとヨーロッパの人類学の研究状況を考査した。財団の考査は最終的に，人類学者による「科学的」研究には実用的に無価値なものが少なくないことを見出す。その間，財団は，科学的知識一般の振興から，同時代の社会文化現象と実践的な課題の研究へと，助成政策を転換した。この新しい方針の下では，それまでの高い評価とはうって変わって，人類学は「あまりにアカデミックで，現実的＝実践的必要にあまりにも無関係すぎる」ように映った。ちなみに，人類学の「植民地［主義］的形成」説に関連して，ストッキングは，この政策転換によって人類学がロックフェラー財団から見限られたという事実を，一つの反証と見なしている（Stocking 1985: 128–138）。参照するのは，

ロックフェラー財団という資本主義の申し子から，人類学が助成を受け，育成されたという同じ事実であるが，人類学の「植民地的形成」説とストッキングとでは，まったく逆の結論を導き出しているわけである。

13）近代の国民形成にとって国民史による「記憶と忘却」が果たした役割を，B. アンダーソンは「国民の自叙伝」という概念のもとに考察している（Anderson 1991）。

14）マリノフスキーの「死産」の比喩は，比喩として実に適切であるが，誤解を避けるために付言すれば，同じ「死産」の比喩でも，酒井直樹（1996）のそれは，イメージの喚起力を巧みに利用することで，対象に批判を向けることには成功しているものの，比喩自体は適切な比喩ではない。「死産」で生まれたものは，定義によって，すでに死んでいるのであって，強力な近代の制度（具体的には国語としての日本語）に成長するはずがないからだ。

15）キージングの言説（Keesing 1989）は，先住民運動の主張を，西欧的論理を借用していると批評したものとして，よく知られている。このキージングの発言に対し，先住ハワイ人の立場からトラスクが強硬に反論し（Trask 1991），いまでは，少なくとも先住民研究の人類学者の間では，トラスクの反論が受け入れられているようである。しかし，それでもなお，先住民が西欧的論理によって権利主張を行っているという評言は，人類学者の口からしばしば聞かれる。集団間の文化的影響の認識に関連して，「親文化」に文化的所有権を構成する言説については，別項（清水 1998）で論じた。

16）この論集の24年後であるが，社会人類学と歴史について述べた論文でシャペラは，マリノフスキーが「歴史に対して極度に敵対的だった」というエヴァンズ＝プリチャードの論難は，部分的に正しいとして，マリノフスキーの38年の論文に言及しつつ，「私が誤解していなければ，［マリノフスキーは］当の人々に対するヨーロッパ人の影響の歴史を体系的に追求することが必要だとは考えさえもしなかった」と述べている（Schapera 1962: 144）。

17）固有名によるアイデンティティの認識で，差異と命名とのずれをもっとも際だたせるのは，民族である。民族アイデンティティの複雑さについては，別稿（清水 1998）で論及した。

18）文化接触をテーマとしたマリノフスキーの既発表の論文と未定稿とを，彼の死後にケイバリーが編集して，『文化変化の動態』（Malinowski 1945）の標題で出版している。しかしこの書物は，論文と草稿を，執筆の時間順を無視し，論文によってはいくつかの部分に裁断して，テーマ別に再配列しており，ここで述べているような意味での，マリノフスキーの生きた思考の所産とはいえない。とりわけ，論文の時間的な執筆順を無視したケイバリーの編集は問題である。本文ですでに指摘したように，文化接触に関するマリノフスキーの思考は，時を追って深化し，新たな展開を見せていた。ケイバリーの編集は，この時間を追った思考の展開を消去してしまう。未発表の草稿にいたっては，他の公刊された論文と同じ程度に完成された思考の成果とはいえない。本書で，文化接触に関するマリノフスキーのテクストとして，既発表の論文を採用し，『文化変化の動態』を採用しないのは，彼の思考の生きた展開を重視するからである。

19）コンラッド（1958）は，「闇の奥」（heart of Darkness，野蛮の最奥地）の「文明化」をみずからの使命としてアフリカの奥地に赴いた登場人物が，自己自身の「闇の心」（heart of darkness）に淫して「野蛮」のきわみにに陥るさまを描き，ついには彼に「野獣どもを撲滅せよ」という本音を吐かせている。なお，マリノフスキーは『日記』でこの言葉を，調査地のニューギニア人に対する自身の声として引用しており，それが，『日記』がスキャンダルを巻きおこす一つの種となった（関口 1986）。

20）リチャーズは，植民地行政府が概して人類学者の調査に警戒的だったこと述べ，さらに第二次大戦の戦時下の措置として，イギリスのアフリカ植民地は，人類学者による原住民保留地の調査を拒否していると注記している（Richards 1944: 293）。

21）宗主国による植民地支配は，たとえそれが植民地の搾取という現実を覆い隠す欺瞞的なイデオロギーだったとしても，植民地住民を無知蒙昧な野蛮状態から救い出して文明化するという，人道的なイデオロギーを伴っていた。「間接統治」の理念はそのような文明化のイデオロギーの最終局面における形態だろう。

22）ここで私は，未完に終わったマリノフスキーの「その後」を，理想化しすぎていると，非難されるかもしれない。これまで私は，実用的人類学に関連して彼が書いた5編の論文の内の，最後に書いた1940年の論文に，ほとんど触れずにきた。この論文がマリノフスキーの「その後」を示していると，考えることも可能である。しかし，以下の理由で，私はこの論文をマリノフスキーの「徹底した経験主義」からはずして考えたい。

この論文では，アフリカの認識も文化接触に関する理論も鋭さがなく，議論は抽象的で，それ以前の4編の論文より後退している印象が強い。アメリカ人類学に対して距離を置いて批判した39年の論文とは対照的に，アメリカ滞在中に書いたこの40年の論文では，むしろアメリカ人類学の影響下に入りつつあったと考えられる。たとえば，彼が提示した「文化接触」概念は，二つの文化の緊張をはらんだ相互作用の過程を表現する。これに対し，ハースコヴィッツの「文化変容」(acculturation) 概念は，一つの文化に視点を置いて，外来の影響による変化を述べる。この概念では，マリノフスキーが力説した「新しい合成文化」を，捉えることができない。マリノフスキーがハースコヴィッツを批判したゆえんである (Malinowski 1939)。しかし，40年の論文では，マリノフスキーは「文化接触」概念に替えて，transculturation なる概念を提示する。「文化変容」に類似の発想であり，明らかに「文化接触」概念からの後退である。総じて，アメリカでのマリノフスキーは，アフリカからはもとより，思考を交換しあってきたアフリカ研究の弟子たちからも遠く，「徹底した経験主義」によってアフリカの現実認識を深めることは，望むべくもなかった。

23) 具体的には，ファース，ホグビン (H. Ian Hogbin)，ホカート (A. M. Hocart)，フォード (C. Daryll Forde)，エルキン，エヴァンズ＝プリチャード，ナデル (S. F. Nadel)，フォーティスなど。

24) ただし，メアによれば，イギリス系の人類学者で「小規模な」社会の変化という同時代の現象について最初に講義したのは，1924年，ケープ・タウン時代のラドクリフ＝ブラウンだったという (Mair 1957: 230)。

25) Radcliffe-Brown 1957。1937年にシカゴ大学で行った講義の筆記録であり，タイプ打ちの私綴じ本が限られた範囲で回覧されていたが，ラドクリフ＝ブラウン死後の1957年に出版された (Eggan 1957)。

26) この研究上の過去志向は，エヴァンズ＝プリチャードが「いま現在」の現実に無関心だったということを意味するのではない。スーダンに侵攻したイタリア軍に対抗して，彼は志願して軍役につき，現地人部隊を指揮してイタリア軍と戦った (ギアーツ 1988: ch. 3)。

27) 注18参照。

28) ストッキングによれば，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンは「機能」概念をテーマに公開討論会まで開いて対決した (Stocking 1984)。ただし，ここで私が強調したいのは，スタンダードな人類学史が着目する「機能」概念を軸とした彼らの理論的対立ではない。ラドクリフ＝ブラウンの「社会の自然科学」(あるいはマリノフスキーの用語でいえば「古物趣味人類学」) とマリノフスキーの実用的人類学との対立である。

29) 1990年代の半ばにいたっても，グディはスタンダードな人類学史の観点から，1930年代以降のイギリス社会人類学によるアフリカ研究を振り返っている (Goody 1995)。当然のことながら，この観点から見るマリノフスキーは過小に評価されている。

30) この過程で重要な役割を果たしたのは，エヴァンズ＝プリチャードとともに，シャペラである (Schapera 1962)。彼はマリノフスキーの文化接触研究のプロジクトに参加していた時期から一貫して，社会史を追求していた (5.9節参照)。彼が視野に入れていたのは，「接触前」を起点とした「接触後」の変化の歴史である。バートンはポストモダン人類学批判の語法でマリノフスキー批判を試みているが，実質はシャペラ説を追認したのにすぎない。

31) カラハリ論争については，その理論的意味を簡単に考察したことがある (清水 1993: 466–468)。

32) イデオロギーの性格については，近代国家のイデオロギーに関するアルチュセール (1993) の議論を念頭においている。

33) 調査地の権力関係は，一定の制約を一定の条件によって機械的に発動するのではない。人類学に対する外的な制約は，人類学者にとって交渉と操作の対象でもありうる。それは実地調査に限らない。課題の選択から調査を経て成果を公表するまで，人類学研究の過程にかかわる権力関係——その中には人類学自体の制度的構造 (discipline) も含まれる——に，どのように対処するか。ここに人類学者 (あるいは人類学者になろうとするもの) にとってもっとも身近な実践的＝現実的課題があろう。

34) 岡は「現在学的民族学」の構想をマリノフスキーらの経験主義人類学からではなく，ドイツ民俗学の展開から学んだと考えられる (岡 1935)。彼は戦後しばらく故郷に蟄居した後，歴史民族学の復権を主張しつつ (岡 1948)，人類学に復帰した。ここに彼の二度目の転向を見てよいだろう。岡と石田の軌跡については別のところで述べた (清水 1995; n.d.)。

文　　献

Anderson, B.

1991 *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism* (revised edition). London, New York: Verso.

アルチュセール, L.

1993 「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」柳内隆訳, L. アルチュセールほか『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』pp. 7–111, 東京：三交社。(Idéologie et appareils idéologiques d'Etat. *La pensée* 151, 1970.)

Brunton, Ron

1975 Why do the Trobriands have chiefs? *Man* (N.S.) 10, 544–558.

Burton, John W.

1988 Shadows at twilight: a note on history and the ethnographic present. *Proceedings of the American Philosophical Society* 132(4), 420–433.

CAA (Committee on Applied Anthropology)

1937 Applied Anthropology Committee. *Man* 37, 115.

1938a Discussion on higher education in East Africa, 26 November, 1937. *Man* 38, 25–26.

1938b Report of a discussion meeting, 28 January, 1938. *Man* 38, 41–42.

1938c Report of a discussion on Indirect Rule in Northern Rhodesia, 29 April, 1938. *Man* 38, 92.

1938d Discussion on the Australian Aborigines, 27 May, 1938. *Man* 38, 106.

1938e Deputation to the secretary of state for the dominions. *Man* 38, 106–107.

1938f Soil erosion in East Africa: report of a discussion meeting, June 24, 1938. *Man* 38, 129.

1939a Report of a discussion on child labour in East Africa, 28 October, 1938. *Man* 39, 10–11.

1939b Report of a discussion on Lord Hailey's 'African Survey', 25 November, 1938. *Man* 39, 11–12.

1939c Report of a discussion on 'the native of the land in South Africa', 16th December, 1938. *Man* 39, 43.

1939d Report of discussion: 'some problems of education in East Africa', 12th February, 1939. *Man* 39, 111.

1939e Report of discussion: 'native peasant economy and production for the international market', 12th May, 1939. *Man* 39, 111.

Clifford, James

1988 *The predicament of culture: Twentieth-century ethnography, literature, and art*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

コンラッド, J.

1958 『闇の奥』中野好夫訳, 東京: 岩波書店。(J. Conrad, *Heart of darkness*. 1899.)

Eggan, F.

1957 Froward. In A. R. Radcliffe-Brown, *A natural science of society*, pp. ix–xii. Glencoe, Ill.: The Free Press.

Elkin, A. P.

1956 A. R. Radcliffe-Brown, 1880–1955. *Oceania* 24(4), 239–251.

Evans-Pritchard, E. E.

1940 *The Nuer: a description of the modes of livelihood and political institutions of a Nilotic people*. London: Oxford University Press. (『ヌアー族』向井元子訳, 東京：岩波書店, 1978。)

1946 Applied anthropology. *Africa* 16(2), 92–98.

1949 *The Sanusi of Cyrenaica*. Oxford: Clarendon Press.

1951 *Kinship and marriage among the Nuer*. Oxford: Clarendon Press. (『ヌアー族の親族と結婚』長島信弘・向井元子訳, 東京：岩波書店, 1985。)

1962 Social anthropology. In Evans-Pritchard, *Social anthropology and other essays*, pp. 1–134. New York: The Free Press. (Originally published in 1951)。

Fabian, Johannes

1983 *Time and the other: how anthropology makes its object*. New York: Columbia University Press.

Firth, Raymond

1944 The future of social anthropology. *Man* 44, 19–22.

1957 Introduction: Malinowski as scientist and as man. In R. Rirth (ed.) *Man and culture: an evaluation of the work of Bronislaw Malinowski*, pp. 1–14. London: Routledge and Kegan Paul.

ファース，R.

1987 「序文」B. マリノフスキー『マリノフスキー日記』谷口佳子訳，pp. 13–25，東京：平凡社。(R. Firth, Preface. In B. Malinowski, *A diary in the strict sense of the term*. New York: Harcourt, Brace and World. 1967.)

Fortes, Meyer

1938 Culture contact as a dynamic process: an investigation in the Northern Territories of the Gold Coast. In Mair 1938b: 60–91.

1940 The political system of the Tallensi of the Northern Territories of the Gold Coast. In Fortes and Evans-Pritchard 1940c: 239–271.(「ゴールド＝コースト北部地域におけるタレンシ族の政治体系」M. フォーティス／E. E. エヴァンズ＝プリチャード編『アフリカの伝統的政治体系』pp. 290–334，東京：みすず書房，1972。)

1945 *The dynamics of clanship among the Tallensi: being the first part of an analysis of the social structure of a Trans-Volta tribe*. London: Oxford University Press.

1949 *The web of kinship among the Tallensi: the second part of an analysis of the social structure of a Trans-Volta tribe*. London: Oxford University Press.

1978 *An anthropologist's apprenticeship*. Annual review of anthropology 7, 1–30.

Fortes, Meyer and E. E. Evans-Pritchard

1940a Editors' note. In Fortes and Evans-Pritchard 1940c: vii–viii. (「編者のはしがき」M. フォーティス／E. E. エヴァンズ＝プリチャード編『アフリカの伝統的政治体系』pp. i–ii，東京：みすず書房，1972。)

1940b Introduction. In Fortes and Evans-Pritchard 1940c: 1–23.(「序論」M. フォーティス／E. E. エヴァンズ＝プリチャード編『アフリカの伝統的政治体系』pp. 19–80, 東京：みすず書房，1972。)

Fortes, Meyer and E. E. Evans-Pritchard (eds)

1940c *African political systems*. London: Oxford University Press. (『アフリカの伝統的政治体系』大森元吉ほか訳，東京：みすず書房，1972。)

ギアーツ，C.

1996 『文化の読み方／書き方』森泉弘次訳，東京：岩波書店。(C. Geertz, *Works and lives: the anthropologist as author*. Stanford: Stanford University Press. 1988)

Gluckman, Max

1947 Malinowski's 'functional' analysis of social change. *Africa* 17(2), 103–121.

Goody, Jack

1995 *The expansive moment: the rise of social anthropology in Britain and Africa 1918–1970*. Cambridge: Cambridge University Press.

ホブズボウム，E./T. レンジャー編

1992 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭ほか訳，東京：紀伊國屋書店。(E. E. Hobsbawm and T. Ranger (eds) *The invention of tradition*. Cambridge: Cambridge University Press. 1983.)

Hunter, Monica

1938 Contact between European and native in South Africa: 1. In Pondoland. In Mair 1938b: 9–24.

石田英一郎

1948 「民族学の発展のために——編集後記に代えて」『民族学研究』13, 363–368。

James, Wendy
1973 The anthropologist as reluctant imperialist. In T. Asad (ed.) *Anthropology and the colonial encounter*, pp. 41–69. London: Ithaca Press.
Kaberry, Phyllis
1957 Malinowski's contribution to fieldwork methods and the writing of ethnography. In R. W. Firth (ed.) *Man and culture: an evaluation of the work of Bronislaw Malinowski*, pp. 71–91. London: Routledge and Kegan Paul.
Keesing, Roger M.
1989 Creating the past: custom and identity in the contemporary Pacific. *The contemporary Pacific* 1 (1 & 2), 19–42.
Kuper, Adam
1983 *Anthropology and anthropologists: the modern British school*. London: Routledge and Kegan Paul.
1988 *The invention of primitive society: transformations of an illusion*. London and New York: Routledge.
Leach, Edmund R. (リーチ, E. R.)
1961 *Rethinking anthropology* (London School of Economics monographs on social anthropology 22). London: Athlone Press. (『人類学再考』青木保・井上兼行訳, 東京：思索社, 1974。)
1980 「処女懐胎説」『神話としての創世記』江河徹訳, pp. 151–216, 東京：紀伊國屋書店。(Virgin birth. *Proceedings of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland for 1966*, 39–49. 1967.)
1984 Glimpses of the unmentionable in the history of British social anthropology. *Annual review of anthropology* 13, 1–23.
ルクレール, C.
1976 『人類学と植民地主義』宮治一雄・宮治美江子訳, 東京：平凡社。(C. Leclerc, *Ahthropologie et colonialisme: essai sur l'histoire de l'africanisme*. Paris: Fayar. 1972)
レヴィ＝ストロース, C.
1972 「双分組織は実在するか」『構造人類学』荒川幾男ほか訳, pp. 148–179, 東京：みすず書房。(C. Lévi-Strauss, Les organisations dualistes existent-elles? *Bijdragen tot de taal-, land- en volkenkunde* 112 (2), 1956.)
Mair, Lucy
1938a The place of history in the study of culture contact. In Mair 1938b: 1–8.
1957 Malinowski and the study of social change. In R. W. Firth (ed.) *Man and culture: an evaluation of the work of Bronislaw Malinowski*, pp. 229–244. London: Routledge and Kegan Paul.
Mair, Lucy (ed.)
1938b *Methods of study of culture contact in Africa* (International African Institute memorandum XV). Oxford: Oxford University Press.
Malinowski, Bronislaw
1922 *Argonauts of the Western Pacific: an account of native enterprise and adventure in the arthipalagoes of Melanesian New Guinea*. London: George Roultedge and Sons. (『西太平洋の遠洋航海者』寺田和夫・増田義郎訳 (世界の名著59), 中央公論社, 1967。)
1929 Practical anthropology. *Africa* 2 (1), 22–38.
1930 The rationalization of anthropology and administration. *Africa* 3(4), 405–430.
1932 *Sexual life of savages in North-Western Melanesia* (third edition). London: Routledge and Kegan Paul. (『未開人の性生活』泉精一ほか訳, 東京：新泉社, 1971。)
1935a Appendix II: Confessions of ignorance and failure. In Malinowski 1935b, vol. 2, pp. 452–482.
1935b *Coral gardens and their magic*, 2 vols. London: George Allen and Unwin.
1938 Introductory essay on the anthropology of changing African cultures. In Mair 1938b: vii–xxxviii.

1939 The present state of studies in culture contact: some comments on an American approach. *Africa* 12, 27–48.
1944 *A scientific theory of culture and other essays*. Chapel Hill, N. C.: The University of North Carolina Press.（『文化の科学的理論』姫岡勤・上子武次訳，東京：岩波書店，1958。）
1945 *The dynamics of culture change: an inquiry into race relations in Africa*, edited by Phyllis M. Kaberry. New Haven and London: Yale University Press.（『文化変化の動態——アフリカにおける人種関係の研究』藤井正雄訳，東京：理想社，1964。）

Maquet, Jacques J.
1964 Objectivity in anthropology. *Current anthropology* 5(1), 47–55.

モース，M.
1973 「贈与論——太古の社会における交換の諸形態と契機」『社会学と人類学 I』有地亨ほか訳，pp. 219–400，東京：弘文堂。（M. Mauss, Essai sur le don: forme et raison de léchange dans les sociétés archaïques. *L'Année sociologique*, second série, tome 1, 1923–1924., 1925）

Mitchell, P. E.
1930 The anthropologists and the practical man: a reply and a question. *Africa* 3, 217–223.

Myres, John L.
1931 Presidential address: anthropology, pure and applied. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 61, xxv–xli.

永渕康之
1994 「1917年パリ大地震——植民地状況における文化形成の政治学」『国立民族学博物館研究報告』19(2), 259–310。

岡　正雄
1935 「独墺に於ける民俗学的研究」柳田国男編『日本民俗学研究』pp. 327–372，東京：岩波書店。
1943 「現代民族学の諸問題」『民族学研究』新1(1), 119–122。
1948 「民族学における二つの関心」『民族学研究』12(4), 306–311。

Payne, Harry C.
1981 Malinowski's style. *Proceedings of the American Philosophical Society* 125(6), 416–440.

Peterson, N.
1990 'Studying man and man's nature': the history of the institutionalisation of Aboriginal anthropology. *Australian Aboriginal studies* 1990(2), 3–19.

Radcliffe-Brown, A. R.
1922 *The Andaman islanders* (reprint, 1948). Glencoe: Free Press.
1930 The social organization of Australian tribes. *Oceania* 1(1), 34–63; 1(2), 206–246; 1(3), 322–341; 1(4), 426–456.
1940 On social structure. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 60, 1–12.
1952 *Structure and function in primitive society*. London: Cohen and West.（『未開社会における構造と機能』青柳真智子訳，東京：新泉社，1974。）
1957 *A natural science of society*. Glencoe, Ill.: The Free Press.

Radcliffe-Brown, A. R. and Daryll Forde (eds)
1950 *African systems of kinship and marriage*. London: Oxford University Press.

レンジャー，T.
1992 「植民地下のアフリカにおける作りだされた伝統」中林伸浩・亀井哲也訳，E. ホブズボウム／T. レンジャー編『創られた伝統』pp. 323–406，東京：紀伊國屋書店。（T. Ranger, The invention of tradition in colonial Africa. In E. Hobsbawm and T. Ranger (eds) *The invention of tradition*, pp. 211–262. Cambridge: Cambridge University Press. 1983.）

Richards, Audrey I.
1932 Anthropological problems in North-Eastern Rhodesia. *Africa* 5(2), 121–144.
1938 The village census in the study of culture contact. In Mair 1938b: 46–59.

1940 The political system of the Bemba tribe: North-eastern Rhodesia. In Fortes and Evans-Pritchard 1940c: 83–120.（「ベンバ族（北ローデシア）の政治体系」M. フォーティス／E. E. エヴァンズ＝プリチャード編『アフリカの伝統的政治体系』pp. 111–59，東京：みすず書房，1972。）
1944 Practical anthropology in the lifetime of the International African Institute. *Africa* 14(6), 289–301.

酒井直樹
1996 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』新曜社。

Schapera, I.
1938 Contact between European and native in South Africa: 2. In Bechuanaland. In Mair 1938b: 25–37. Oxford: Oxford University Press.
1940 The political organization of the Ngwato of Bechuanaland Protectorate. In Fortes and Evans-Pritchard 1940c: 56–82.（「ベチュアナランド保護領におけるエングワト族の政治組織」M. フォーティス／E. E. エヴァンズ＝プリチャード編『アフリカの伝統的政治体系』pp. 81–110，東京：みすず書房，1972。）
1962 Should anthropologists be historians? Presidential address. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 92(2), 143–156.

関口時正
1986 「ブロニスラフ・マリノフスキーの日記をめぐって」『西スラブ学論集』1, 77–95。

清水昭俊
1973 「家庭イデオロギー批判」『思想の科学』14, 15–36。（清水『家・身体・社会——家族の社会人類学』東京：弘文堂，1987年所収。）
1993 「永遠の未開文化と周辺民族——近代西欧人類学史点描」『国立民族学博物館研究報告』17(3), 417–488。
1995 「民族学と文化人類学——学会の改称問題によせて」『民博通信』70, 8–27。
1996 「植民地的状況と人類学」青木保ほか編『思想化される周辺世界』（講座文化人類学，12），pp. 1–29，東京：岩波書店。
1998 「周辺民族の現在」清水昭俊編『周辺民族の現在』pp. 15–63，京都：世界思想社。
n.d. Colonialism and the development of modern anthropology in Japan. In J. van Bremen and A. Shimizu (eds) *Anthropology and colonialism in Asia and Oceania*. London: Curzon (in press).

Smith, Edwin W.
1934 The story of the institute: a survey of seven years. *Africa* 7(1), 1–27.

スパイロ，M. E.
1990 『母系社会のエディプス——フロイト理論は普遍的か』井上兼行訳，東京：紀伊國屋書店。（M. E. Spiro, *Oedipus in the Trobriands*. Chicago: The University of Chicago Press. 1982.）

Stocking, George W., Jr.
1983 The ethnographer's magic: fieldwork in British anthropology from Tylor to Malinowski. In G. W. Stocking, Jr. (ed.) *Observers observed: essays on ethnographic fieldwork* (History of anthropology, 1), pp. 70–120. Madison, Wis.: The University of Wisconsin Press.
1984 Radcliffe-Brown and British social anthropology. In G. W. Stocking, Jr. (ed.) *Functionalism historicized: essays on British social anthropology* (History of anthropology, 2), pp. 131–191. Madison, Wis.: The University of Wisconsin Press.
1985 Philanthropoids and vanishing cultures: Rockefeller funding and the end of the museum era in Anglo-American anthropology. In G. W. Stocking, Jr. (ed.) *Objects and others: essays on museums and material culture* (History of anthropology, 3), pp. 112–145. Madison, Wis.: The University of Wisconsin Press.

鈴木二郎
1965 「（書評）『民族学ノート——岡正雄教授還暦紀念論文集』平凡社，1963」『民族学研究』30(3), 261–263.

Thomas, N.

1989 Material culture and colonial power: ethnological collecting and the establishment of colonial rule in Fiji. *Man* (N.S.) **24**, 41–56.

Trask, Haunani-Kay

1991 Natives and anthropologists: the colonial struggle. *The contemporary Pacific* 3, 159–167.

鶴見和子・川田侃編

1989 『内発的発展論』東京：東京大学出版会。